

博 多 21

—博多遺跡群第50次発掘調査概報—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第249集



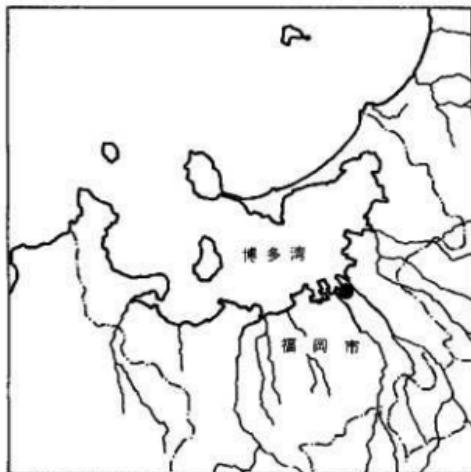
1991

福岡市教育委員会

博 多 21

—博多遺跡群第50次発掘調査概報—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第249集



1991

福岡市教育委員会

序

古くから我が国と大陸との主要な窓口であった福岡市には、数々の貴重な遺跡が残されています。とりわけ、JR博多駅から博多港にかけての市街地の地下に眠る博多遺跡群は、平安時代から戦国時代にかけて、大陸との貿易で繁栄した中世都市「博多」の遺跡です。

近年の都心部での再開発によって、博多遺跡群でもすでに70次にもおよぶ発掘調査が実施されてまいりました。本書は、その第50次調査の概要を報告するものです。

第50次調査では、古墳時代前期の竪穴住居跡をはじめ、中世前半期までの井戸、柱穴、溝などが検出されました。また、膨大な量の輸入陶磁器に代表される遺物が出土しています。これらは、中世博多の生活を物語る資料として、注目されるものです。

本書が、市民の皆様の文化財に対する理解を深めていく上で広く活用されると共に、学術研究の分野でも貢献できれば幸いです。

発掘調査から資料整理までの費用負担・便宜にご協力をいただいた上成建設株式会社を始めとする多くの方々のご協力に対し、心から謝意を表すものです。

平成3年1月10日

福岡市教育委員会

教育長 井口雄哉

例言・凡例

1. 本書は、ビル建設に先立ち、福岡市教育委員会が調査を実施した、博多遺跡群第50次調査（博多区祇園町317・318）の概要報告書である。
2. 本書の編集・執筆は、大庭康時が行なった。
3. 本書に使用した遺構実測図は、大庭・山口満・馬瀬直子が、遺物実測図は、大庭・山口満・森本朝子・井上涼子・河邊浩征があたった。整図には、森本・井上・小金丸昌世・矢野朋子・上村智美・江頭公子が分担してあたった。
4. 本書に使用した遺構写真は、大庭が撮影した。また、遺物写真は、大庭が撮影し、森尾朱美が焼付した。
5. 遺物の整理には、牛垣綾子・保利みや子・古谷宏子・村田喜代美・瀬戸満寿江・楠葉恭子・井上涼子・小金丸昌世・古谷祥子・萩尾朱美・木龍まゆみ・平井京子・越後幸子・田中真樹・佐藤恵美子・野尻スズ子らがあたった。また、銅錢の锈落し・集計・拓本には、馬瀬直子があたった。
6. 本書に使用した遺構番号は、発掘調査時につけた調査番号を、そのまま用いている。出土遺物の注記、発掘調査の記録類は、すべてこの通し番号によっている。
7. 本書に示した遺物は、遺構ごとに通し番号とした。
8. 本書に使用した方位は、実測図・本文ともに磁北を用いている。
9. 本調査に関するすべての記録類、出土遺物は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、収蔵管理される予定である。

遺跡調査番号	8918		遺跡略号	HKT50	
調査地地番	博多区祇園町317・318		分布地図番号	天神49	
開発面積	859.39m ²	調査対象面積	808.07m ²	調査実施面積	808.07m ²
調査期間	1989年6月5日～10月14日				

本文目次

第一章　はじめに.....	1
1. 発掘調査にいたるまで.....	1
2. 発掘調査の組織と構成.....	1
3. 遺跡の立地と歴史的環境.....	2
第二章　調査の記録.....	5
1. 発掘調査の経過.....	5
2. 調査地点の基本層序.....	6
3. 各遺構検出面の概要.....	7
第1面.....	7
第2面.....	8
第3面.....	10
第4面.....	11
4. 中世の遺構・遺物.....	14
176号遺構.....	14
256号遺構.....	16
260号遺構.....	17
297号遺構.....	18
442号遺構.....	20
527号遺構.....	22
535号遺構.....	23
599号遺構.....	25
640号遺構.....	29
642号遺構.....	33
649号遺構.....	36
652号遺構.....	44
757号遺構.....	48
758号遺構.....	50

931号遺構	54
1016号遺構	56
5. 古代の遺構・遺物	58
883号遺構	58
6. 古墳時代の遺構・遺物	60
826号遺構	60
871号遺構	61
880号遺構	63
892号遺構	64
905号遺構	68
906号遺構 (=891号遺構)	71
945号遺構	74
987号遺構	84
988号遺構	86
989号遺構	88
1015号遺構	90
7. その他の遺物	91
第三章　まとめ	102
付篇	博多造跡群第50次調査の赤色顔料について
	福岡市埋蔵文化財センター　本田光子
	107

第一章 はじめに

1. 発掘調査にいたるまで

1988年2月10日、上成建設株式会社より、福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課に対して、福岡市博多区祇園町317・318番について、マンション建設にかかる、埋蔵文化財開発事前調査願いが出された。同地は、福岡市教育委員会が博多遺跡群として周知している地域内にあり、周辺の既往の調査からも、遺跡の存在が予想される地点であった。そこで、1988年2月25日、福岡市教育委員会埋蔵文化財課第2係の事前審査担当、米倉秀紀によって、試掘調査が実施され、現地表下1m～2.5mについて、遺物包含層の存在が確認された。それを受け、埋蔵文化財課では、申請地の全面について発掘調査が必要であると判断し、上成建設株式会社と協議に至った。その結果、申請地の内、建物建設予定部分ということで、808.07m²について、発掘調査を実施することで受託契約を結んだ。

発掘調査は、上成建設株式会社による表土すき取り（現地表マイナス1.0m）に続いて着手することになり、1989年6月5日より表土すき取りに立会、6月12日より現場作業に入った。

2. 発掘調査の組織と構成

調査委託	上成建設株式会社
調査主体	福岡市教育委員会 教育長 佐藤善郎
調査総括	埋蔵文化財課長 柳田純孝 埋蔵文化財第2係長 柳沢一男
調査庶務	埋蔵文化財第1係 松延好文
調査担当	埋蔵文化財第2係 大庭康時
調査補助	山口満
調査作業	岩隈史郎、熊本義徳、関義種、高浪信夫、森山恭助、山崎光一、近藤誠一、白土廣信、玉田英仁、水町一裕、前川修一、篠崎伝三郎、森垣隆視、梅藤利雄、木下浩幸、江越初代、森山タツエ、濱地フサエ、曾根崎昭子、関加代子、柳瀬伸、近藤澄江、村田敬子、村崎祐子、衛藤富子、岩本朝子、平本つた江、武田潤子、佐藤撰子、吉住シヅエ、津川真千代、畠山由布子

3. 遺跡の立地と歴史的環境

博多遺跡群は、中世都市「博多」を主として、弥生時代から近世、さらに現代までつづく複合遺跡である。地理的には、玄海灘に面する博多湾岸に形成された砂丘上に位置し、西を博多川（那珂川）、東は江戸時代に開墾された石堂川（御笠川）、南は石堂川開削以前に那珂川に向って西流していた旧比恵川（御笠川）によって両される。

この御笠川と那珂川にはさまれた地域は、弥生時代以後の主要な遺跡がならぶ地域でもある。上流側から著名なものをあげると、奴国を中心地であり、奴国土墳も発見された須玖岡本遺跡を中心とする一帯の遺跡群、朝鮮系無文土器が多く出土した諸岡遺跡、日本最古の水田・環濠集落として知られる板付遺跡、弥生時代の青銅器鋳造地のひとつである那珂遺跡、弥生時代後期の環溝群や綱でまいた銅剣が甕棺より出土した比恵遺跡など、ほぼ直線上にならんでいる。

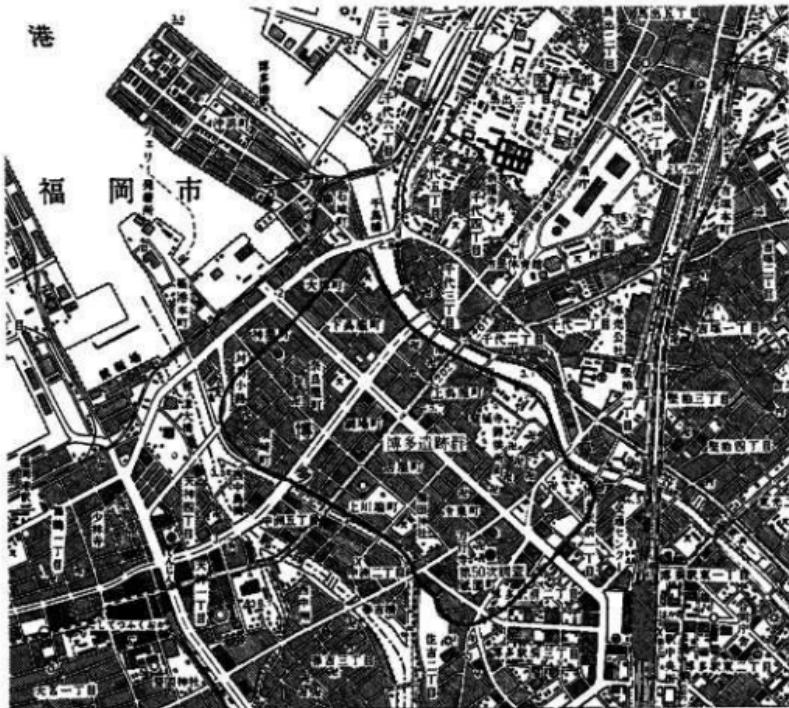


Fig. 1 博多遺跡群位置図 (1/25,000)

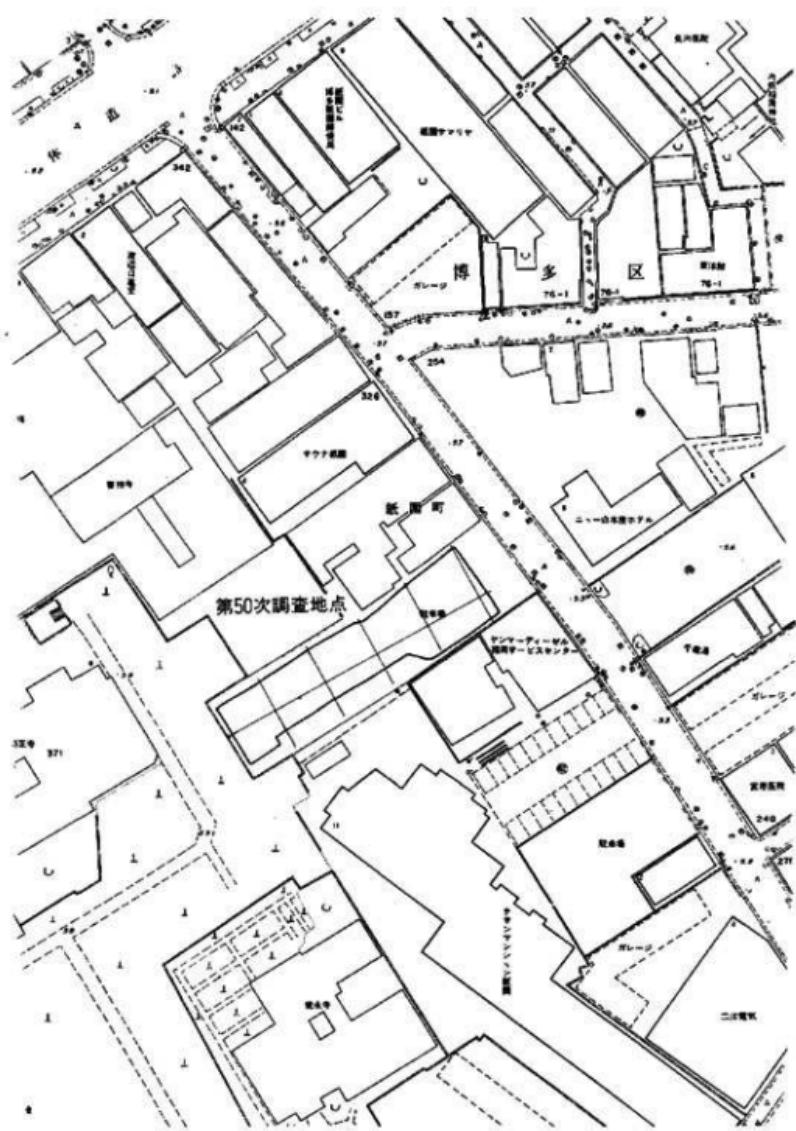
博多遺跡群で調査されている弥生時代中期・後期の集落、焼棺墓群は、これら諸遺跡の延長上で理解できるであろう。さらに、そのまま博多湾を渡ると、志賀島の「漢委奴國王」金印出土遺跡にあたる。弥生時代中期に、周辺に可耕地をもたない砂丘上に忽然と出現する博多遺跡群は、奴国の海上活動の拠点集落として位置づけられる。五世紀後半に築かれたとされる博多1号墳(前方後円墳、推定墳丘長60m)も、那珂川右岸に展開する一連の前方後円墳の流れの中で考えられよう。6世紀後半には、那の津官家が設置される。その推定位置については、福岡市南区三宅があてられてきたが、1984年比恵遺跡で柵列に閉まれた倉庫群が検出されるに及んで、これを官家にあてる説が浮上してきた。官家の位置、実態については未だ決着をみていないが、比恵遺跡では、これに後続する官衙風の配置をとる建物遺構が検出されており、この地域が依然として有力な地位を保っていたことを示している。

律令時代にはいると、御笠川の最上流に大宰府がおかれて、九州の政治・軍事的中心地となる。博多湾岸には、博多遺跡群とは入海(湿地)を隔てて西の丘陵上に、対外交渉の拠点として鴻臚館がおかれた。博多遺跡群に官衙がおかれた記録はないが、石帯・銅製帶金具・墨書き須恵器・須恵器鏡・皇朝鏡・鴻臚館式瓦・老子式瓦などが出土しており、律令官人の存在が推定できる。

平安時代後半になって律令体制が弛緩すると、対外貿易も京都の中央政府の直接の掌握から、大宰府を通じての管理へと変質する。これが、大宰府官人による蓄財のための私貿易の拡大をもたらしたであろうことは、想像にかたくない。こうした流れの中で、11世紀には、博多に宋商人の居留がしられる様になる。博多遺跡群が本格的に繁栄・展開するのは11世紀後半からで、膨大な量の輸入陶磁器が出土している。

鎌倉時代、2度にわたる元寇で博多付近は戦場になるが、13世紀末には、鎮西探題が博多に設置され、博多は貿易の中心地というのみではなく、九州の政治的中心地という面も持つにいたる。遺構の上では、13世紀末から14世紀初めにかけて、あちこちに道路がつくられており、それらは、室町時代末まで続いている。これらの道路は、必ずしも相互に規則性を持っていない様だが、中世後半を通じての博多の街区、景観はここにつくられたと言えよう。

室町時代にはいって、博多には九州探題がおかれたが、その後、筑前の少弐氏、豊後の大友氏、周防の大内氏による争奪の対象となつた。室町時代後半には、隣となりて、自治都市として著名だが、度々兵火にかかり、1586年には中国の毛利氏の軍と対峙した薩摩の島津氏の軍によって焼かれ、灰燼に帰す。島津氏を逐つて九州平定をとげた豊臣秀吉は、博多の復興をする。これがいわゆる太閤街割りであり、この時点では鎌倉時代以来続いた博多の諸道路、街区は、廃される。こうして、中世都市博多は近世都市に生まれかわる。しかし、江戸時代にはいり、鎖国政策がとられるに及んで、貿易都市としての博多は幕をおろし、城下町福岡と対をなす商人町博多として、福岡藩の藩都となり、そのまま明治維新をむかえるのである。



第二章 発掘調査の記録

1. 発掘調査の経過

発掘調査は、1989年6月5日に着手し、10月14日に終了した。ただし、6月5日から9日までは、上成建設による表土すき取りが行われている。表土すき取りは、近・現代の擾乱層を除去する目的で、試掘調査の結果に基づき、現地表下1.3mまでを一率に掘り取ったが、このため近世以降の包含層も削除する結果となっている。

調査区には中央には、調査区を横断する様に擾乱が入っていた。この擾乱から西側をI区、東側をII区として、調査を行なっている。また、調査区西側は近世以降、近代まで寺院敷地内であり、墓地となっていた。墓は、すでに改葬されており、施設としては残されてはいなかつたが、この際の擾乱が、軒々と残っていた。調査は、これらの擾乱部分を除去することから始まった。

博多遺跡群の場合、最下層は砂丘上面の砂層を遺構検出面とするが、その上に数メートルにわたって、継続した生活面が形成されている。この間、堆積土壤に変化はあるが、それを面的に識別するのは不可能に近く、緻密な意味での單一時期の生活面を検出するのは、困難である。そこで、発掘調査にあたっては、掘り下げ→遺構検出→精査→記録→掘り下げをくり返し、半ば意識的に遺構検出面を設定して、遺構調査と遺物取り上げを行なった。その結果、4面の遺構検出面を調査した。上層から、順次第1面、第2面…と呼ぶ。

調査のおおまかな経過は、次の通りである。

6月5日～9日	表土すき取り
6月12日～13日	擾乱除去
6月14日～7月8日	第1面調査
7月10日～15日	掘り下げ
7月17日～8月8日	第2面調査
8月9日～8月10日	I区掘り下げ
8月16日～17日	II区掘り下げ
8月10日～9月8日	第3面調査
9月8日～14日	掘り下げ
9月16日～10月13日	第4面調査
10月3日～10月13日	井戸掘り下げ
10月14日～17日	器材片付け、撤去、調査終了

2. 調査地点の基本層序

第50次調査地点は、砂丘砂の上面である、淡黄色砂を基盤層（地山）とする。淡黄色砂層の上には、灰色砂層が厚く堆積する。灰色砂層中には、網目状の層理がみられ、風成砂であることを示す。風成砂のうえには、灰色～褐色土層が堆積する。これは、若干の変化を示しながら、現地表面までつづく。淡黄色砂上には平安時代前期以前、風成砂上には平安時代末、灰色～褐色土中には平安時代末以降の生活面が営まれる。Fig. 3・4に、第1面以下の土層柱状図を示す。

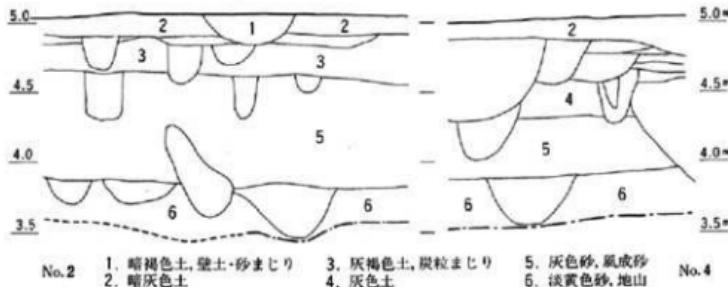
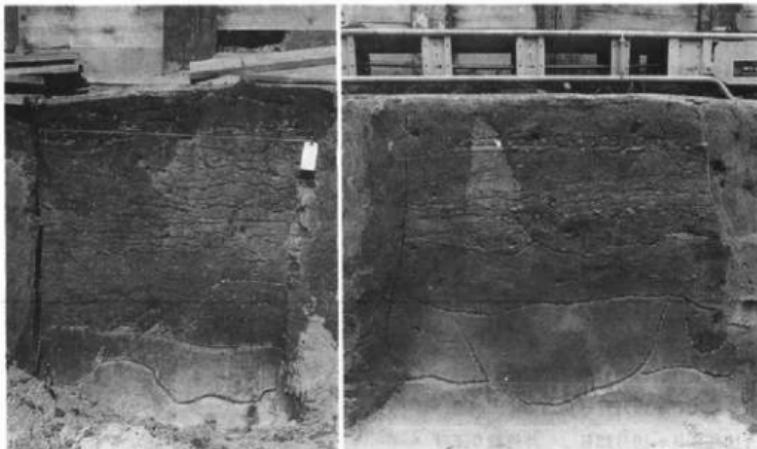


Fig. 3 土層柱状図



(1) 柱状図No.1 (南より) (2) 柱状図No.3 (南より)

Fig. 4 土層断面

3. 各遺構検出面の概要

第1面

標高4.8~5.0mで調査した遺構検出面である。

調査区の西側を中心として、近世以降の墓地改葬による擾乱層が点々とみられた。近世陶器を主に、ガラス・コンクリート片にいたるまで、多種多様な遺物が含まれていた。注目されるものに、江戸時代末の土師器の貯金箱（壺型）がある（第三章まとめ参照）。また、博多遺跡群のはずれにあたる、瓦町（江戸時代に瓦職人の居住区があったところ）で近代につくられた、瓦町焼きと呼ばれる素焼きの七輪等も出土している。

第1面では、232基の遺構が検出された。内訳は、柱穴・土壤・溝・井戸などである。柱穴では、北東から南西に、列をなして並ぶ傾向があるよう見える。大きくは、2列あるようだが、



Fig. 5 第1面全景（東より）

調査区の幅が狭いので、断言はできない。しかし、これが家割り・屋敷地割りを示唆する可能性は考えられる。方位としては、おおむね、N-65°-Eにとる。時期は、出土遺物から、13世紀代、降っても14世紀前半である。

第1面で検出された井戸は、4基で、近世以降の井戸が3基含まれている。

土壤は、ほとんどがゴミ穴である。一部、長方形かそれに近い平面形をとり、墓壙かと思われるものもあるが、確証は得られていない。

溝は、調査区西寄りから2条検出されているが、近世のものである。

第1面の年代観としては、13世紀代である。14世紀前半までの遺構も含まれているが、以後のものではなく、いきなり近世の遺構が重なっている。

第2面

標高4.5~4.6mで調査した遺構検出面である。

第2面では、299基の遺構が検出された。検出された遺構は、柱穴・土壙・井戸である。

柱穴は、小規模なものが多く、また調査区の幅が狭いことから、建物址を復原するにはいたっていない。

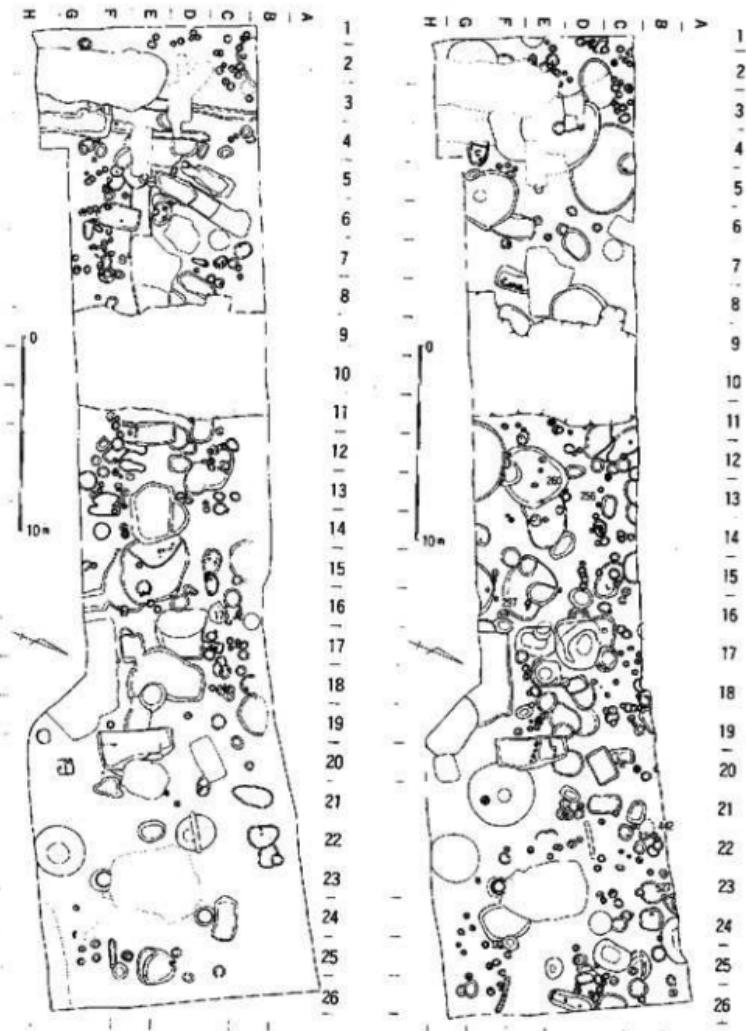
土壙では、不整形の廐棄壙が多い中で、297号遺構が注目される。297号遺構は、円形の小土壙の中に、中国製の陶器壺を倒置して埋納したもので、壺の内側には、木製の棒（枝？）が立てられていた。地鎮もしくは、何らかの宗教的行為にかかるものと推測される（P.18・19）。その他、長方形の土壙で、墓壙かと思われるものもあるが、墓であるという確証は、えられなかった。

井戸は、10基を検出した。調査区西端に集中してかたまっている。

第2面の年代観は、大体13世紀代を考えているが、一部12世紀後半代のものも含まれている。



Fig. 6 第2面全景（東より）



第1面

Fig. 7 第1面, 第2面造構平面図 (1/300)

第3面

標高4.1~4.3mで調査した遺構検出面である。

第3面では、234基の遺構を検出した。検出した遺構は、柱穴・土塙・溝・井戸である。

柱穴は、建物を復原することはできなかったが、D~F-5~8区とB-19, B·C-21, B-D-22, B-E-25, B-F-26区に比較的集中している。この部分に建物を想定することが、可能であろう。

土塙では、大量に土師器を廃棄した、いわゆる土器瘤状のものが目立つ。これらの分布をみると、I区では全くみつかっていない。さらに、640号遺構(P.28~32), 649号遺構(P.36~43), 652号遺構(P.44~47)の3基が、F-23~25区に集中している点に注目したい。この3基は、いずれも12世紀前半代の遺構で、時期的にも近接している。同一の屋敷地内に属し、ゴミ廃棄の場として、連続して設けられた土塙と考えたい。なお、C-2·3区から検出された535号遺構(P.23~24)は、第2面において、第1面からの近世の擾乱に切られた形で検出された419号遺構の下部にある。したがって本来は第2面に属する遺構である。

溝としては、C-24, D-24·25·26, E-26区において、758号遺構を調査した(P.50~53)。東西方向を示す溝で、C-24·D-24区において立ち上がりてしまい、それ以上西にはのびていない。第2面の遺構検出を行なった際に、丁度この場所で、東西方向に土器片が集中して分布する様子がみられた。その為、溝状の遺構の存在は十分予想されたが、第2面においては、そのプランを明確にとらえきれず、第3面で検出したものである。したがって、本来



Fig. 8 第3面I区全景(東より)

は、第2面にともなう遺構である。

井戸は、1区から、3基を検出している。

第3面の時期は、12世紀前半を主として、12世紀後半までをあてられる。

第4面

標高3.3~3.7mで調査した遺構検出面である。基盤である、砂丘上面の淡黄色砂において、遺構を検出・調査している。

第4面では、273基の遺構を検出した。検出した遺構は、柱穴・土壙・溝・井戸・竪穴住居址である。

柱穴は、規模が小さく、遺物の出土しないものが多い。第4面と第3面との間には、厚く堆積した風成砂層があり、小柱穴が、風成砂層を貫通して第4面上に達することは、な



Fig. 9 第3面II区全景(東より)



Fig. 10 第4面I区全景(東より)

いと思われる所以、これらの柱穴は平安時代前期以前のものであろう。

土壌は、12世紀前半のものがほとんどで、第3面と風成砂層との間から掘りこまれたものである。

溝は、平行する2条の溝が検出されている。遺物は少ないが、風成砂層の下から掘りこまれており、平安時代前期以前の遺構である。

井戸は、7基が調査されたが、中世以降のものも含む。

竪穴住居は、4世紀前半のものと、6世紀代のものとがある(P.102-103)。

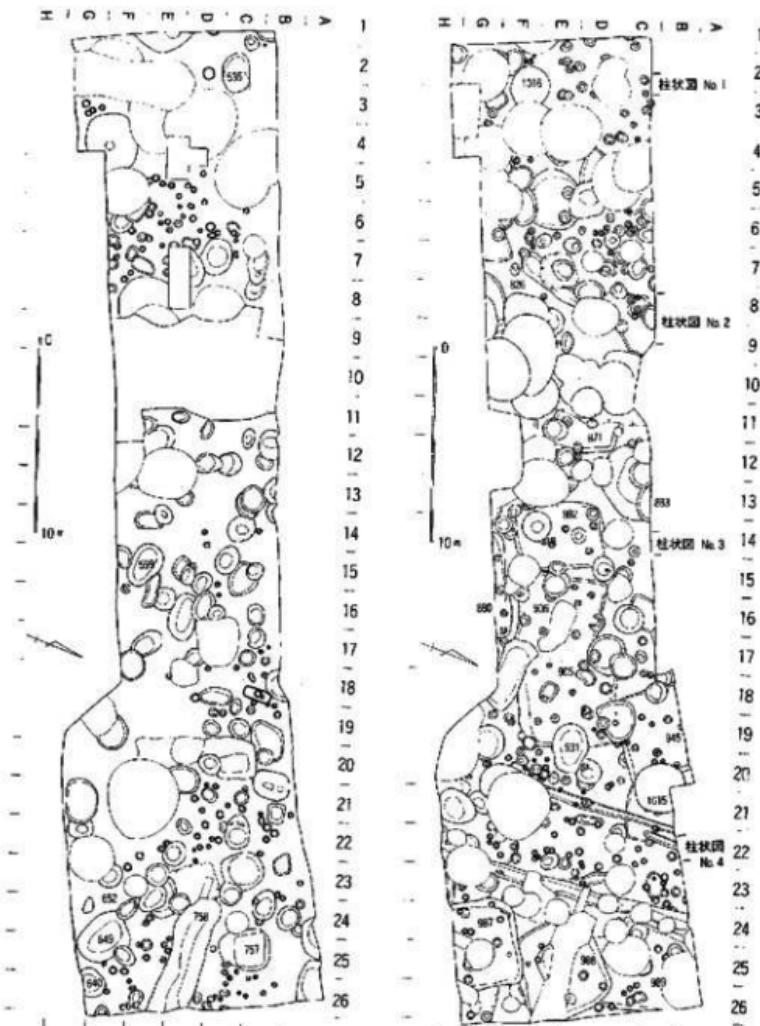
弥生時代の遺物も採集されたが、遺構としては、検出されていない。周辺に弥生時代の遺構が残されているものと考えたい。



Fig. 11 第4面全景（東より）



Fig. 12 第4面II区東端（東より）



第3面 第4面

4. 中世の遺構・遺物

176号遺構

第1面C-16区より検出した土壙である。長径98cm、短径92cmの橢円形を呈し、深さは28cmをはかる。埋土中位から上位にかけて、遺物が出土している。

出土遺物は、土師器・青磁・白磁・陶器・瓦などである。1~3は、土師器である。1・2は黒で、口径8.8cm、器高はそれぞれ1.0cm・1.1cmをはかる。回転糸切りで、体部は回転ナデ、内部にはナデ調整を施す。3は壊である。口径13.0cm、器高2.4cm、回転糸切りである。4は、青白磁の合子である。5~9は、白磁である。10・11は、青磁である。12~14は、陶器である。12は黄釉陶器の盤である。口縁部に目痕がつく。13は、褐釉陶器の鉢である。14は、緑褐色の釉を施した甕である。15・16は平瓦片で、焼成は須恵質となる。

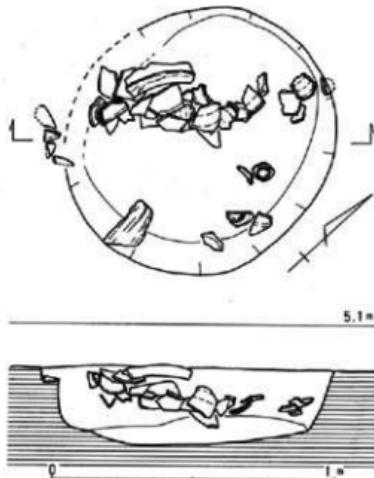


Fig. 14 176号遺構実測図 (1/20)



Fig. 15 176号遺構 (南東より)

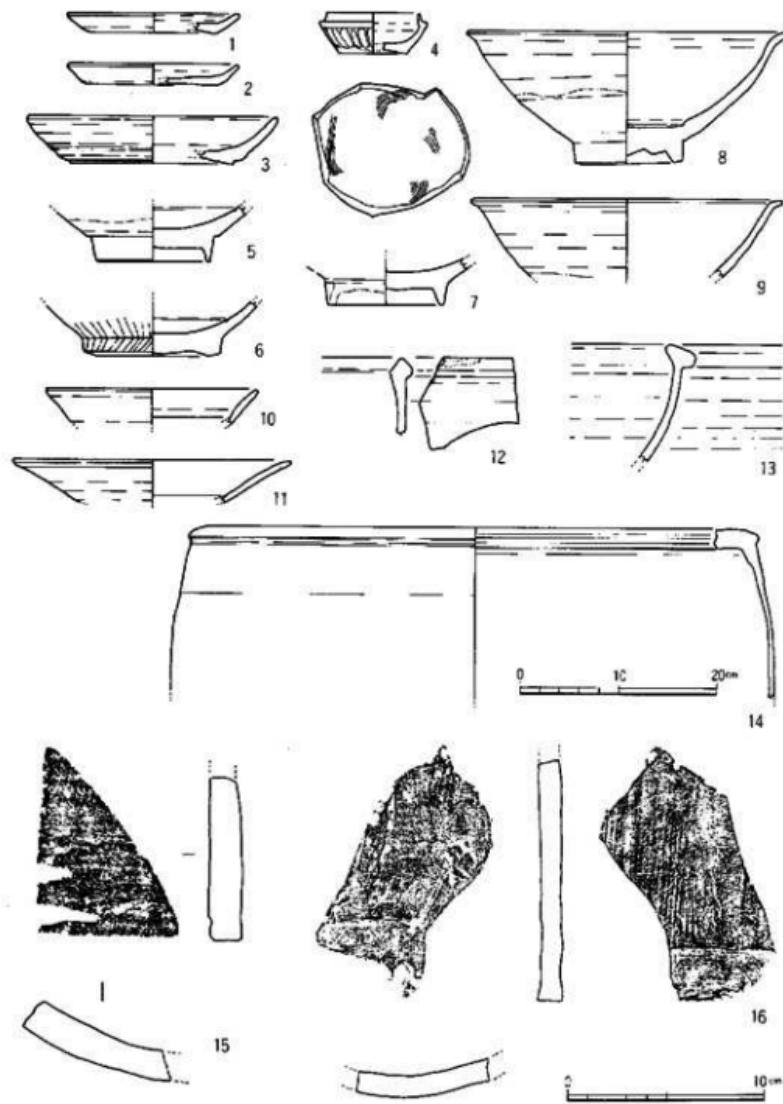


Fig. 16 176号道橋出土遺物実測図 (1/3・14…1/6)

256号遺構

第2面D-12・13区より検出した土壤である。長径104cm、短径65cmの卵形を呈し、深さは30cmをはかる。埋土の中位より、完形品の土師器環を含む遺物が出土している。

出土遺物は、土師器・青磁・白磁・瓦・陶器片などが出土した。1～3は、土師器の环である。口径はそれぞれ12.2cm、12.4cm、13.0cm、器高は2.65cm、2.45cm、2.8cmをはかる。外底部はすべて回転糸切りする。体部および内面は、回転ナデ調整する。2の内底部には、さらにナデ調整を施し、外底部には板目圧痕がつく。4は、青磁の皿である。見込みには、櫛描きの雷文と片切り彫りが施される。同安窯系である。

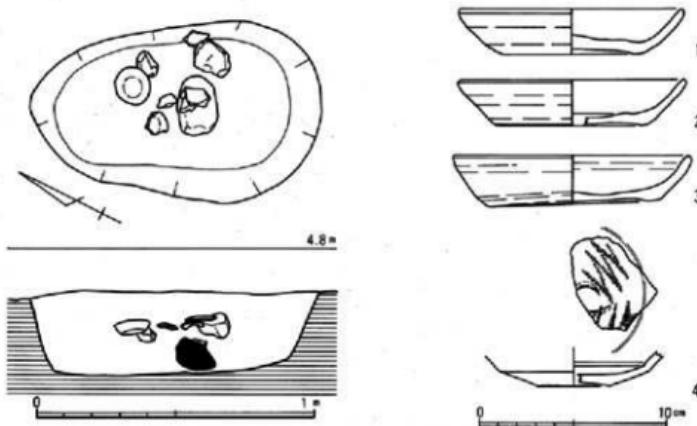


Fig. 17 256号遺構実測図(1/20) 出土遺物実測図(1/3)



Fig. 18 256号遺構(東より)

260号遺構



Fig. 19 260号遺構（北より）

第2面D-12・13, E-12・13, F-12・13区より検出した井戸である。長径270cm, 短径245cmの楕円形を呈する掘りかたを持ち、掘りかたの南隅に寄って、径約65cmの井側を設けている。

井側は、木桶を立てたものであるが、木質が腐朽して痕跡しか残っておらず、詳細は不明である。少なくとも66cm以上の高さを持つ。

出土遺物は、土師器・東播系須恵器・青磁・白磁・青白磁・陶器・天目・土産・石鍋・瓦などが出土している。12世紀後半頃の井戸である。

286号遺構



Fig. 20 286号遺構（東北より）

第2面D-14・15, E-14・15区より検出した土壙である。長軸160cm, 短軸90cmの長橢円形を呈する。深さは、約30cmをはかる。

埋土中位から上位にかけて、遺物が出土した。出土状況からは、土壙の北東側より流れ込んだものと推測される。

出土遺物は、土師器(糸切り底)・青磁・白磁・瓦器・陶器などである。おおむね、12世紀後半から13世紀初めにかかる時期のものと考えられる。

297号遺構

第2面F-16区で検出した土壌である。直径約55cmのほぼ円形のプランをとり、深さは23cmをはかる。土壌中に壺が倒置されており、その底部までの深さを考えると、土壌の深さは、少なくとも35cm以上はあったものと考えられる。

土壌埋土中に、陶器壺が口縁を下にして立てられていた。陶器壺の内側には、木の棒材が立てかけられており、その他には何も納められてはいなかった。棒材は、いまだ樹種鑑定を行なっていないが、柳かそれに類するものと思われる。表面はあれていてはっきりとはしないが、面取りをした形跡がなく、径1.5~2cm程度の枝を、12cm程の長さに折り取ったものの様で、表面観察からは、何ら付着物はみられなかった。この他に、埋土中に含まれた遺物を除けば、埋納された遺物はなく、地鎮もしくは、何らかの宗教的な行為にかかる遺構と考えられる。なお、土層断面でみれば、壺は土壌床面からやや浮いた状態をとるが、この土壌は壺を埋設するために掘られたものであろうから、土壌掘削から埋納までの間にほとんど時間差はなかったとみるべきで、土壌を掘った際の残土が、かき出されずに残った為であろう。



Fig. 21 297号遺構（西より）

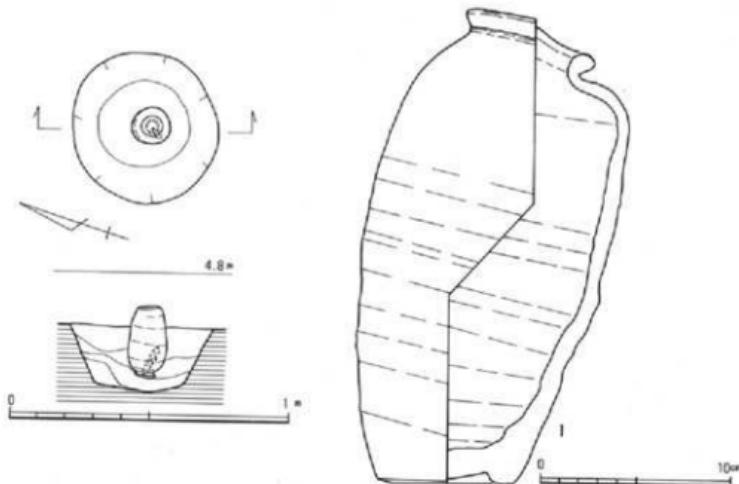


Fig. 22 297号遺構実測図 (1/20) 出土遺物実測図 (1/3)

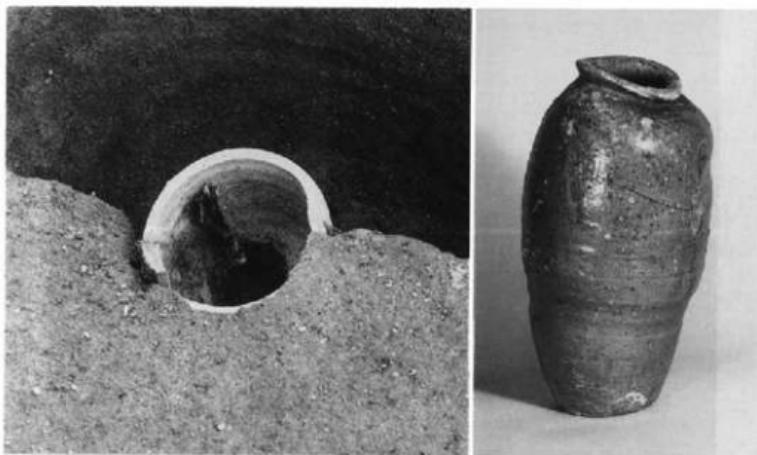


Fig. 23 297号遺構木棒出土状況

Fig. 24 297号遺物出土遺物

Fig.22の1は、陶器の壺である。オリーブ色の不透明な釉がうすくかかる。ひずみが大きい。このほか、土師器・青磁・白磁・陶器の小片が出土している。12世紀後半～13世紀初め頃か。

442号遺構

第1面からの掘り下げ時に、B-22区から、径60cm程の範囲で、遺物が出土した。本来は、土壤などの遺構にともなったものであろう。

出土遺物は、土師器・青磁・白磁・青白磁・陶器・鐵滓・鐵釘などである。1～5は、土師器である。1～4は皿で、口径8.2～10.0cm、器高0.7～1.2cm。1～3は回転糸切りで、内底部にナデ調整を施す。4は、ヘラ切り離しである。6は青白磁である。7～9は白磁である。9の見込みは、蛇の目状に釉をかき取る。11～18は、青磁である。17～22は陶器である。17・18は、黒褐色の釉を施す。19・20は越州窯系で、オリーブ色の釉を施す。21・22は、灰黄色釉を施す。

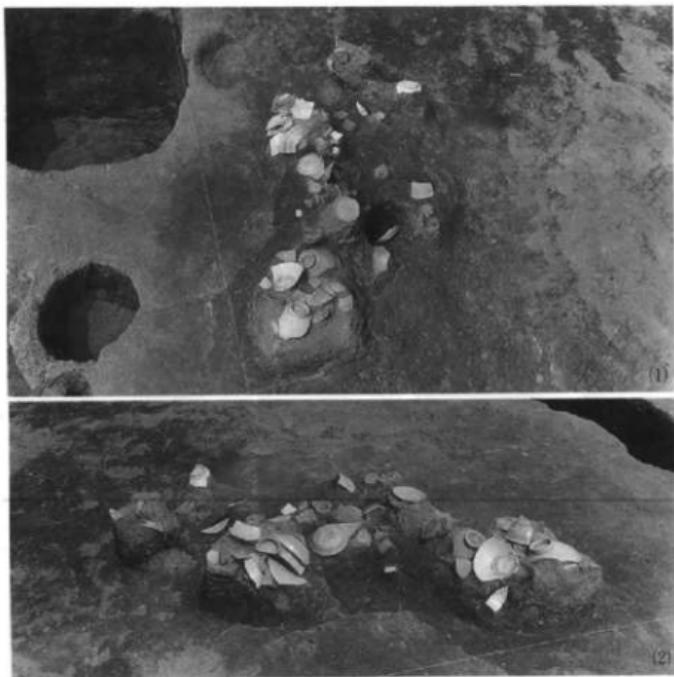


Fig. 25 442号遺構 (1)南東より(2)南西より

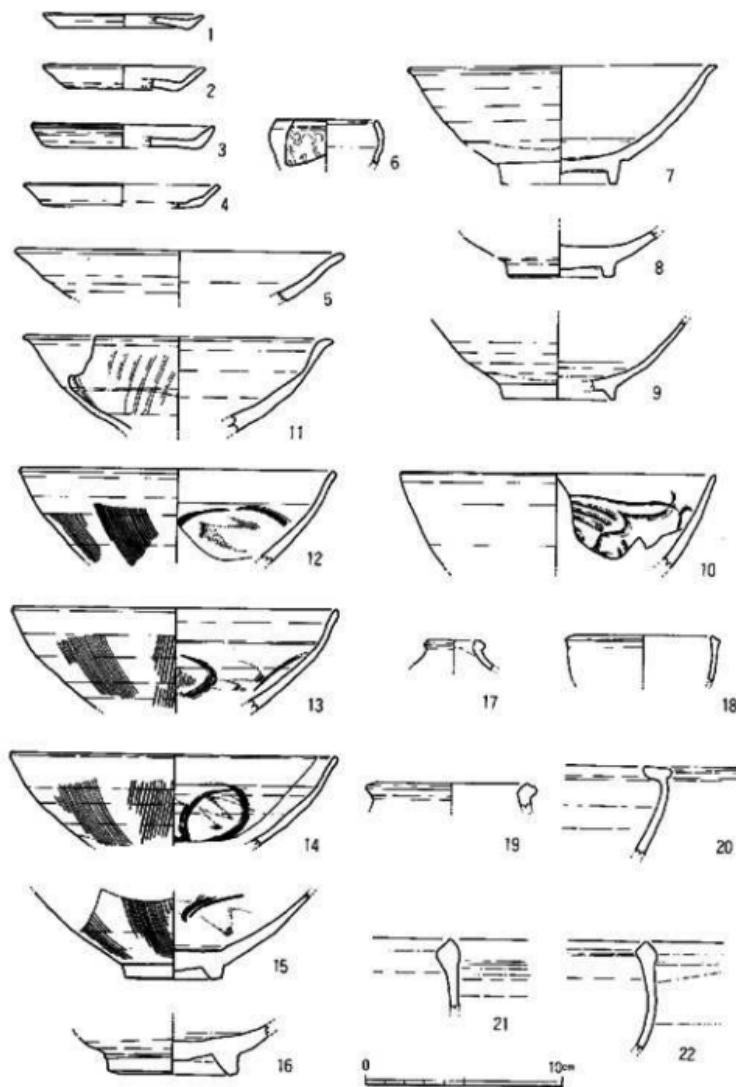


Fig. 26 442号遗構出土遺物実測図 (1/3)

527号遺構

第2面B-23区より検出した、不整形の土壙である。

出土遺物は、土師器・白磁・青磁・陶器・砾石等である。1～8は、土師器である。1～4は皿で、口径7.8～8.5cm、器高1.05～1.4cmをはかる。5～8は環で、口径11.4～12.8cm、器高2.5～2.95cmをはかる。皿・環とも、回転糸切り底に板目压痕を持ち、内底部にはナデ調整を施す。9・10は青磁である。11は、陶器の鉢である。灰色の釉を施す。内底と体部下位に目痕が

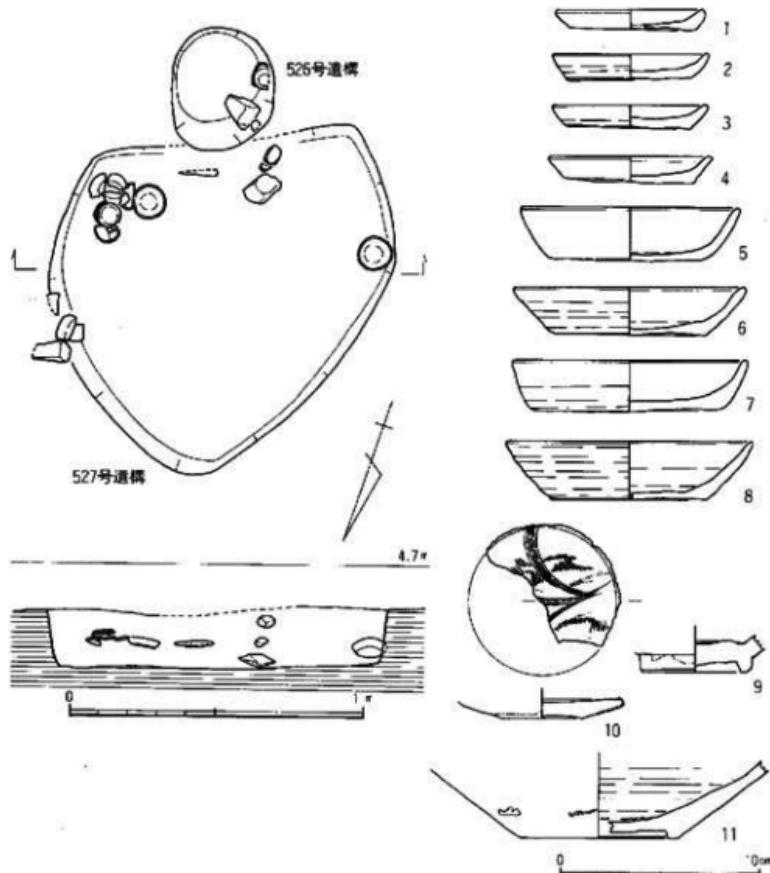


Fig. 27 527号遺構実測図 (1/20) 山土遺物実測図 (1/3)

つく。遺物が少なく、時期比定がむづかしい
が、13世紀前半におかれるとと思われる。

535号遺構

第3面C-2・3区で検出した土壌である。長軸210cm、短軸140cmの小判形を呈し、深さは、152cmをはかる。東壁面は、オーバーハング気味に立ち上がる。

出土遺物は、土師器・瓦質土器・青磁・白磁・陶器・石鍋などである。1~24は、土師器である。1~13は皿で、形態から4タイプに分類できる。8・10~12は、浅皿形で、体部が断面三角形の肉厚なもの。口径7.9~8.1cm、器高1.2~1.35cmをはかる。13も浅皿形だが、全体に器内が薄く、低い。口径8.4cm、器高0.75cm。1~6・8は、体部の立ち上がりが強く、器内の厚さも均一なものでやや内湾気味につくる。口径7.6~8.0cm、器高1.3~1.5cm。7は、肉が厚めで断面三角形を呈する体部が、まっすぐに開いてのびるもので、口径7.9cm、器高1.4cmをはかる。すべて回転糸切り底に板状压痕と内底部のナデ調整をもつ。14~24は壺である。口径11.6~12.8cm、器高2.5~3.15cmをはかる。外底はすべて回転糸切り、15~19・21・22・24の外底部には、板目压痕が、内底部にはナデ調整を施している。25~28は、青磁である。27には、鎧蓮弁文が描かれている。29~31は白磁である。29は、いわゆる口ハゲにつくる。32は瓦質土器の鉢である。33は、黄釉陶器の盤である。口縁部上面に、目痕がつく。34は滑石製石鏡である。



Fig. 28 527号遺構（北より）

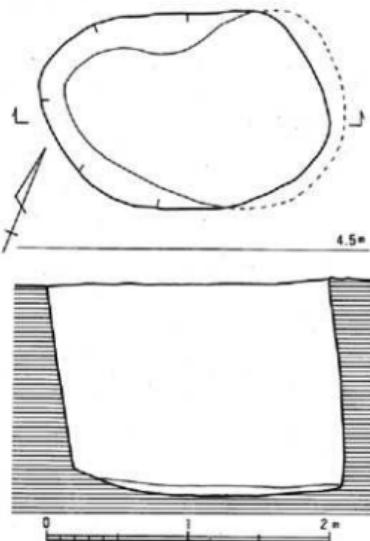


Fig. 29 535号遺構実測図（1/40）

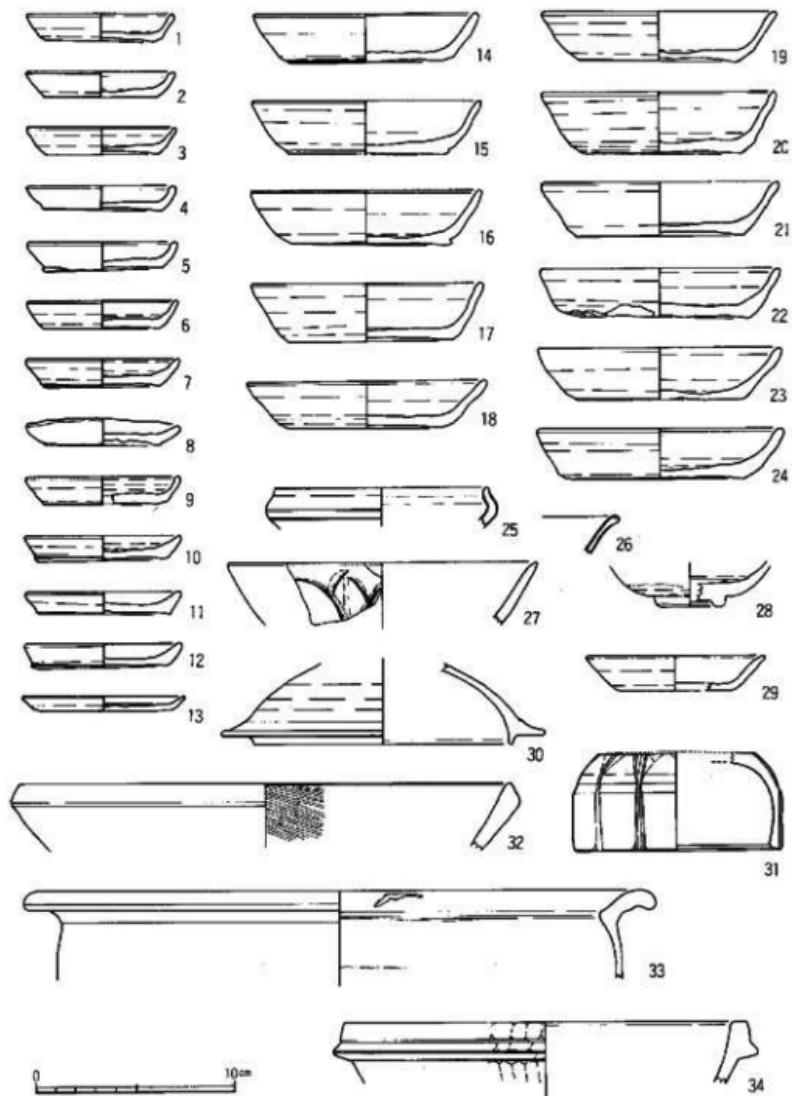


Fig. 30 535号造構出土遺物実測図 (1/3)

599号遺構

第3面E-15区で検出した上坡である。長軸210cm、短軸165cmの楕円形のプランを呈し、深さは約135cmをはかる。埋土の堆積状況をみると、土壤は、断面U字形の凹み状の断面を保つ様に、均等に徐々に埋っており、一時的に上が流入した痕跡は認めにくい。したがって、599号土壙は、放置されたまま、次第に埋まっていったものと考えたい。なお、遺物は、埋土の中程から、埋積途中の土壤のくぼみにそよのような形で孤を描いて出土している。

出土遺物は、土師器・瓦器・須恵器上器・白磁・青磁・陶器・ガラスるつば・鉄鎌などである。1~16・22は、土師器である。1~6は皿である。1・2は、底部を回転糸切り、他はヘラ切りする。いずれも内底部にナデ調整を行ない、外底部には板目压痕がつく。口径8.8~9.6cm、器高1.1~1.5cmである。7~15は杯である。底部はすべてヘラ切りするが、平底のものと丸底のものにつくるものがある。7~9は平底で、体部は回転ナデ、内底部は更にナデ調整する。外底には板目压痕がつく。口径10.3~15.8cm、器高2.5~2.9cm。10~15は丸底で、内面にコテをあて平滑に仕上げる。外底には板目压痕がついている。口径15.4~16.4cm、器高3.2~3.8cm。17~21は瓦器である。17は皿で、底部はヘラ切りする。18~21は塊である。ヘラ切りの底に低い高台を貼りつける。皿・塊とともに、内外面をヘラ磨きしている。23は、東播系須恵器と思われる鉢である。底部には、糸切り痕がみられる。24~40は白磁である。28の底部には、「徐口」と墨書きされている。42・43は、青磁である。同安窯系。41・44~46は陶器である。41の高台は、粘土紐を貼りあわせている。

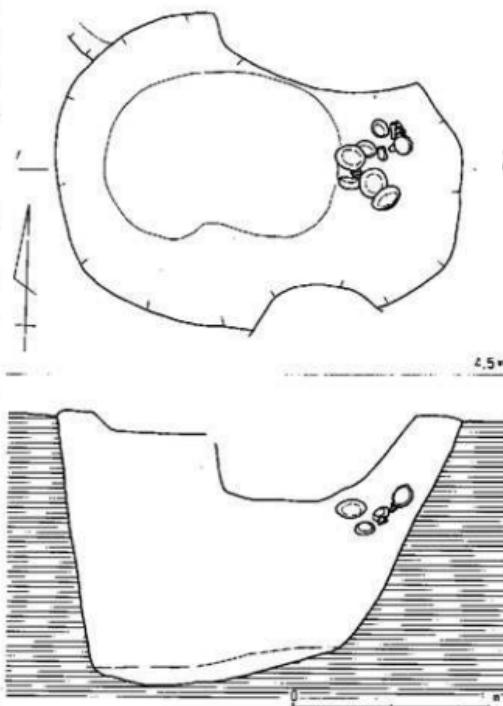


Fig. 31 599号遺構実測図 (1/30)

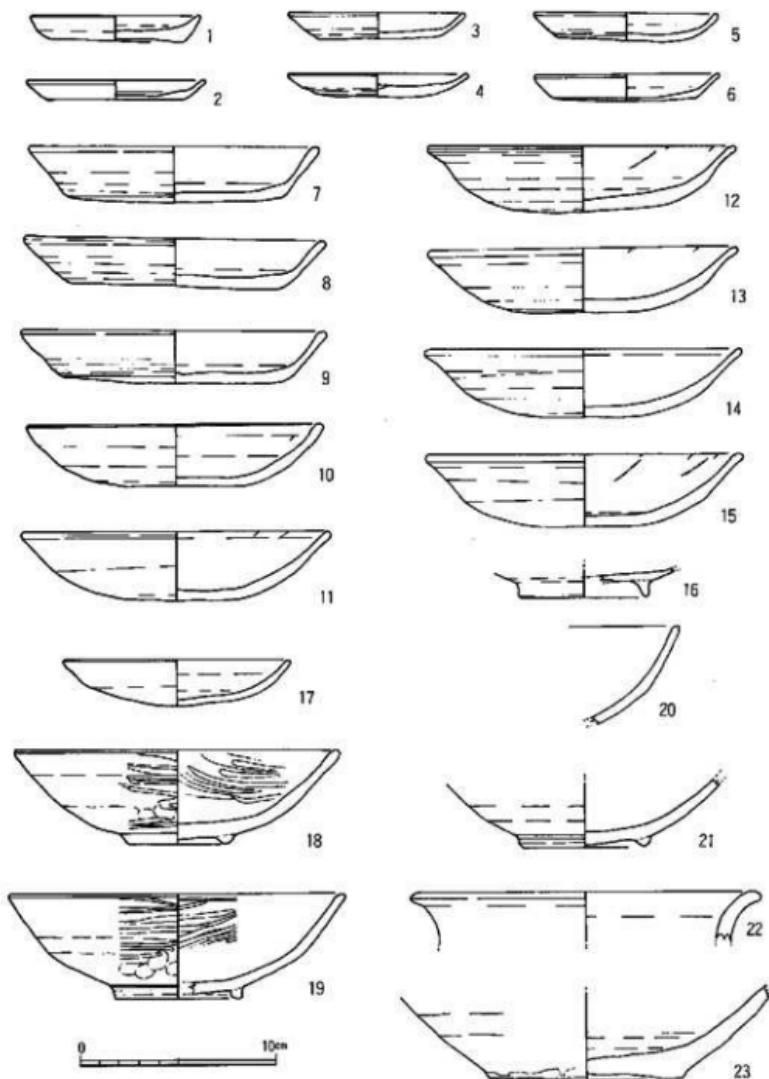


Fig. 32 599号遺構出 I:遺物実測図 1 (1/3)

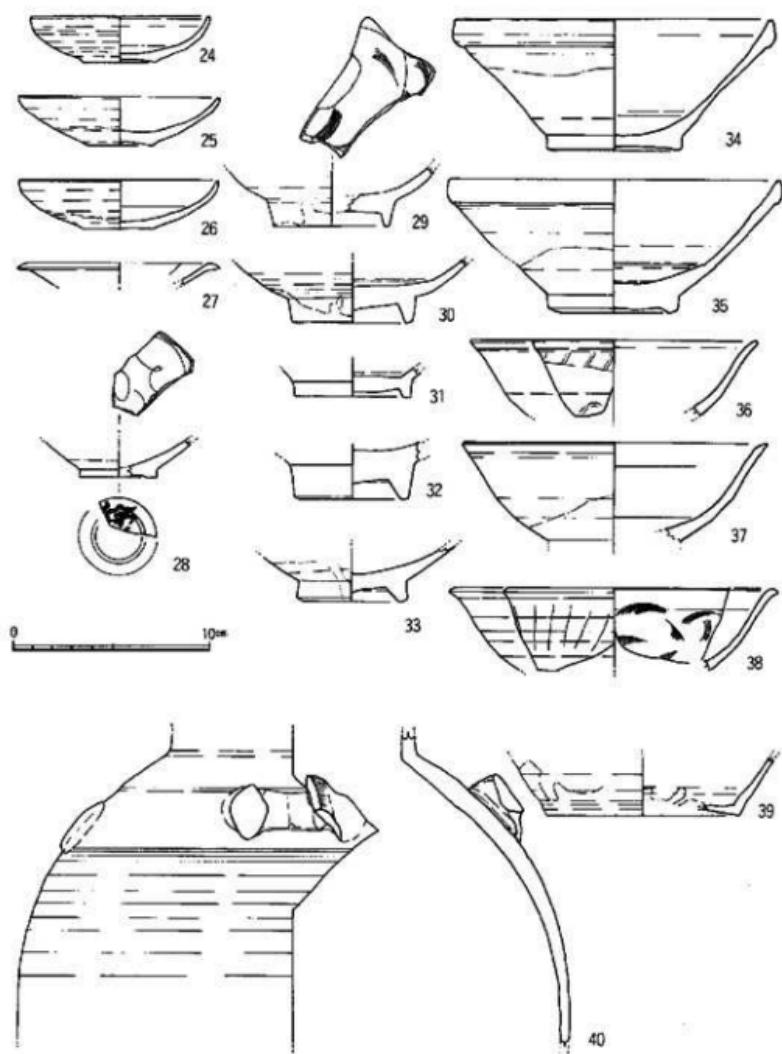


Fig. 33 599号造模出土遗物实训图 2 (1/3)

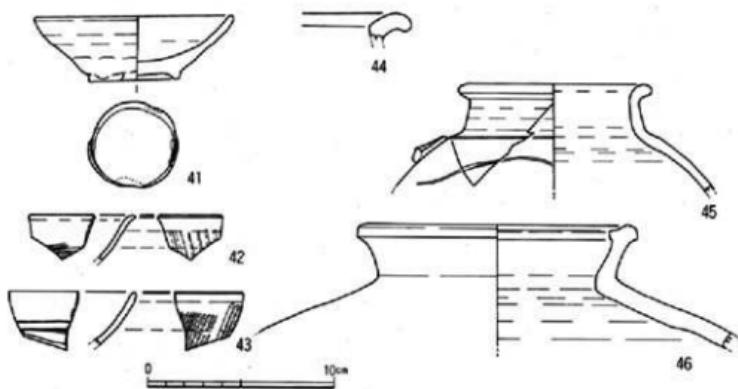


Fig. 34 599号遺構出土遺物実測図 3 (1/3)

599号遺構出土の土器は、底部をへら切りするものがほとんどであるが、確實に糸切りの皿が混在している。また、点数は少ないが、同安窯系青磁碗片が含まれていた。これらの点をあわせて、一応、12世紀中頃の年代を考えたい。ただし、前者の傾向は、12世紀前半のものであることを付言しておく。



Fig. 35 640号遺構 (南より)

640号遺構

第3面F-25・26区より検出した土壙である。調査区周囲に打たれた鋼矢板に切られ、また鋼矢板際では土が攪乱されており、全体の3分の1程度は破壊されていた。

推定で、長軸155cm、短軸123cmをはかる不整橢円形を呈し、深さは約55cmをはかる。遺物は、埋土の中位から下位にかけて、弧状に連なって出土している。

出土遺物は、土師器・瓦器・須恵質土器・白磁・青磁・陶器などである。1~28は、土師器である。1~20は皿で、2~20は底部を回転糸切り離しするが、他はヘラ切りを行なっている。体部および内面は、回転ナデ調整、内底部には更にナデ調整を施し、外底部には板目圧痕がつく。口径は、7.2~10.0cm、器高1.1~2.0cmをはかる。21は、高台付の皿である。ヘラ切り底の皿に、ほぼ直立した高台を貼りつけたもので、皿の形状・調整は、上述した他のヘラ切り底の皿と全くかわらない。口径10.6cm、高台径6.2cm、器高1.7cmをはかる。22~28は、壺である。底部はヘラ切り、体部および内面は回転ナデ調整を行なう。更に、内底部にはナデ調整を施しており、外底部には、板目圧痕がついている。口径は15.4~15.9cm、器高2.8~3.2cmをはかる。29は、東播系須恵器の鉢である。

30~39は、瓦器である。30~34は、皿である。底部は、すべてヘラ切りし、外底には板目圧痕がついている。体部はヨコナデし、体部外面には、粗いヘラミガキを施す。内底は、コテあてで平滑に整えた後、ジグザク状にヘラミガキをする。また、34には、外底にもヘラミガキがなされている。口径10.3~11.1cm、器高1.

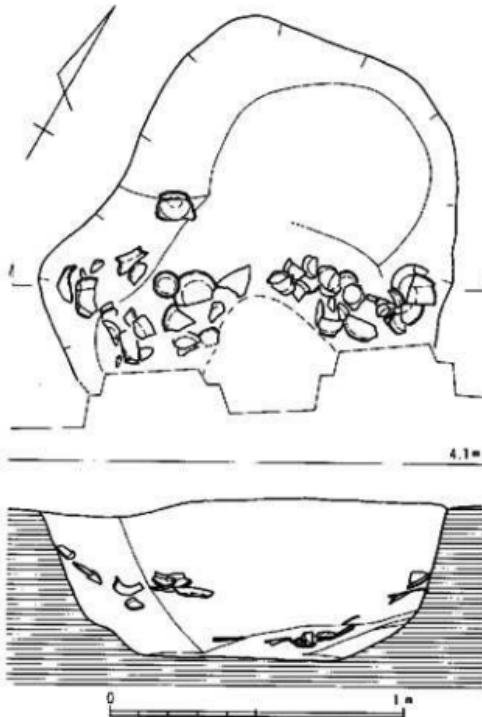


Fig. 36 640号遺構実測図 (1/20)

8~2.0cmをはかる。35~39は塊である。35・36・39の外底部は、ヘラ切りされ、板目压痕がついている。内面は、37・38では分割ヘラミガキ、39は平行ヘラミガキを行なう。高台は、やや外方に「ハ」字状に張った低い付け高台である。全体を知りうる38・39から法量をとると、それぞれ、口径17.0cm、18.1cm、高台径7.3cm、7.8cm、器高4.8cm、5.4cmをはかる。40~48は、

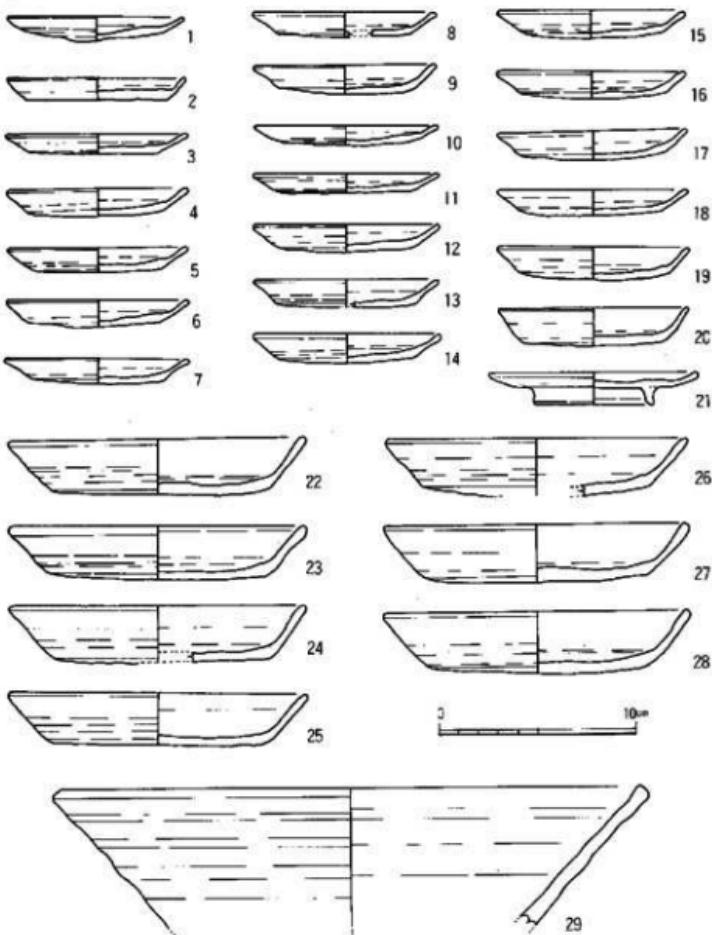


Fig. 37 640号遺構出土遺物実測図 1 (1/3)

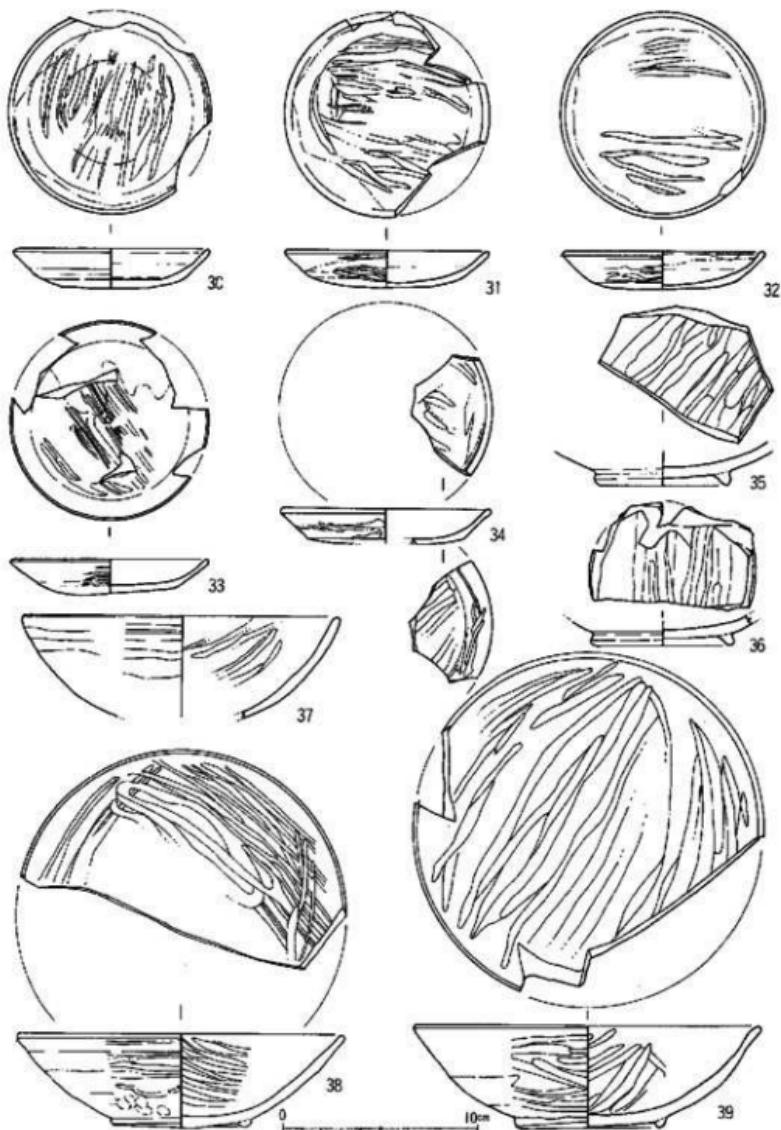


Fig. 38 640分遺構出土遺物実測図 2 (1/3)

白磁である。40は、天目台であろう。41・42は皿である。43～48は碗である。49は四耳壺である。

640号遺構からは、同安窯系青磁の小片が3片出土している。これのみが新しい要素を示すものであり、この3片の青磁片を混入品と考えれば、640号遺構は、12世紀前半に位置付けられるものである。

642号遺構

第3面E-26区より検出した土壌である。長径85cm、短径70cmの橢円形を呈し、深さ68cmをはかる。土壌埋土中にまじって遺物が出土している。

出土遺物は、土師器・瓦器・須恵器・白磁・青磁・陶器などである。1～10は土師器である。1～3は、皿である。口径9.0～9.4cm、器高1.0～1.25cmをはかる。底部は、回転式切り、体部から内面は回転ナデし、内底部はさらにナデ調整している。外底部には、板目压痕が

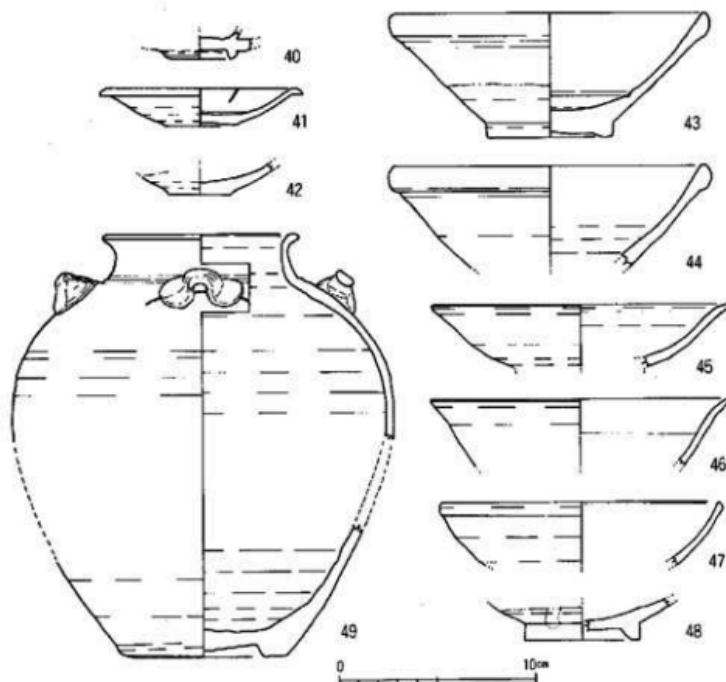


Fig. 38 640号遺構出土遺物実測図 3 (1/3)

認められる。4～10は壺である。4は、丸底につくる。底部はヘラ切りで、板目压痕がつく。内面はコテあて。口径14.6cm、器高3.2cm。5は、ヘラ切りの平底壺である。コテはあてていなし。内底にはナデ調整、外底には板目压痕がつく。口径15.6cm、器高3.1cm。6～9は、底部を回転糸切りする平底壺である。内底にはナデ調整、外底には板目压痕がつく。口径15.2～15.6cm、器高3.1～3.2cm。10は、底径が小さく、直線的に大きく開く体部を持つ。底部は回転糸切り。内底にナデ調整、外底に板目压痕が残る。口径15.4cm、底径6.5cm、器高4.4cm。11は、瓦器の塊である。内面は回転ナデの後コテあて、その上から横位のヘラ磨きを密に施し、最後に内底をヘラ磨きで埋める。外面は、回転ナデの後、横位のヘラ磨きを施し、その次に高台を貼付ける。この貼付の際の回転ナデによって、体部下位から外底部は、ナデ消される。口径16.0cm、高台径6.1cm、器高5.05cm。12は東播系須恵器の鉢である。口縁部は、帯状に黒変する。13～24は、白磁である。24の外底部には、墨書が見えるが、文字の判読は出来ない。25は、青磁である。底部高台内側は、平坦に削りあげており、龍泉窯系の初期のものか。26～29は陶器である。26・28は褐釉陶器である。27は無釉の鉢である。28は、黄釉描影の盤である。

12世紀中頃か、前半でも中頃に近い時期にあてることが妥当であろう。



Fig. 40 642号遺構（東より）

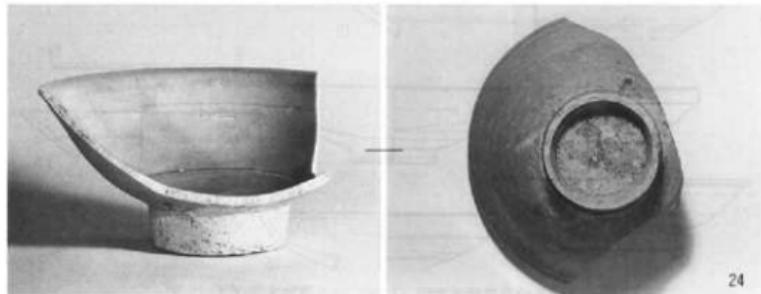


Fig. 41 642号遺構出土遺物

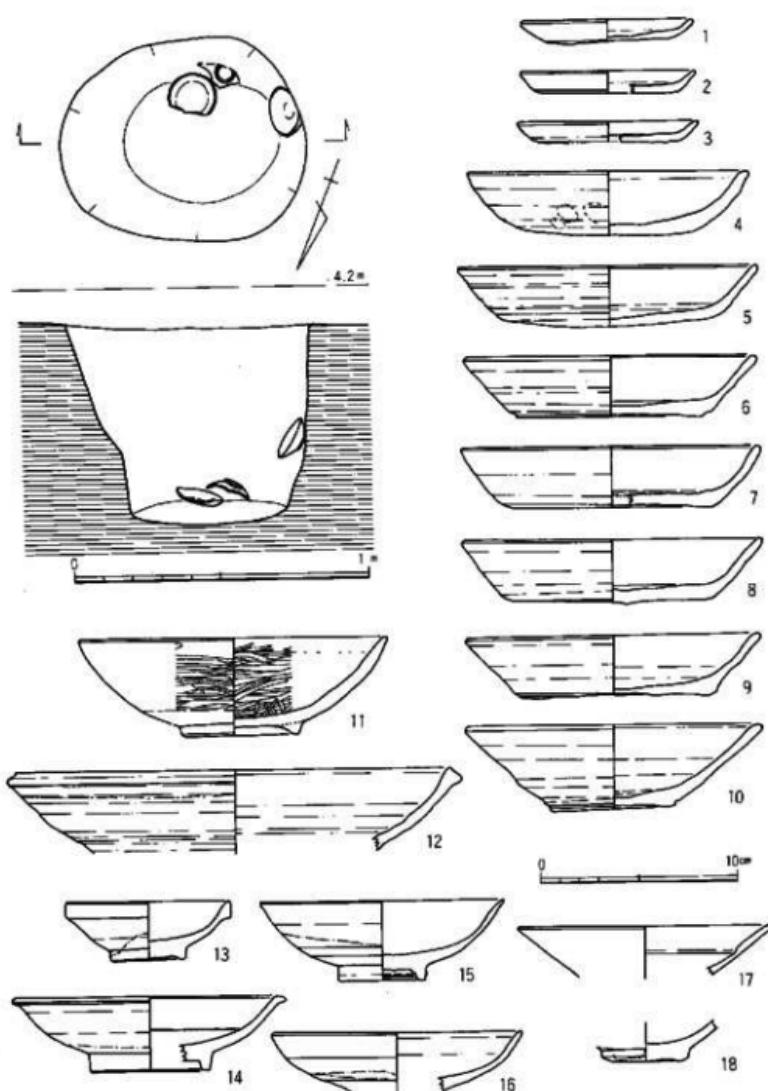


Fig. 42 642号墓構造測図 (1/20) 出土遺物実測図 1 (1/3)

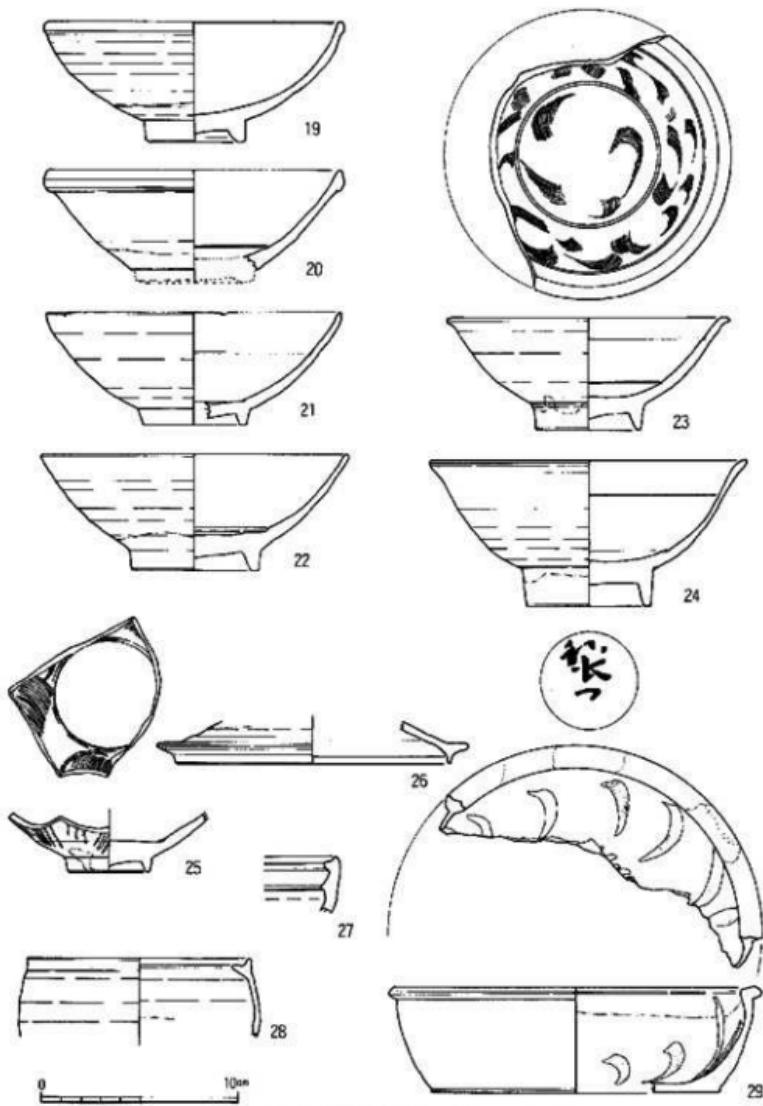


Fig. 43 642号墓出土遺物実測図 2 (1/3)

649号遺構

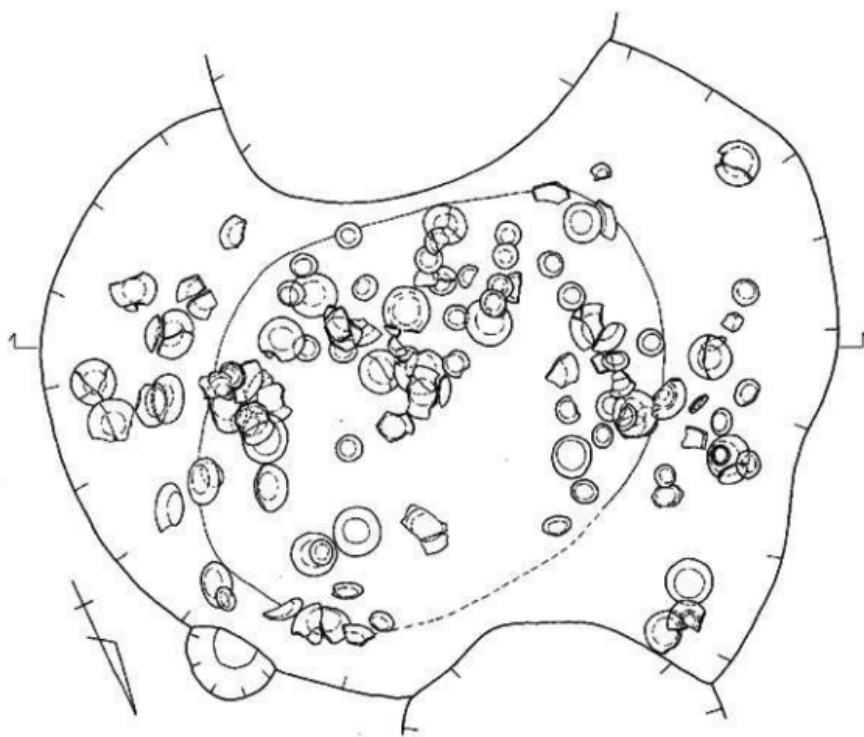
第3面F-24・25区より検出した土壙である。長径270cm、短径230cmの不整形を呈する。土壙床面にも凹凸が認められ、深さは68~80cmをはかる。

埋土は、土壙断面の形に添うように堆積している。埋土中には炭・灰や魚骨、獸骨、貝殻などが含まれており、ゴミ穴であったと考えられる。遺物は主として埋土中位に堆積した炭・灰の層から出土している。

出土遺物は、土師器・瓦器・白磁・青白磁・ガラス器・石製品・鉄滓など。1~130は、土師器である。1~77は皿である。3~8・11~13・24~26・28~30・48・56・81・82・84は、外底部を回転糸切り、他はヘラ切りする。69を除いて、内底部にはナデ調整、外底部には板目圧痕がつく。69は、回転ナデ調整のみである。52・55・56には、口縁部に油煙の付着がみられ、灯明皿として用いられたことを示している。また、69は、焼成後、口縁を細かく打ち欠いている。煤はついていないが、ここに灯火芯をのせて、灯明皿にするものと考えたい。66の外底には、墨書が描かれている。墨書の内容は、判別できない。口径は8.4~10.5cm、器高1.1~1.8cmをはかる。78は、高台付皿である。高い高台が、「ハ」字状に開いて付けられる。口径9.0cm、高台径7.2cm、器高2.6cmをはかる。79~130は、壊である。81・83~87・89・90・92を除いて、内底部にナデ調整を施している。口径15.0~15.8cm、器高2.8~3.3cmをはかる。底部をヘラ切り



Fig. 44 649号遺構（東より）



4.2m

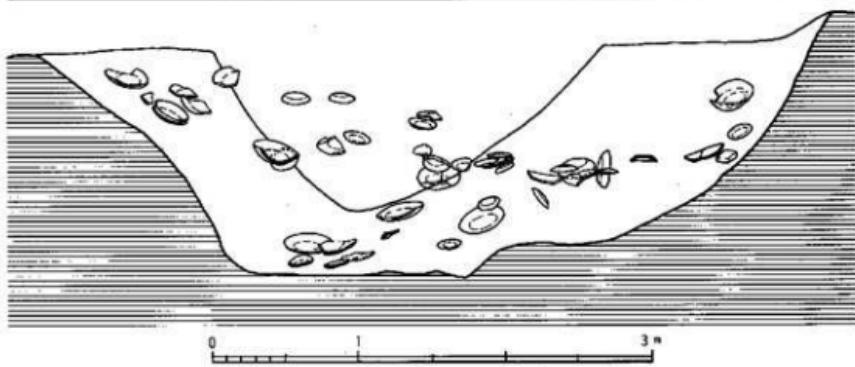


Fig. 45 649号遺構実測図 (1/40)

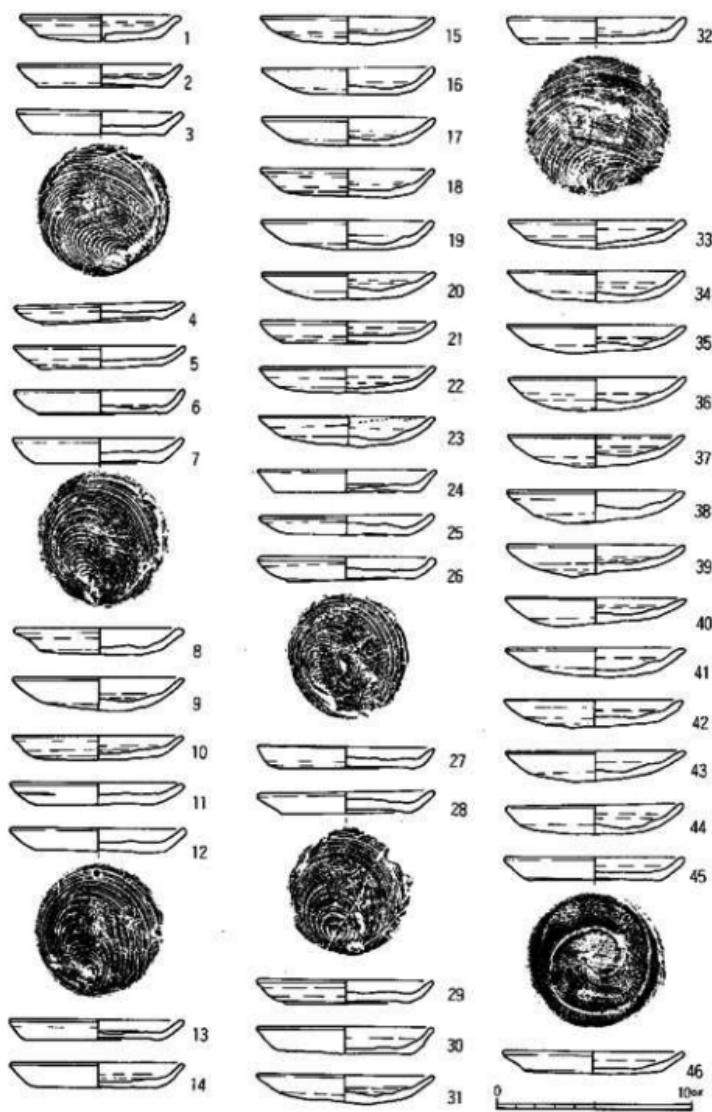


Fig. 46 619号遺構出土遺物 1 (1/3)

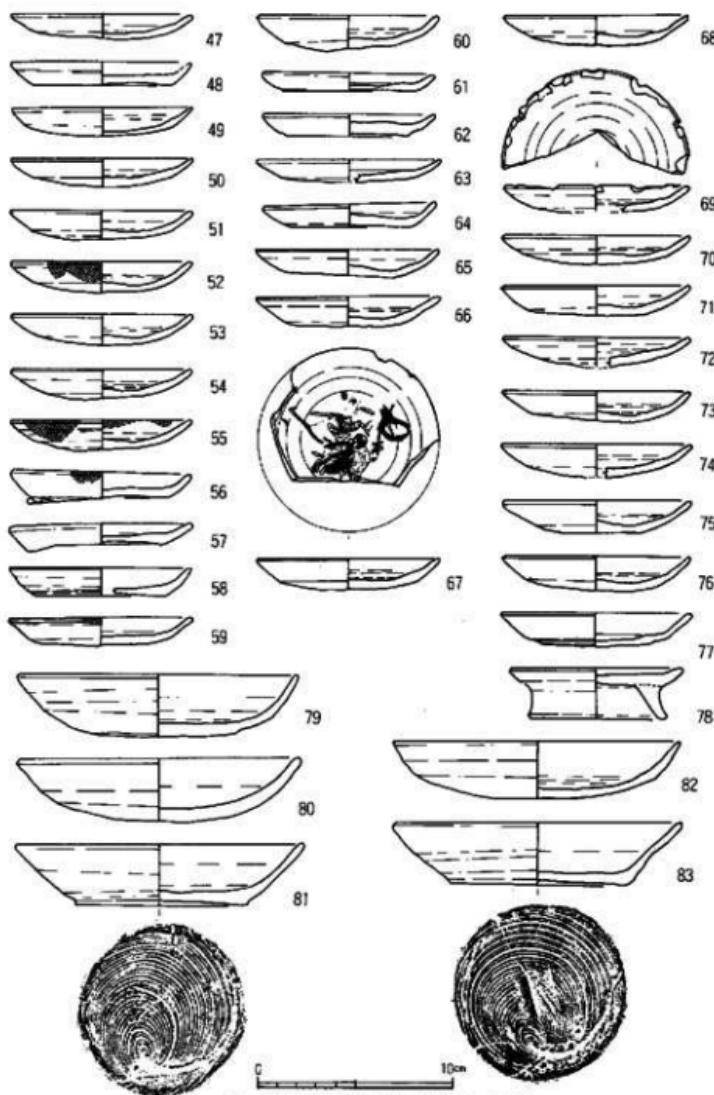


Fig. 47 649号遺構出土遺物実測図 2 (1/3)

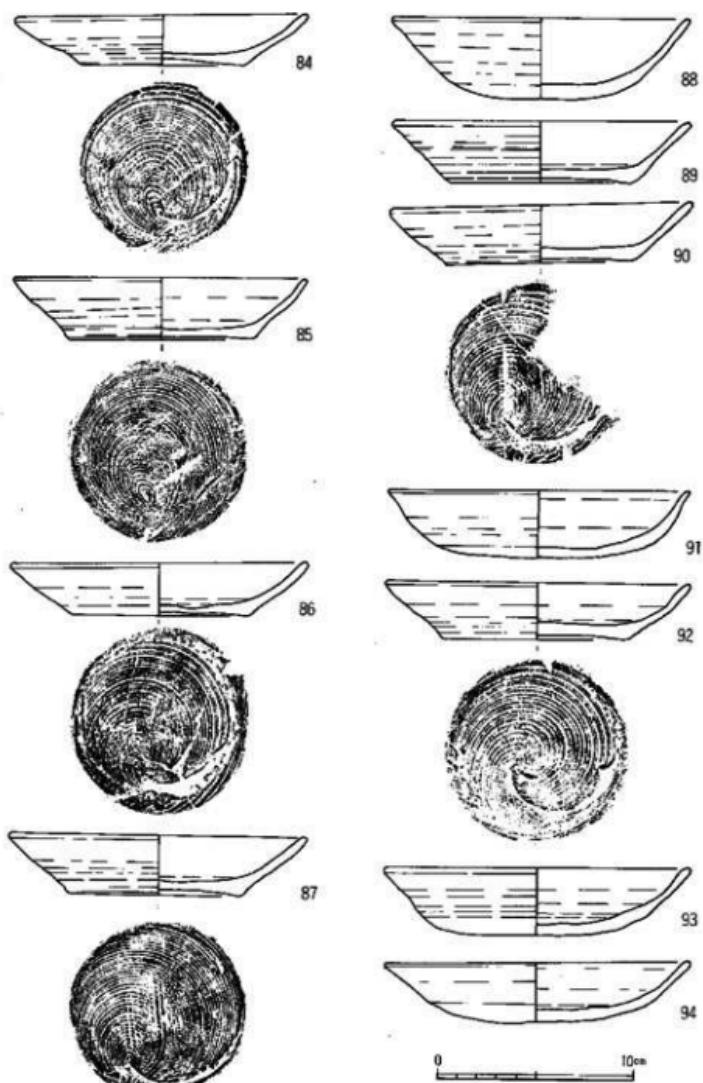


Fig. 48 649号遺構出土遺物実測図 3 (1/3)

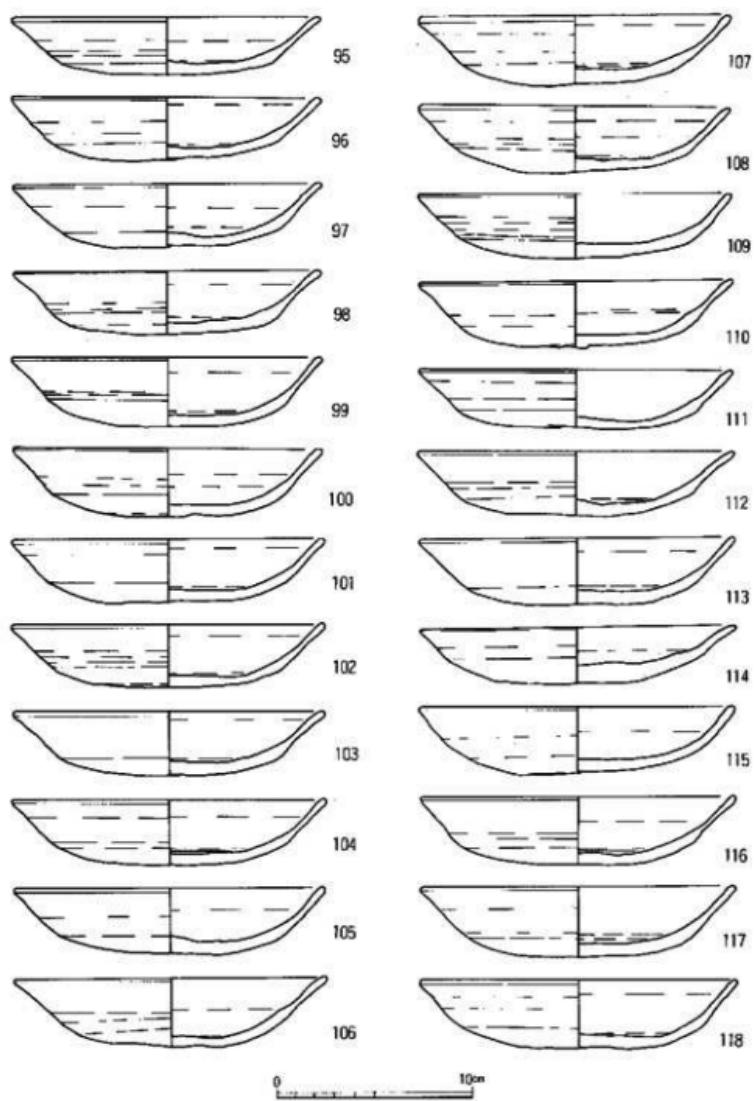


Fig. 49 649号遗物出土实物图测图 4 (1/3)

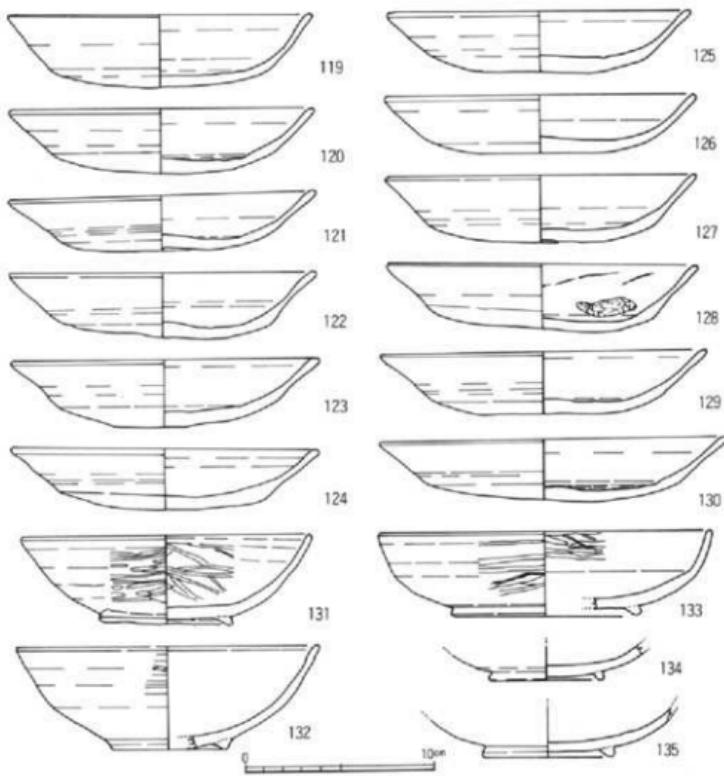


Fig. 50 649号遗構出土遺物実測図 5 (1/3)

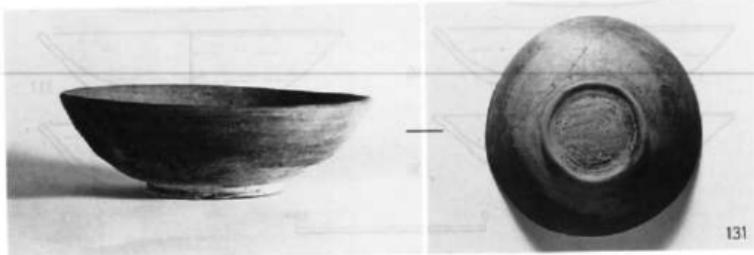


Fig. 51 649号遺構出土遺物

するものは、すべて内面をコテで平滑に整え、丸底に作る。口径14.5~18.6cm、器高3.0~4.1cmをはかる。口径にはずい分と幅があるが、ほとんどは16cm代に集中している。なお128の内底には、鉄釘が接着している。131~135は、瓦器である。外底はヘラ切りし、板目压痕がついた後、高台が貼り付けられている。内面は、コテあての後にヘラ磨きを施す。全体の知りうる131~133について法量をとると、それぞれ、口径15.8cm、16.4cm、16.5~19.8cm(ひずみ)高台径7.2cm、6.2cm、8.6~10.2cm(ひずみ)、器高4.8cm、5.5cm、4.5cmである。136は、青白磁の合子の蓋である。137~149は、白磁である。150・151は石製品である。150は管玉、あるいは、649号遺構の遺物にまじりがほとんどない点を考えれば、管状石錠とみた方が妥当か。151は滑石製の石板で、表面に皿状の浅い凹みが並ぶ。用途不明。152はガラス製品である。小壺の口縁か。コバルトブルーを呈する。

649号遺構の年代は、以上の遺物から、12世紀前半におくことができると考えている。

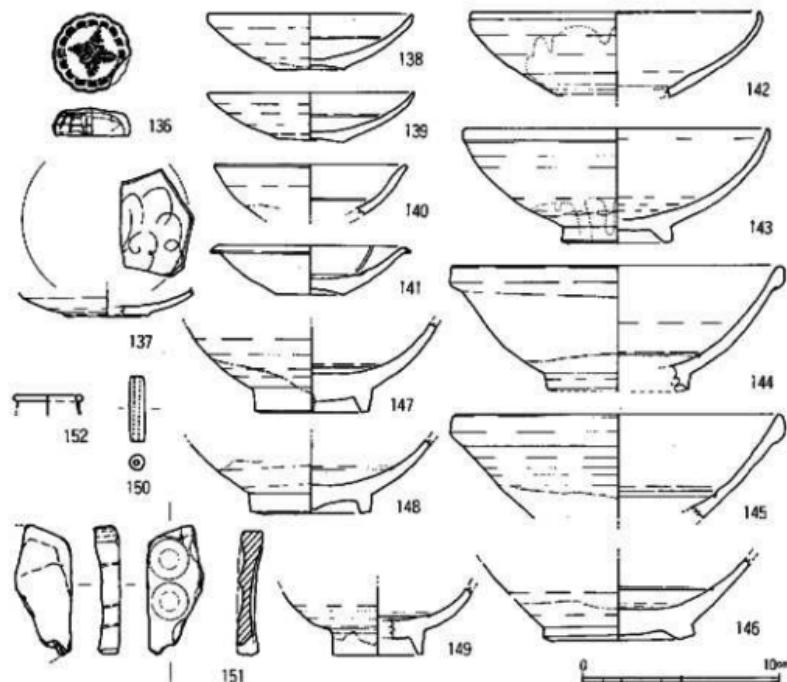


Fig. 52 649号遺構出土遺物実測図 6 (1/3)

652号遺構

第3面F-23区より検出した土壤である。西側を井戸に切られている。径135cm程度のほぼ円形を呈すると思われる。深さは、102cmをはかる。

遺物は、土壤が8~15cmほど埋った面に捨てられており、壁際の土器が壁面に縦にはりつくように出土している状況からは、遺物の廃棄が土砂（あるいは残滓）とともに、一気になされたことを示している。断面図でみると、土壤が30~40cm程埋った面で、もう一度廃棄が行なわれている様だが、この様な状態での廃棄を考えるならば、必ずしも2度の廃棄行為の間に大きな時間差を考える必要はないと思う。

出土遺物は、土師器・黒色土器・瓦器・白磁・高麗・青磁・陶器・鉄製刀子などである。1~79は土師器である。1~70は、皿である。形態、調整技法、胎土から分類が可能であり、これについては後にふれる（P. 103）。71~79は、環である。底部は、ヘラ切りし、板目圧痕がついている。73~74・77~79は、内面をコテあてして、平滑につくる。他のものは、内底部は全体に、ナデ調整を施している。口径14.6~16.2cm、器高2.55~3.4cm。80~83は瓦器である。81・83の内面は、一方方向の平行ヘラミガキ、82の内面は、4分割ヘラミガキを行なう。83の高台は、内外に指をあててひずませ、多角形につくる（Fig.55）。

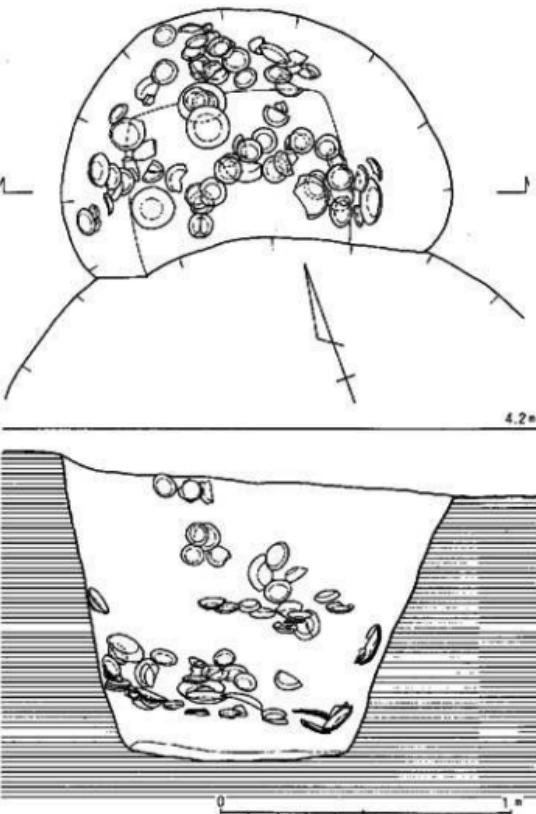


Fig. 53 652号遺構実測図 (1/20)

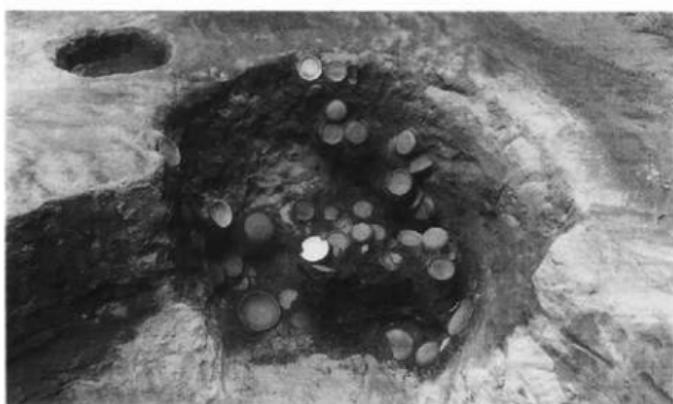


Fig. 54 652号遺構（南西より）

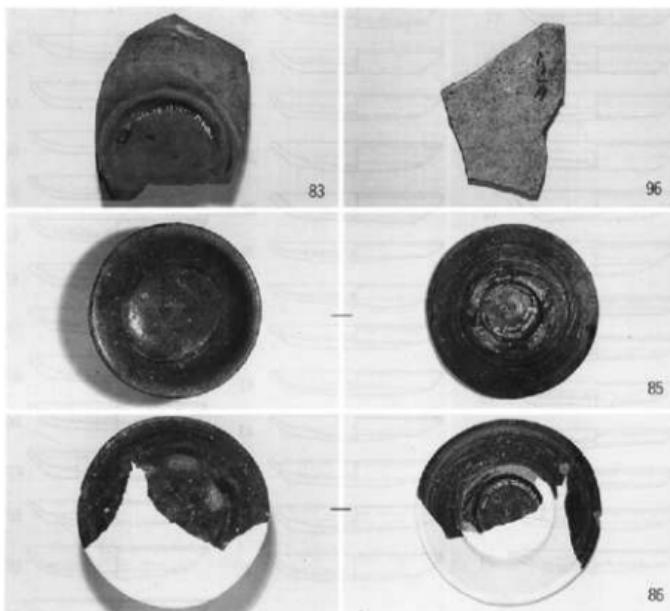


Fig. 55 652号遺構出土遺物

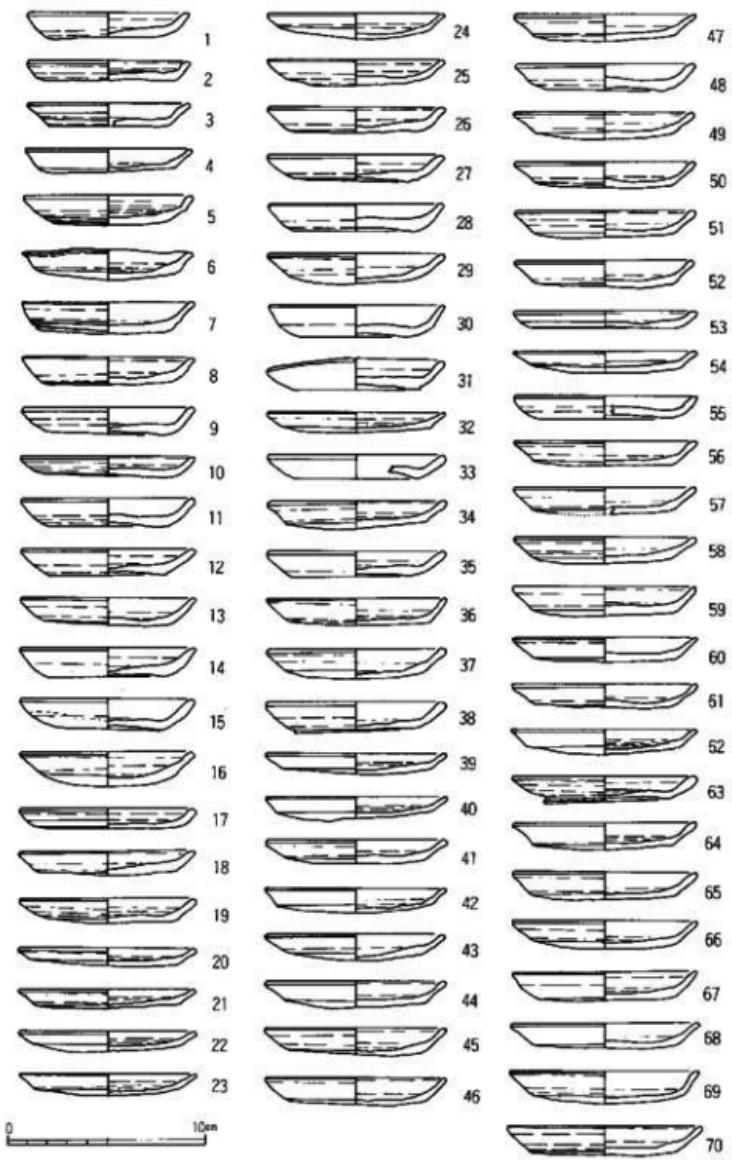


Fig. 58 652号造機出土遺物実測図 1 (1/3)

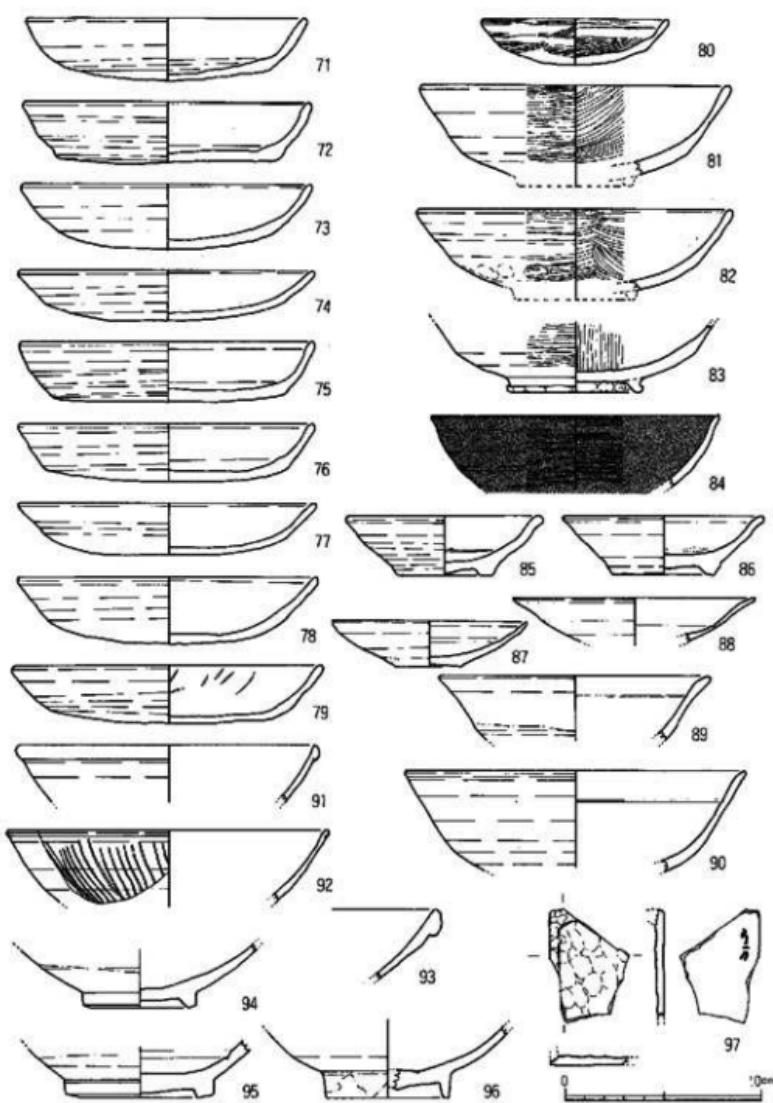


Fig. 57 652号遗構出土遺物実測図 2 (1/3)

84は黒色土器である。器肉が薄く、口縁部が外反して鋸くおさめるなど，在地産とは異なる特徴を持つ。85・86は、高麗青磁の皿である。85の疊付、86の見込みと疊付には、目痕が残る。87～87は、白磁である。87は型作りで、箱形の器形の底部片である。墨書が見られる。652号遺構の時期は、12世紀前半にあてられる。

757号遺構

第3面B～C-24～25区より検出した土壤である。一辺約200cm程の隅丸方形を呈し、深さは約190cmをはかる。土壤床面も一辺140cm前後の隅丸方形で、ゴミ穴とは考えにくい。地下の貯蔵穴としての性格を考えたい。

出土遺物は、土師器・瓦器・青磁・白磁・青白磁・陶器・石鍋などである。1～8は、土師器である。1～5は皿である。形態から、2タイプがある。1・2は体部が立つもので、口径7.6～8.0cm、器高1.0～1.2cm。底部は回転糸切りで、体部および内底部は回転ナデする。3～5は、体部が浅く開くもので、3・4はヘラ切り、5は回転糸切りする。体部は回転ナデ、内底部にはナデ調整を施す。口径9.0～9.8cm、器高1.0～1.5cm。6～8は、壊である。6は小型で、口径9.0cm、器高2.2cmをはかる。7・8は、口径12.4、13.0cm、器高2.9、2.6cmをはかる。いずれも、底部は回転糸切りする。8には、内底にナデ調整がのこる。9～11は白磁である。12～14は青磁である。同安窯系。15は青白磁の合子蓋である。16は東播系須恵器の鉢である。17～20



Fig. 58 757号遺構（西より）

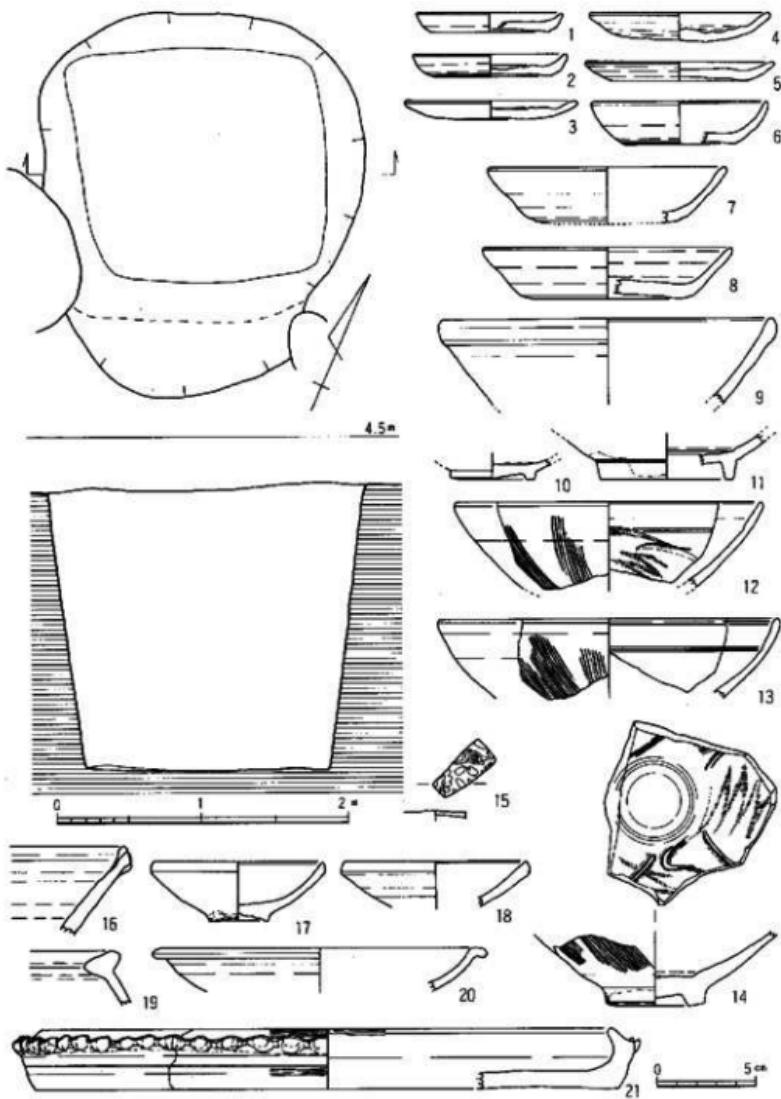


Fig. 59 757号遺構実測図(1/40)出土遺物実測図(1/3)

は陶器である。17・20は、褐釉、18は綠灰釉を施す皿である。19は黄釉陶器の盤である。21は、土師質土器の盤である。蓋受け状になった端部を、ヘラ状の工具で押えて、フリルを作る。12世紀後半頃の遺構であろう。

758号遺構

第3面C-24, D-24~26, E-26区より検出した溝である。調査区の東よりのびてくる溝で、調査区内で、丸く立ち上がる。上端幅1.8~2.0m、深さ1.3mをはかる。延長6.5m分を検出している。方位は、約N-87°-Eにとり、東西方向を指すといえる。第2面における遺構検出時に、この位置で、土器片がベルト状に集中しているのが確認できた。そこで溝の存在を予想したが、そのプランを明確にできず、結局第3面において検出したものである。

出土遺物は、土師器・瓦器・瓦質土器・白磁・青磁・天目・陶器・石鍋などである。1~19は、土師器である。1~10は皿で、すべて底部を回転糸切りする。口径7.8~9.4cm、器高1.0~1.4cmをはかる。1・4~8・8・10は、内底部にナデ調整を行なう。11は、高台付の皿である。12~19は壺である。法量からは、2種にわかれる。12~17は、口径11.4~12.8cm、器高2.35~2.5cm。

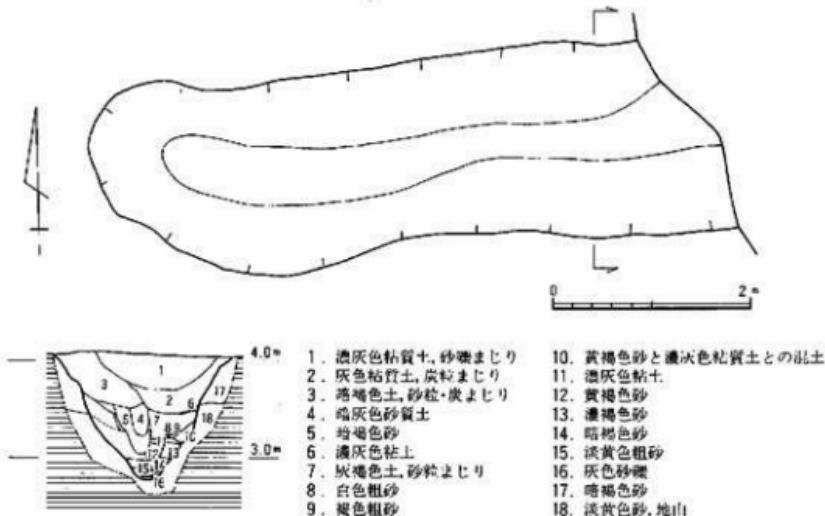
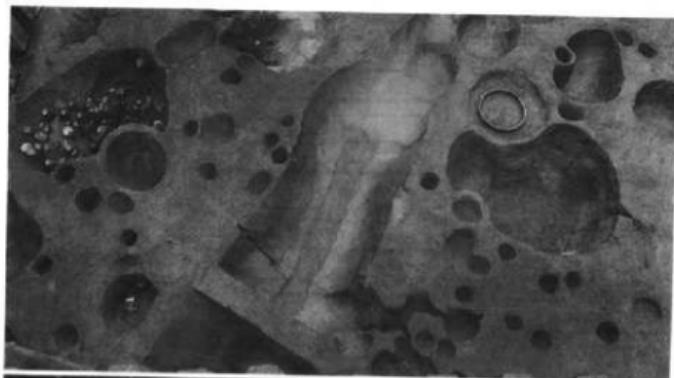


Fig. 60 758号遺構実測図 (1/60)

(1) 東より



(2) 西より



(3) 土層断面



Fig. 61 758号遺構

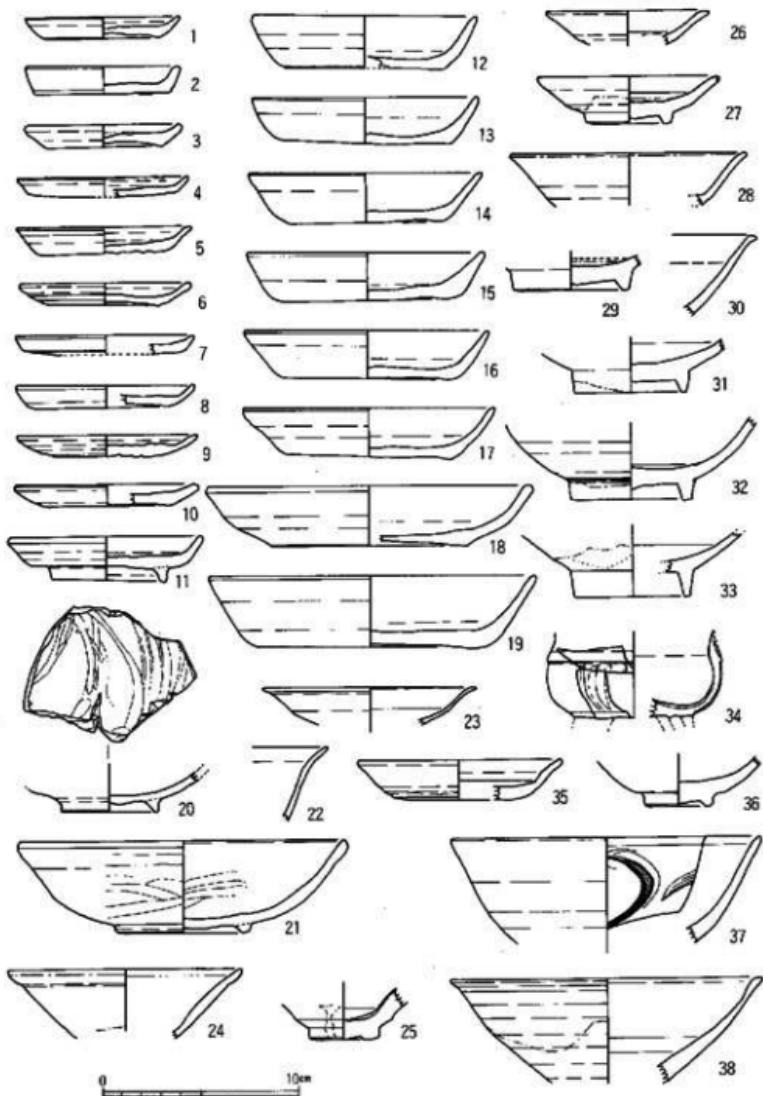


Fig. 82 758号遗墟出土物 I (1/3)

7cmをはかる。18・19は、口径16.6, 16.7cm, 器高3.1, 3.4cmをはかる。すべて糸切りする。18を除いて、内底のナデ調整と外底の板目圧痕がみられる。20・21は、瓦器である。26～33は、白磁である。26・27・29は、見込みの釉を蛇の目にかき取る。28は、いわゆる口ハゲの皿である。22・23は、青白磁である。34～38は、青磁である。34は、香炉である。35・38は同安窯系、36・37は龍泉窯系である。24・25は、天目茶碗である。24は黒褐釉の磁器で、口縁部は白色釉で覆輪する。42～46は、陶器である。43は茶褐色の釉を施す。44は、灰褐色釉である。45は、

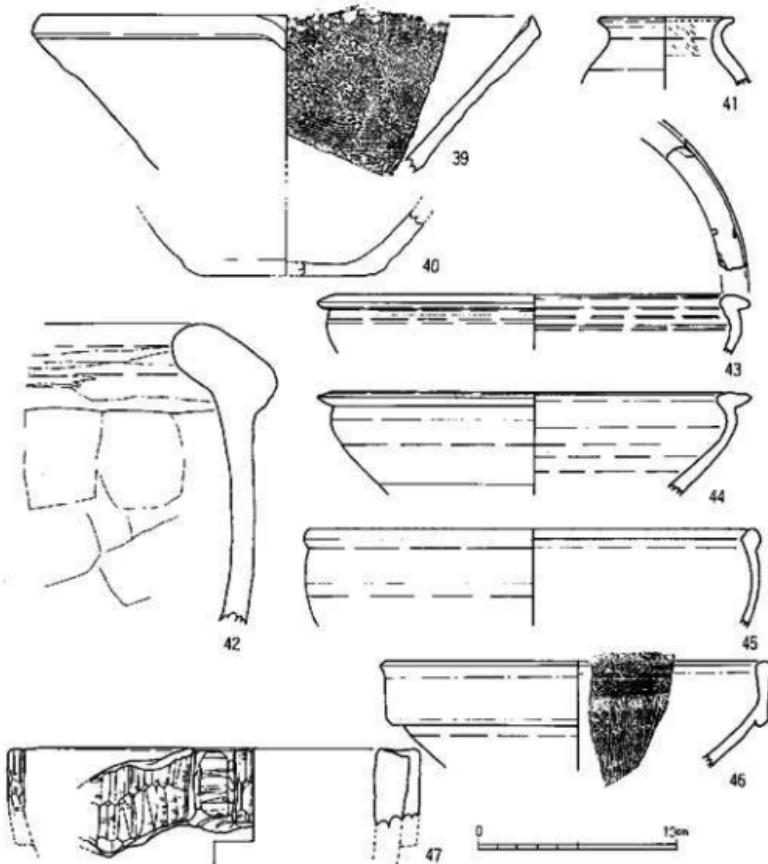


Fig. 63 758号遺構出土遺物実測図 2 (1/3)

縁輪である。46は褐釉のすり鉢である。39・40は、瓦質土器である。39は、片口につくる。41は、須恵器系陶器の壺である。47は、石鍋である。耳は、縦に削り出されている。破片のため、耳が全周で何個つくかは不明である。

758号遺構の年代は、13世紀前半頃であろうか。

931号遺構

第4面D・E-19・20区より検出した土壙である。長軸255cm、短軸185cmの小判形を呈し、深さ48cmをはかる。

出土遺物は、土師器・瓦器・青白磁・白磁・石製品などである。1~10は、土師器である。1~10は、皿である。口径8.5~10.2cm、器高1.1~1.45cmをはかる。底部は、1・3~5・7・8は回転糸切り、他はヘラ切りする。内底部は、すべてナデ調整し、外底部には板目圧痕がつく。11~18は、壺である。形態・調整を異にする2タイプに分類できる。11~18は、口径に対し底径が小さく、器高が高いタイプである。底部は、回転糸切りする。体部は、回転ナデ調整し、内底部には更にナデ調整を行ない、外底部には板目圧痕がつく。口径14.2~15.1cm、底径6.15~7.3cm、器高3.5~4.1cmをはかる。色調は、茶褐色~暗茶褐色を呈する。形態・色調とも、在地産とは著しく異なり、搬入品と考えられる。17・18は、在地産の丸底壺である。底部は、ヘラ切りする。内面は、コテあてで、平滑に仕上げる。外底には、板目圧痕がみられる。口径15.3、15.9cm、器高3.75、3.2cmをはかる。19~21は、瓦器である。20の内面のヘラミガキは密に施されるが、単位・方向はつかめない。22は、青白磁である。合子の身である。23~29は、白磁である。30は、似非須恵土師器であろうか。外面は、タタキの上に横刷毛を施す。内面は、タタキの上に、あらく横ナデ調整する。焼成は、土師質で良好、濃い茶褐色を呈する。31は、石製品である。滑石を削った円盤で、中央に正方形の孔を穿つ。直径10.2cm、厚さ2.1cmで、孔の1辺は、1.7cmをはかる。かなり剥落して

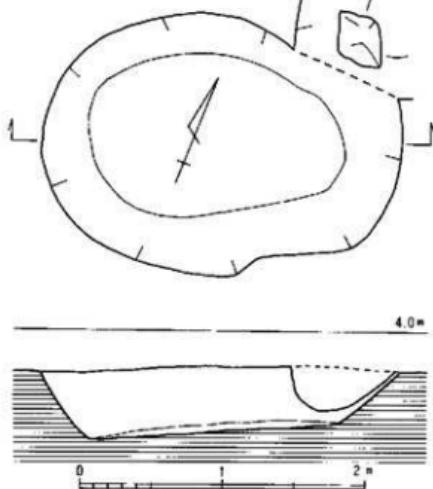


Fig. 64 931号遺構実測図 (1/40)

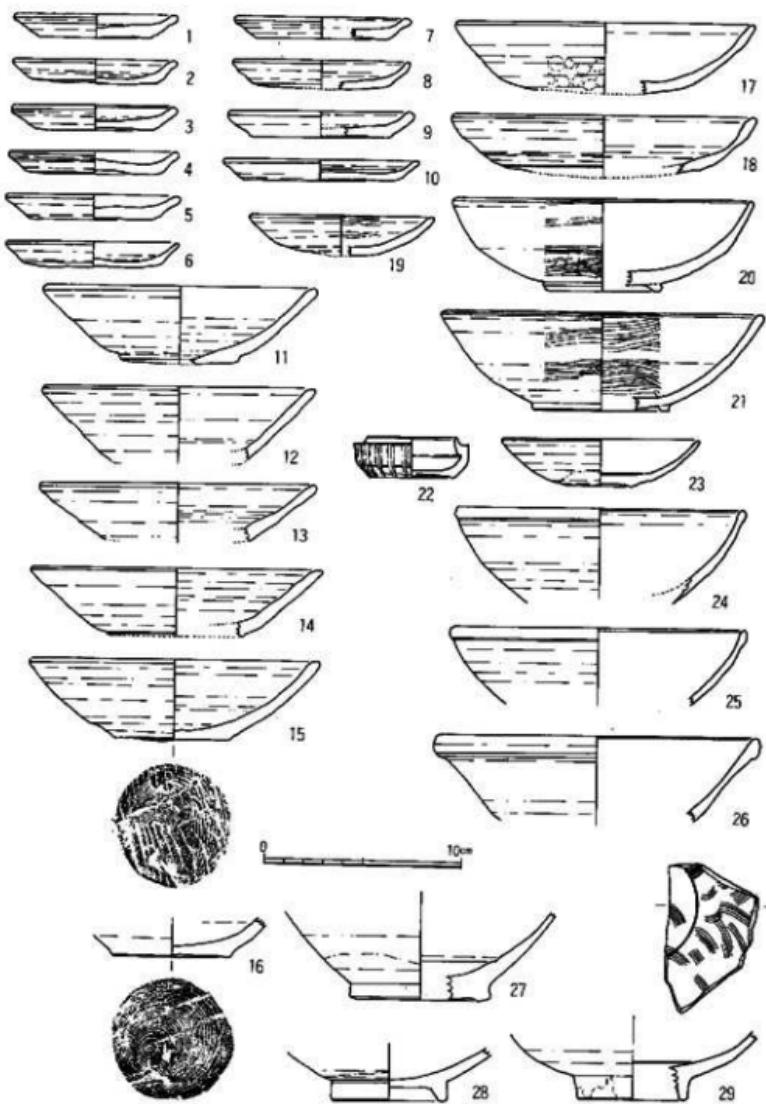


Fig. 65 931号遺構出土遺物実測図 1 (1/3)

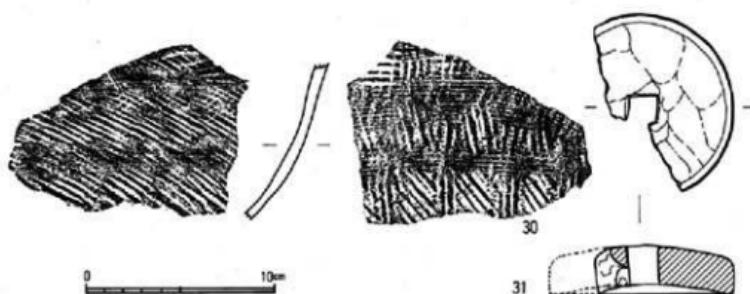


Fig. 66 931号遺構出土遺物実測図 2 (1/3)

いるが、ところどころに煤がついており、本来は全面に煤がついていたものと思われる。ただし、孔の内壁には煤の痕跡は全くなく、摩耗して平滑になっているので、この孔には、軸が通されていたものと思われる。

931号遺構の年代は、12世紀前半であろう。



Fig. 67 1016号遺構 (北西より)

1016号遺構

第4面E-2・3, F-2・3区より検出した井戸である。掘りかたは、長径220cm、短径190cmの楕円形を呈する。井側は、木材を用いているが、痕跡しか残っていなかった。それによると、井側は、2枚の木材よりなる。痕跡の幅が、きわめて薄かったので、本来も幅のあるものとは思えない。おそらく、板材を2枚重ねて、組み合わせていると思われる。ただし、確認した限りでは（湧水の中での確認なので、必ずしも正確ではない）、2枚の板の下端の標高はずれており、これが、曲物などの製品を転用したものとは、考えがたいところである。

出土遺物は、土師器・青磁・白磁などである。土師器は、すべて底部を回転糸切りする。青磁には、鎌倉弁文の碗や、白磁では口ハゲの類が、一点も含まれていず、1016号遺構の年代としては、12世紀後半を考えれば、妥当であろう。



Fig. 68 1016号遺構井筒木質（北西より）

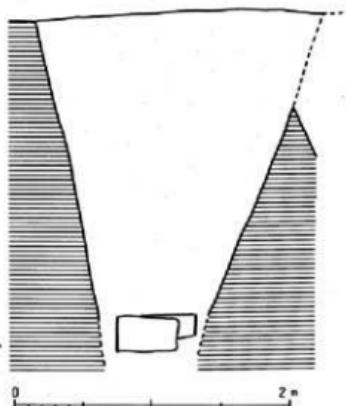
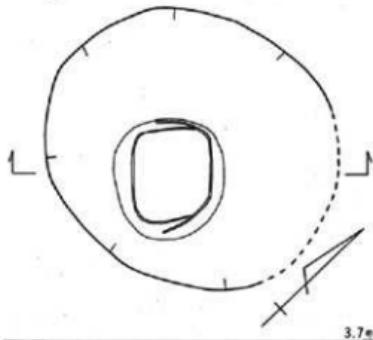


Fig. 69 1016号遺構実測図（1/40）

5. 古代の遺構・遺物

今調査区においては、第3面から第4面との間に、風成砂層が厚く堆積している。この風成砂層は、周囲に障害物等がない状態で堆積したもので、一時的に遺構が全く営まれない時期があったことを示している。古代の遺構は、第4面上において、検出されている。

古代の遺構と考えられるのは、柱穴、溝、井戸である。柱穴については、層位関係から平安時代前期以前と思われるが、遺物が少なく時期比定が困難である。溝については、981号遺構が出土須恵器から9世紀初とみられる。これと平行する934号溝（遺物なし）も同時期であろう。出土遺物から確実な遺構は、次に述べる883号遺構である。

883号遺構

第4面C-12・13区より検出した井戸である。大半は、調査区外へ出ている。調査できた限りから推定すれば、掘りかた部分で、径約2mをはかる。調査区両壁に、安全確保のためにつけた法面のため、検出面から1m程しか掘り下げられなかった。そのため、井側は調査できず、不

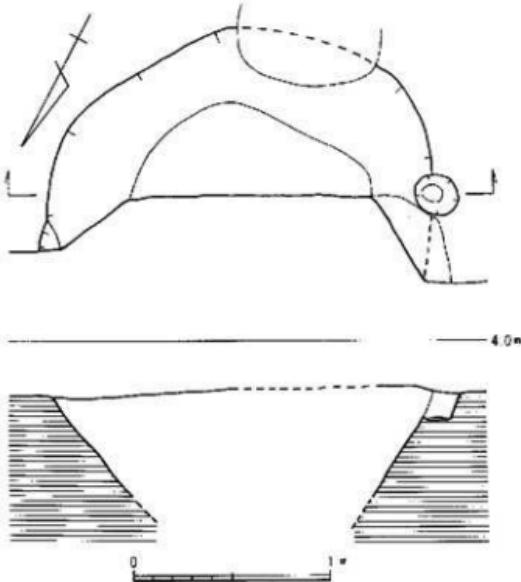


Fig. 70 883号遺構実測図 (1/30)

明である。

出土遺物は、土師器・須恵器等である。1～5は、須恵器である。1～3は高台付坏である。底部から体部へ移る屈曲部から少し内側へ入って、断面四角形の高台を貼り付ける。底部は回転ヘラ削りで、高台から体部・内面はヨコナデする。4・5は、壺である。外底は、回転ヘラ削り、体部はヨコナデ、内底はナデ調整する。6は、土師器の甕である。体部内面は、ケズリ、口縁部はヨコナデする。

883号の年代は、8世紀後半にあてられる。



Fig. 71 883号遺構（南より）

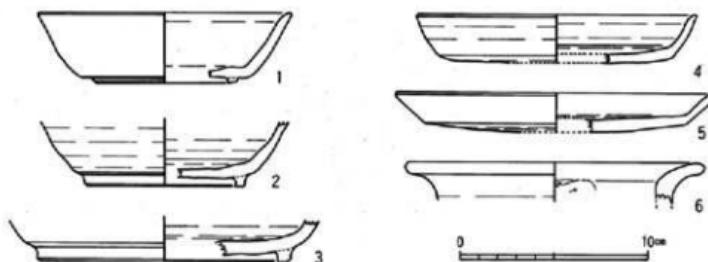


Fig. 72 883号遺構出土遺物実測図（1/3）

6. 古墳時代の遺構・遺物

第4面からは、古墳時代の竪穴住居址、土壙、柱穴などが検出された。竪穴住居址は、2区に集中しているが、1区では第3面からの掘り下げの際に一部遺構埋土まで取りすぎた部分があり、プランがあいまいになった遺構があった。この内、823号遺構・827号遺構は、竪穴住居址と考えて間違いないだろう。両遺構とも、古墳時代前期の遺構である。その他、中世の井戸・土壙などによる振り込みの間にわずかに認められた遺構で、竪穴住居址と考えられるものがある。F-11区の869号遺構、F・G-21・22区の1023号遺構、G-23・24区の1028号遺構がそれで、869号遺構は古墳時代前期、他は6世紀頃とみられる。

826号遺構

第4面F-7区より検出した土壙である。長径58cm、短径48cmの梢円形を呈し、深さ13~27cmをはかる。埋土上より土師器の鉢が出土している。

出土遺物は、上仰器の鉢のみである。丸底で体部はゆるく開く。口縁はゆるく外反する。体部内面は、ヘラミガキして平滑にととのえる。口縁部には横方向の擦過痕、体部外面には、多方向からのケズリもしくは擦過痕がみられる。ひずみが大きいが、口径16.5~17.3cm、器高6.95cmをはかる。

古墳時代前期の遺構であろう。

871号遺構

第4面D・E-11・12区より検出した竪穴住居址である。擾乱および後世の井戸に切られ、西半分は残っていない。調査した部分から推定して、一辺3.3mの方形を呈すると思われる。検出面からの深さは、約40cmをはかる。主柱穴と思われるもの2本を検出している。

出土遺物は、古式土師器である。1・2は、小形丸底壺である。体部外面は、密に横位のへ

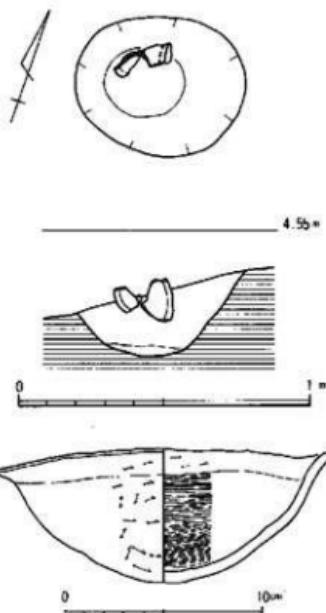


Fig. 73 826号遺構実測図 (1/20)
出土遺物実測図 (1/3)

ラ磨き、底部は、底部方向に向っての縦方向のヘラ磨きを施す。体部内面はナデ、頭部内面から口縁部にかけては、密に横ヘラ磨きを行なう。2の体部内面には、ナデの下に右下りの刷毛目がみとめられる。3は在地産の甕、4・5は、布留式系の甕である。6は、鉢である。やや尖り気味の丸底で、口縁は、内湾する体部をそのまま平らにおさめる。体部外面は、きわめて粗い刷毛目、下位は縦方向にケズリ、底部は、多方向からのケズリを行なう。内面は、左上りのナデ調整で、底部から体部中位にかけて、放射状のヘラ磨きが暗文状に施される。

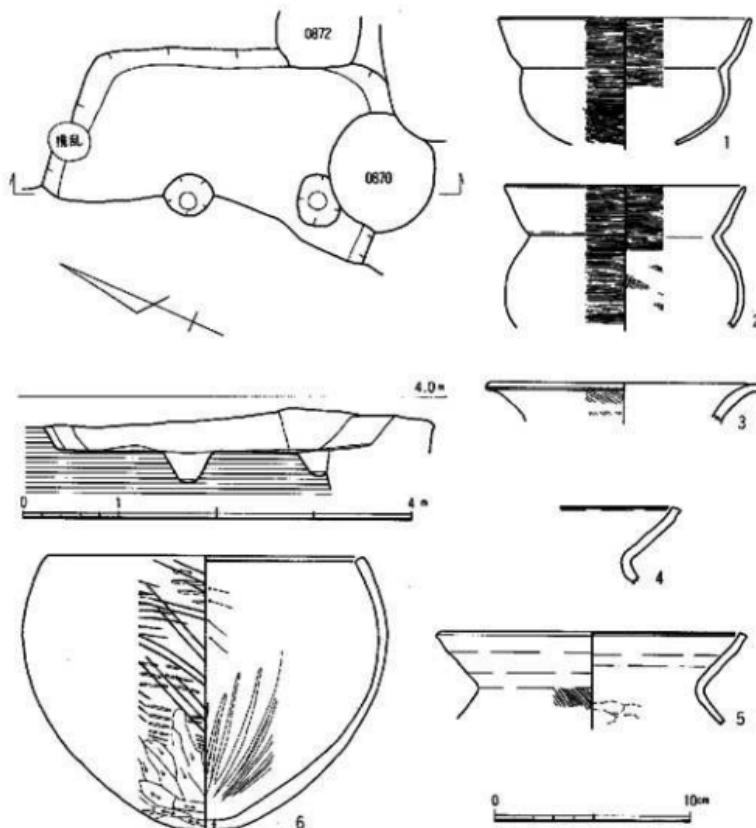


Fig. 74 871号遺構実測図 (1/60)、出土遺物実測図 (1/3)

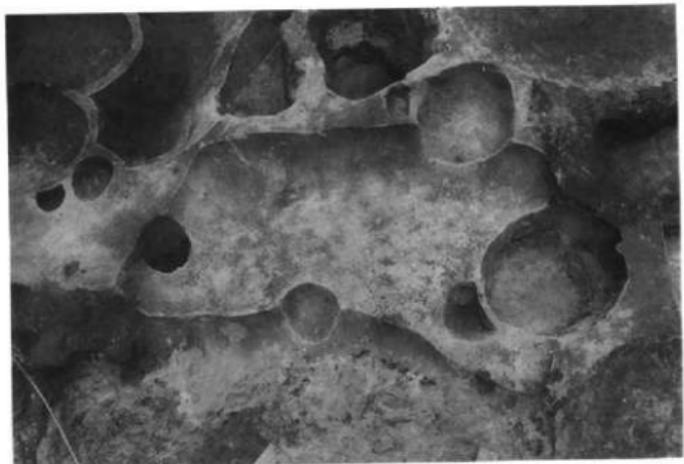


Fig. 75 871号遺構（西より）



Fig. 76 880号遺構

880号遺構

第4面F-14~16区より検出した竪穴住居址である。ほとんどは調査区外に出ており、北辺付近を調査したにすぎない。1邊約5.4mの方形住居址になると思われる。検出面から住居址床面までの深さは、30~50cmをはかる。壁沿いに、4基の柱穴が検出された。住居址床面上で検出しているが、住居址との関係は、不明である。一応、住居址に伴うものと考えるが、主柱穴ではなかろう。

出土遺物は、小片が多く図化できたものは少ない。1・2は、小形丸底壺である。外面には、横位のヘラ磨きを密に施す。1の内面は、口縁部は横ナデ、頸部は横刷毛。頸部直下はナデ、体部は横刷毛調整を行なう。2は体部内面ではナデ、頸部から口縁では横位のヘラ磨きを施す。3は、壺である。内外面とも密にヘラ磨きをする。1~3の胎土は比較的良好で、赤茶色を呈する。4・5は、壺の口縁部片である。

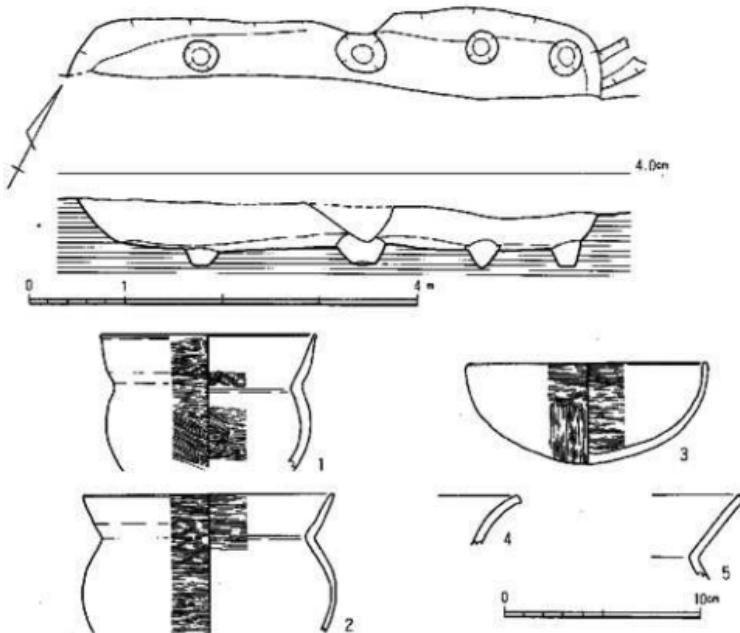


Fig. 77 880号遺構実測図(1/60)、出土遺物実測図(1/3)

892号遺構

第4面D・E-13-15区より検出した竪穴住居址である。長辺450cm、短辺350cmの隅丸長方形を呈する。南辺は、2段に掘り込まれ、ベッド状を呈する。検出面からの深さは、ベッド部分で25cm、床面部分で45cmをはかる。床面上でも6基の柱穴が検出されたが、住居址ほぼ中央を長辺方向に通る2本が、主柱穴であろう。なお、床面ほぼ中央に、焼砂がみられた。火を焚

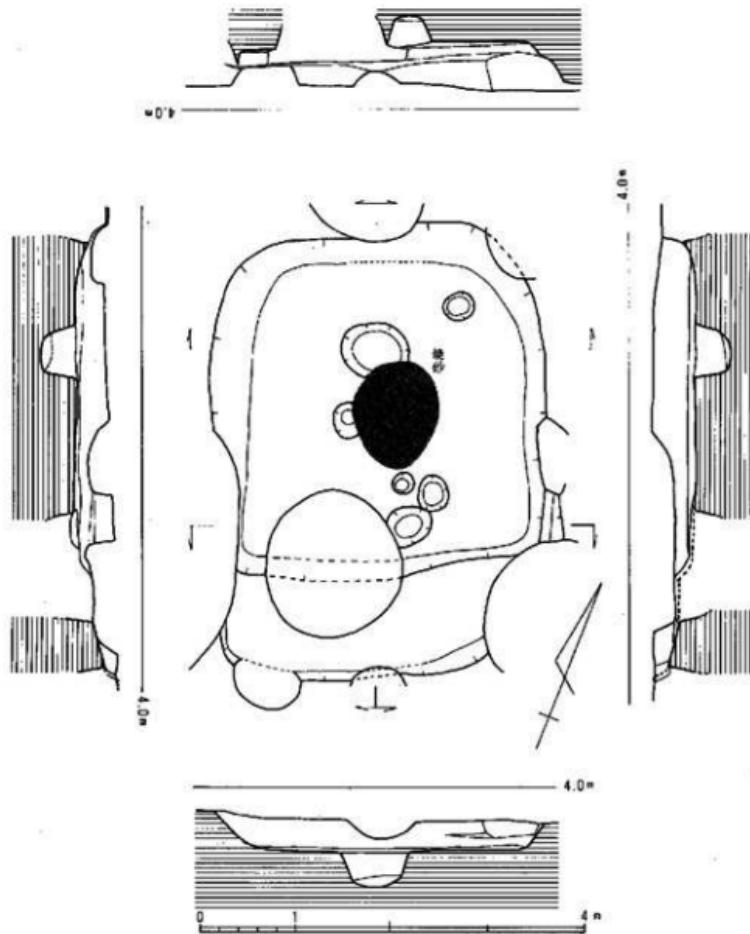


Fig. 78 892号遺構実測図 (1/60)



Fig. 78 892号遺構検出状況（南より）

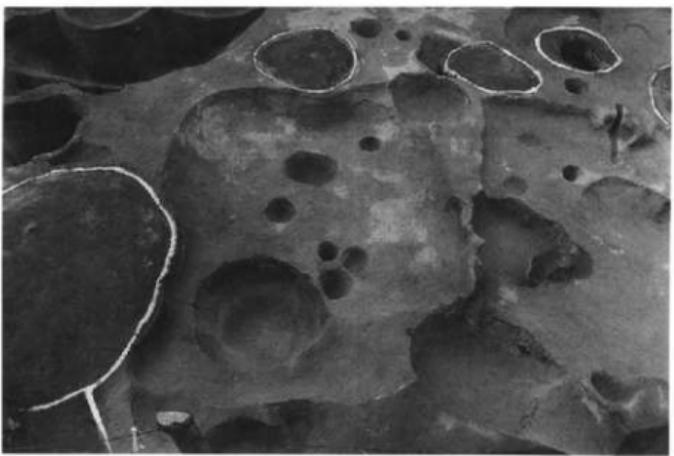


Fig. 80 892号遺構（南より）

いた痕跡であろう。遺物は、床面から10数cm浮いて、まとめて廃棄された状況で出土した。

出土遺物をFig.82に示した。1は手捏ねの盃である。外面は指頭圧痕がつき、内面は、指および工具などで擦る。2は、塊である。内外面とも、密にヘラ磨きする。外底には、磨きの下に指頭圧痕がうかがわれる。2は、小形丸底壺である。口縁部外面は、密に横位のヘラ磨き、体部外面は、縱の刷毛目の上に横位のヘラ磨きを粗く施す。口縁部内面は、横位の刷毛目、頸部内面と体部内面には横位のヘラ磨き、内底部は放射状に暗文を入れる。4は、器台である。脚部は欠く。皿部は内外とも密に横ヘラ磨きし、内面には放射状の暗文を入れる。皿部外面の下位には、ヘラ磨きの下にこまかい縱方向の刷毛目がうかがえる。5は、脚付塊である。塊部を欠く。外面は横位のヘラ磨きを行なう。内面は、中心付近では、中心から左回りのナデ調整、裾部にかけては、刷毛目を左回りに施す。6は、壺である。口縁部内外面および体部外面は刷毛目調整、体部内面は横に削る。頸部の内外面は、横ナデする。7～9は、壺である。口縁部は横ナデ、体部外面は刷毛目、内面は上半では右上りの削り、下半には指頭圧痕が並ぶ。10は勾玉である。滑石を削ったのち、あらく磨いている。



Fig. 81 892号遺構遺物出土状況（南西より）

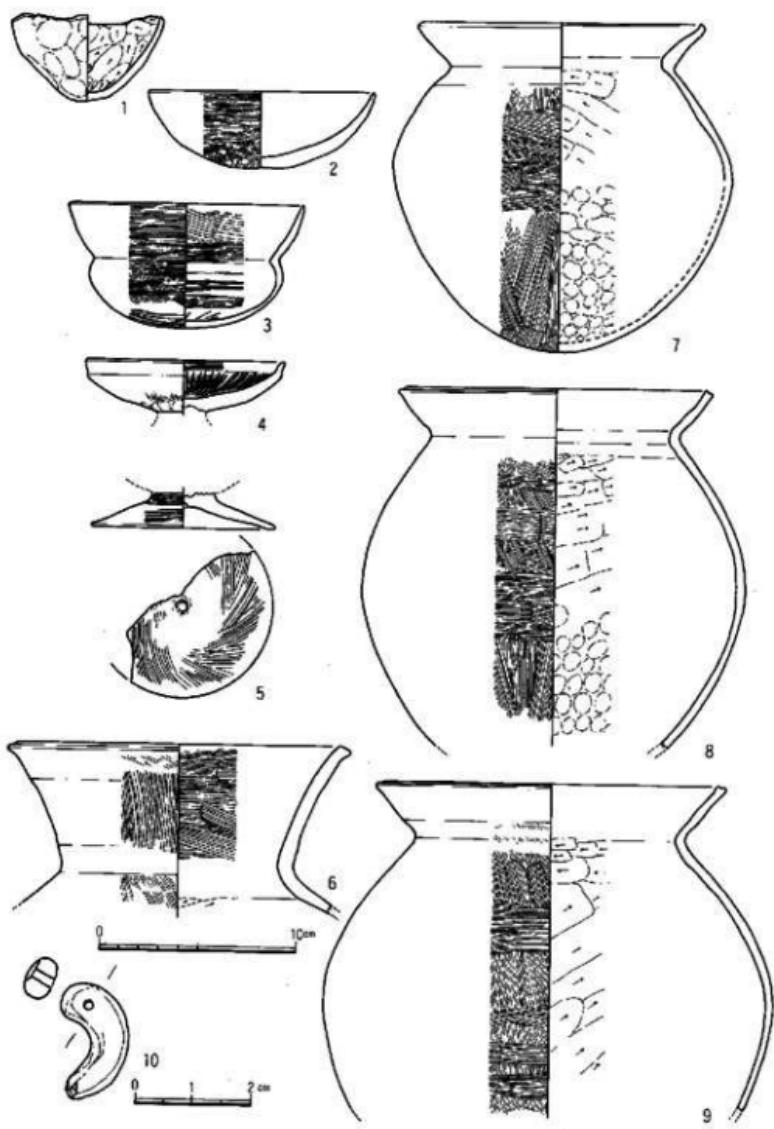


Fig. 82 892号墓出土遗物实测图 (1/3 · 10---1/1)

905号遺構

第4面D・E-18・19区より検出した竪穴住居址である。西辺で、906号遺構と切り合い関係にあるが、先後関係ははっきりしない。調査時の所見では、905号遺構が先行するとの印象を持っている。その他、946号遺構・1030号遺構にも切られ、西辺は失われている。ほぼ全体を検出できた東壁と、その西端を欠く北辺・南辺からみて、一边約4.8mの隅丸方形を呈するものと思われる。検出面からの深さは、約40cm弱をはかる。床面上から数基の柱穴が検出されたが、主柱穴は4本と考えられる。なお、南辺近くから須恵器(1・3)が重なって出土した。

出土遺物は土師器・須恵器で、出土量は少ない。1~5は、須恵器である。1・2は、環蓋である。完形品である1についてみると、頂部(体部の約2分の1付近まで)を回転ヘラ削り、以下口縁までの内外面は横ナデする。内底部はナデ調整、これと横ナデとの間、丁度器肉が最も肥厚する部分は、全周で八角形を呈するナデ調整が施されている。3~5は、環である。完形品である3をみると、外底部(体部の約2分の1)は回転ヘラ削り、口縁端部までは横ナデする。内面は横ナデ、内底部中央付近はナデを施す。6は土師器の高环である。环部内外面はヘラ削き、脚の筒部の内外は、横位の削りを行なう。7~11は、似非須恵土師器の壺片であろう。

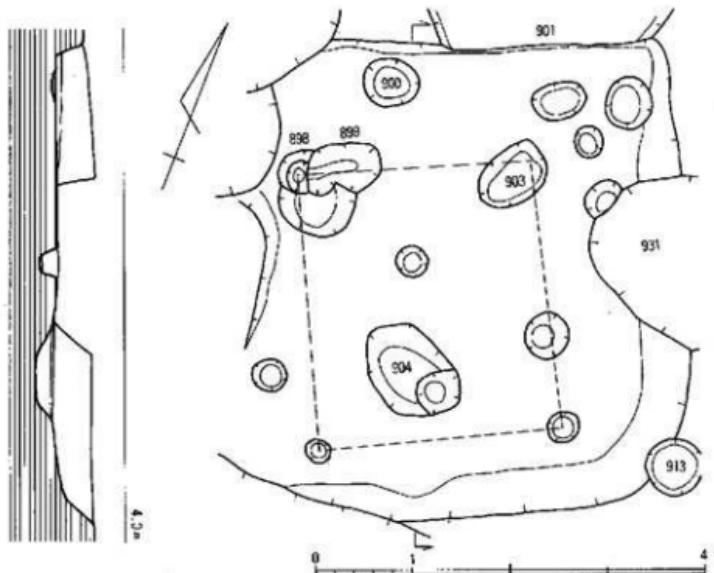


Fig. 83 905号遺構実測図 (1/60)



Fig. 84 905号遺構（北より）

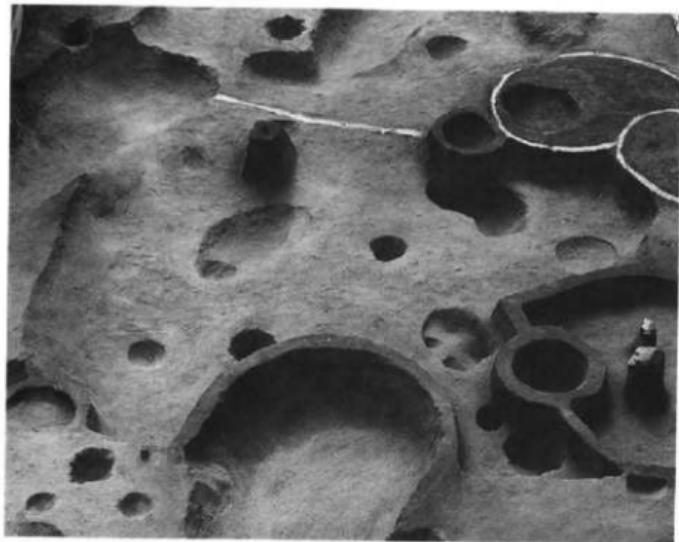


Fig. 85 905号遺構（東より）

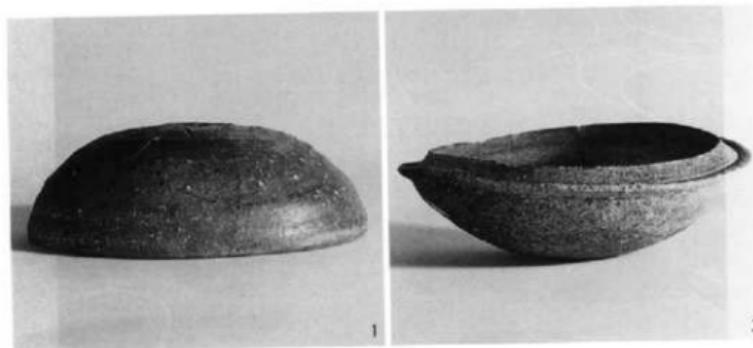


Fig. 86 905号遺構出土遺物

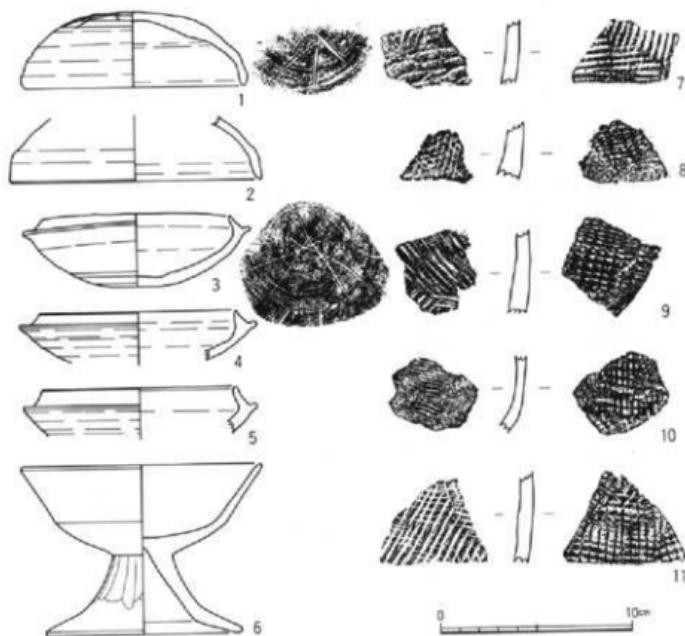


Fig. 87 905号遺構出土遺物実測図 (1/3)

906号遺構（-891号遺構）

第4面D・E-15~17区で検出した竪穴住居址である。東辺で905号遺構と重複（切る？），西辺で892号遺構を切っている。遺存部分から推定して、一辺約4.3mの方形を呈すると推定される。検出面からの深さは、18~30cmをはかる。

南辺のはば中央に、竈が付設されていた。灰白色の粘土を、U字形に置いたものである。熱に

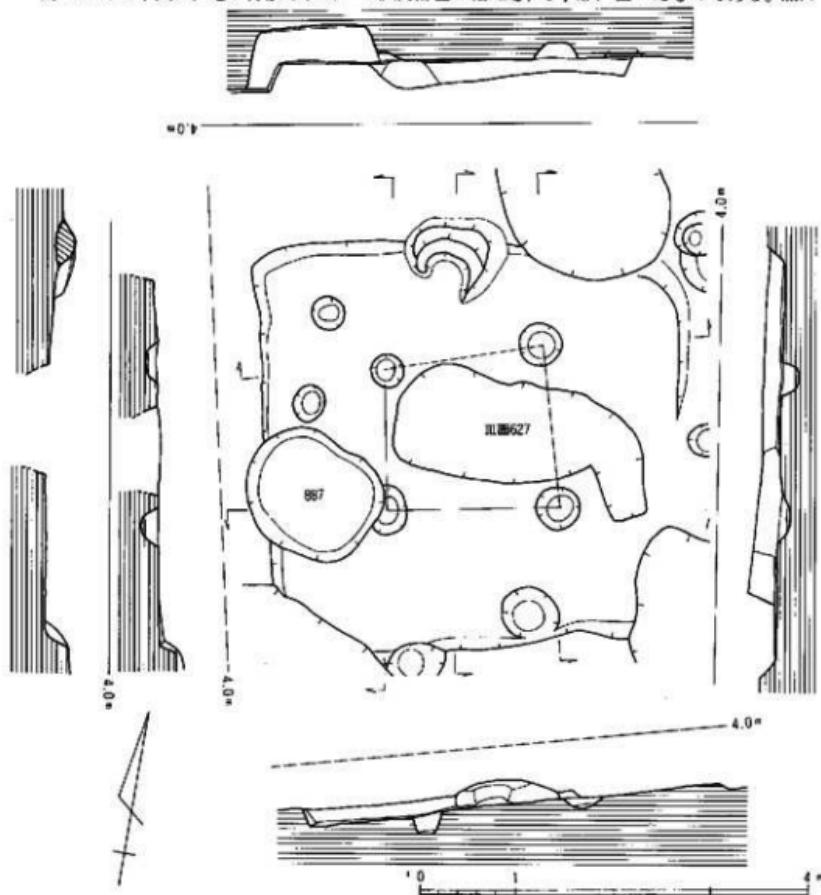


Fig. 88 906号遺構実測図 (1/60)



Fig. 89 906号遺構（南より）



Fig. 90 906号遺構（東より）

より赤変等は、特に認められなかった。床面から、高さ21cm分を検出している。

主柱穴は、4本である。ほぼ1.7mの間隔で並んでいる。

出土遺物は、土師器・須恵器である。1・2は、土師器である。1は、塊である。中位で小さくくびれて、屈曲がつく。内外面ともに、密にヘラ磨きを施す。胎土は比較的良好で、赤茶色を呈している。2は、鉢である。口縁部は、小さく折り返して、丸くおさめる。体部は横ナデ、口縁部内面は横ナデし、体部内面は右上りのヘラ削りを行なう。3～5は、須恵器である。3は環蓋である。内外面とも横ナデする。4・5は、壺である。外底部（体部全体の2分の1強）は、回転ヘラ削りする。体部外面と内面は、横ナデ調整される。なお、4の外面、体部と

底部の境界付近には、ヘラ記号が示されている。

6は、似非須恵土師器であろう。内外面とも、横ナデ調整する。土師質の焼成で、茶褐色を呈している。



Fig. 91 906号遺構カマド（南より）

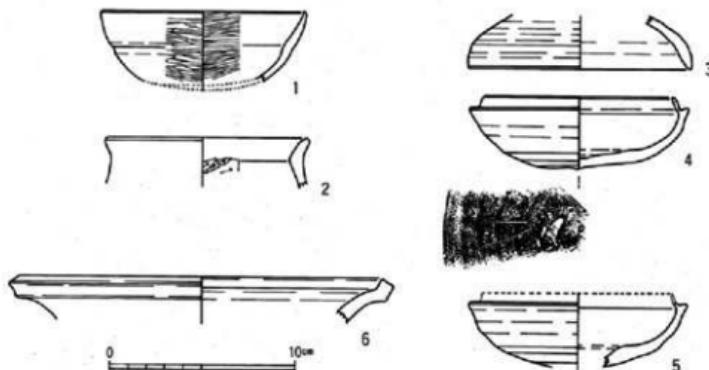


Fig. 92 906号遺構出土遺物（1/3）

945号遺構

第4面B-18・19、C-18~20区より検出した竪穴住居址である。北西部分は、調査区外へ出ている。ほぼ完全に検出できたのは、南東壁のみである。南東壁・南西壁からすると、4.4m×3.6m以上の長方形もしくは方形に復原される。検出面からの深さは、18~25cmをはかる。

遺構床面上で10基の柱穴が検出された。主柱穴の特定はできていないが、一応、4本主柱穴の内の2本と思われる柱穴を想定している。

また、住居址南西壁沿いで、焼砂部分を検出した。火を焚いた痕跡がみられる。

堆土中の、床面上5~27cmの位置から、完形品を含む大量の土器が出土した。住居廃絶後に

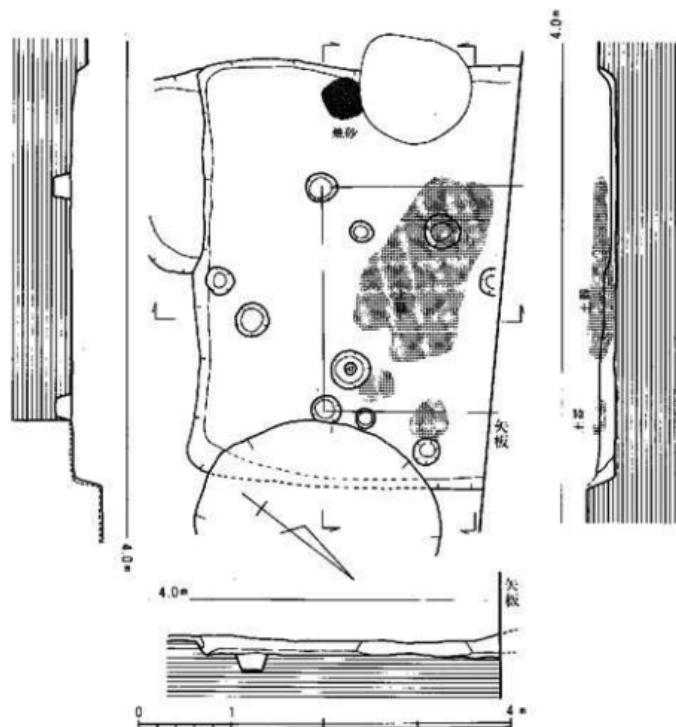


Fig. 83 945号遺構実測図 (1/60)



Fig. 94 945号遺構検出状況（北より）



Fig. 95 945号遺構（東より）

一括して廃棄されたものである。

出土遺物は、土師器・鉄器・石器などである。出土した土器は大量であり、そのすべてを実測することは、時間的な制約もあって、不可能であった。Fig.99~103に示したのは、実測できた資料のすべてである。破片のみで実測に適さなかったものを除けば、器種、器形としては、全てをあげている。

1~5は、塊である。1・2は、内外面にヘラ磨きを施す。1の外底部は、乱雑にヘラ磨きされる。内面のヘラ磨きも乱雑で、手持ちで土器を回しながら施したものと思われる。2の外底部のヘラ磨きは、分割ヘラ磨きである。内面は、同心円状に磨く。3は、外面の下半をヘラ削りし、内面には網目状の暗文を施す。4の外面下半もヘラ削りである。内面は、中心から外に向けて、多方向のナデが行われている。5は、外底部中央付近をヘラ削りし、体部下半は刷毛目、上半は横ナデする。内面上半は、口縁付近では粗い刷毛目を横ナデでナデ消し、下半は、多方向の雜なケズリの上を平滑にナデしている。1~4は、比較的良好な胎土で、赤茶~茶褐色を呈するが、5の胎土は粗砂をまじえ、褐色を呈する。6・7は、脚付塊である。内外面とも、



Fig. 96 945号造構遺物出土状況1（東より）

密にヘラ磨きする。6の脚部内面は左まわりの刷毛目、7の脚部内面は横ナデする。ともに、胎土は良好で、茶～赤茶色を呈する。8は器台である。内外面ともに、密にヘラ磨きする。皿部の内底面は、器表が剥離気味で、調整がみえない。おそらく、放射状に暗文がはいるものであろう。胎土は良好で、赤茶色を呈する。9は、高坏の脚である。裾部外面は左回りの刷毛目、筒部外面の下半は縱に刷毛目、上半は下半の刷毛目をナデ消して、横ナデする。裾部内面は左回りの刷毛目、筒部内面はケズリを行なう。胎土には、粗砂粒がまじり、淡褐色を呈する。10～12は、小形丸底壺である。良好な胎土で、茶色～橙茶色を呈する。10の外面は、縱刷毛目の後、ヘラ磨きを行なっている。外底部は、ジグザグ状に磨く。内面は、下半はコテ状工具により平滑に整え、肩部から頸部の内面はまばらに横ヘラ磨き、頸部付近は密に横ヘラ磨きし、口縁部内面はヨコナデする。11は、内外面とも密にヘラ磨きするが、肩部外面には縱刷毛。体部内面にはナデが残っている。外面の体部下半は、手持ちヘラ削りで丸味を削り出した後、ヘラ磨きを施している。12では、外面は肩部から上は縱刷毛の後ヘラ磨き、下半はヘラ削りの後、底部のみ刷毛目を施す。なお下半部のヘラ削りは、上半部の刷毛目を切る。内面では、口縁部は横ヘラ磨き、体部は横刷毛調整し、底部のみ多方向からの刷毛目調整を行なう。13・14は、長頸壺である。外面は、肩部に斜め方向の刷毛目がのぞいている以外は、密にヘラ磨きする。頸部内面は、横ナデの上に右上りの暗文を施す。頸部巻ぎ目から肩部にかけての内面は、指頭で押

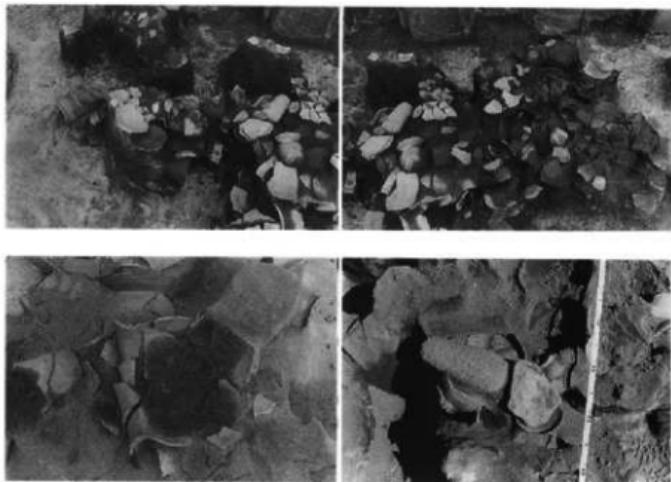


Fig. 17 945号遺構遺物出土状況 2

压する。体部内面は、刷毛目である。15は、鉢である。外底部は、手持ちヘラ削り、内底部は、指で絞り込む。体部内面は、ヘラ削りの上に平滑なナデを行なう。16~27は、壺である。16は、体部外面は、底部方向からの削りで、肩部から頸部にかけては、削りの上に縦刷毛が施される（下→上）。体部内面は平滑にナデしており、凹凸はほとんどない。壺とすべきか。17は、体部外面はナデ、外底部には擦過痕がみとめられる。口縁部は横ナデする。体部内面は、すべてやや右に傾いた縦方向の削りを行なう。18は、うすく褐色をおびた白色を呈する土器で、内面には水銀朱が容れられていた為、赤色を呈する。口縁は、一部を内面に工具をあてて押し出して片口に作る。外面の体部下半は、底部側から擦過痕がつく。内面は、ヘラ磨きもしくはきわめて細かいナデにより平滑に仕上げる。19・20の外面は、すべて縦刷毛で調整される。19の内面はやや左上りの横削り、20は縦の削りで整形する。21~27は、布留式系の壺である。28~32は複合口縁の壺または壺である。28は、内外面とも横ナデ、29も刷毛目の上から横ナデを施す。30は、壺である。筒形に立った口縁部外面に、縦の暗文をいれる。体部の内面は、横位の削りである。31は、内外面とも横ナデする。32では、口縁部は内外面とともに縦刷毛の上から横ナデ、頸部外面から体部にかけては、横ナデの上に縦位の暗文。頸部内面は横刷毛し、肩部内面はナデ調整する。頸部から口縁部への屈曲部分、頸部から肩部へ向っての屈曲部分の内面は、強く横ナデする。なお、ラッパ形に開いた頸部に帯状に立つ口縁部を貼りつけるにあたっては、頸部側の端部に、あらく刻み目を入れている。大形の壺であろう。33は、鐵鍊である。鍛造。先端を欠く。基部は小さく折りまげる。基部で、幅3.05cmをはかる。34・35は石杵と考えられるものである。花崗岩製。34の下端には、水銀朱が付着している。35には、風化が進み、表面があれていますが、顔料の付着はみられなかった。Fig.98に示したものは、埋土の上部から出土した銅製品である。厳密に945号遺構に伴なうものは疑問の残るもので、一応報告しておく。ラッパ状に開く筒形品で、高さ3.51cm、据部幅2.8~2.5cmをはかる。すばまたの側の端近くの内面は、詰っている。

なお、この他、図画しえなかつた土器では、Fig.82-6のタイプの壺が出土している。

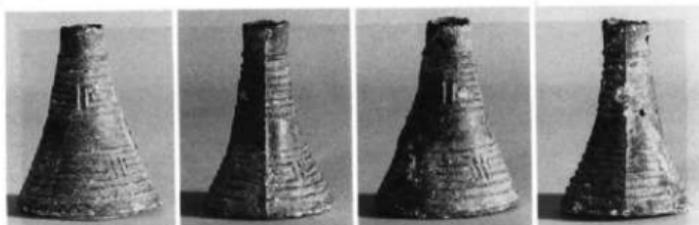


Fig. 98 945号遺構出土銅製品

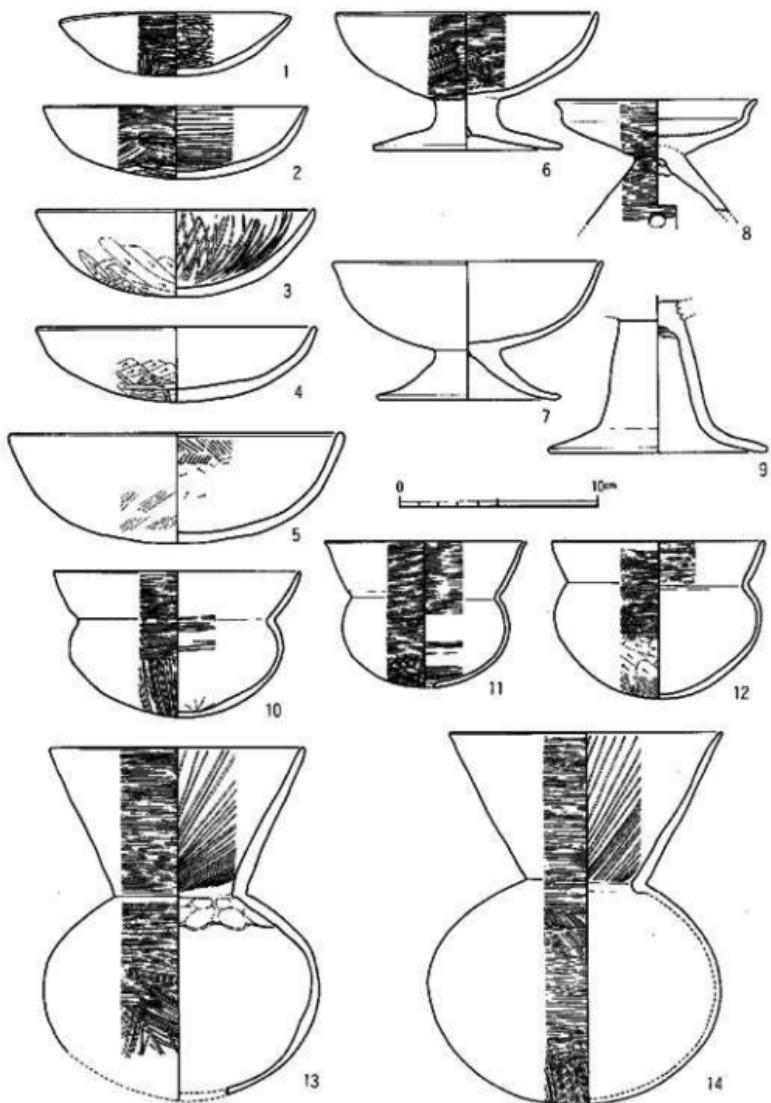


Fig. 99 945号遺構出土遺物実測図 1 (1/3)

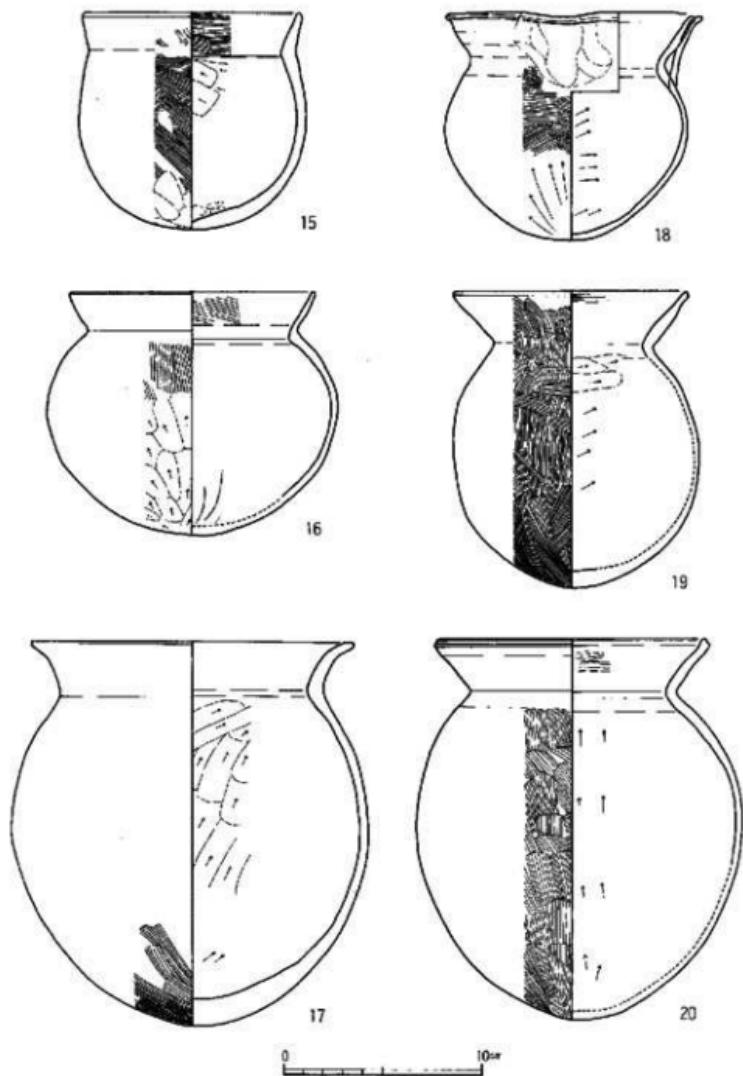


Fig. 100 945号遺構出土遺物実測図 2 (1/3)

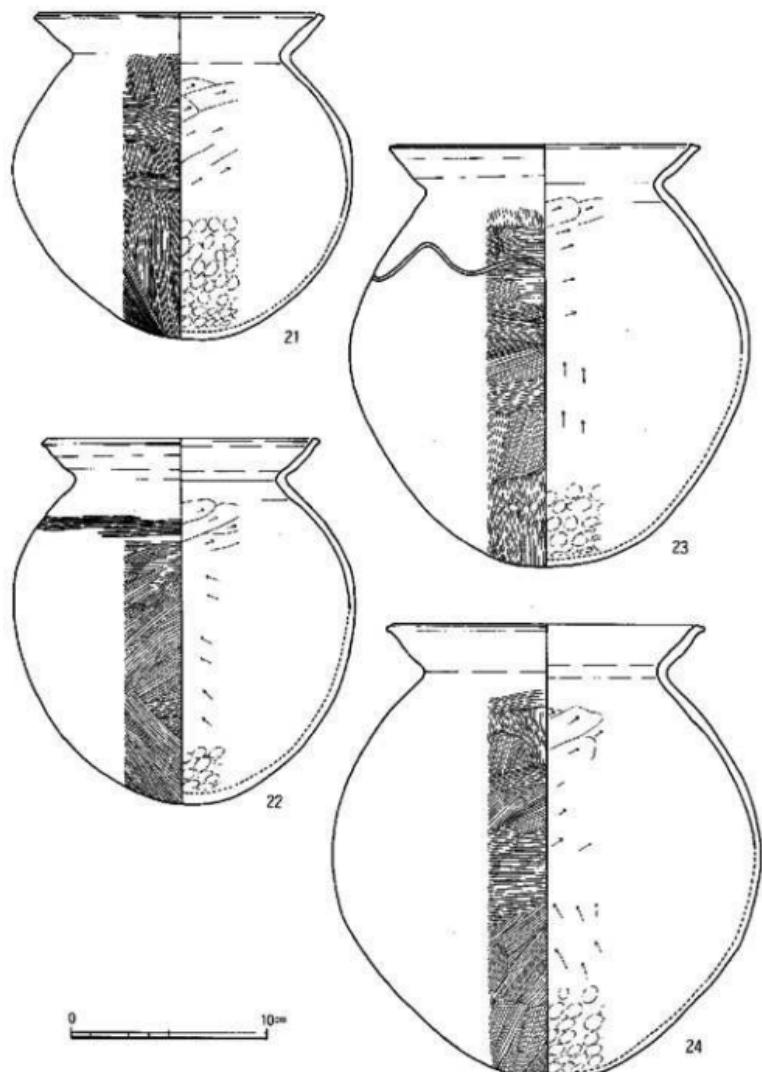


Fig. 101 945号遺構出土遺物実測図 3 (1/3)

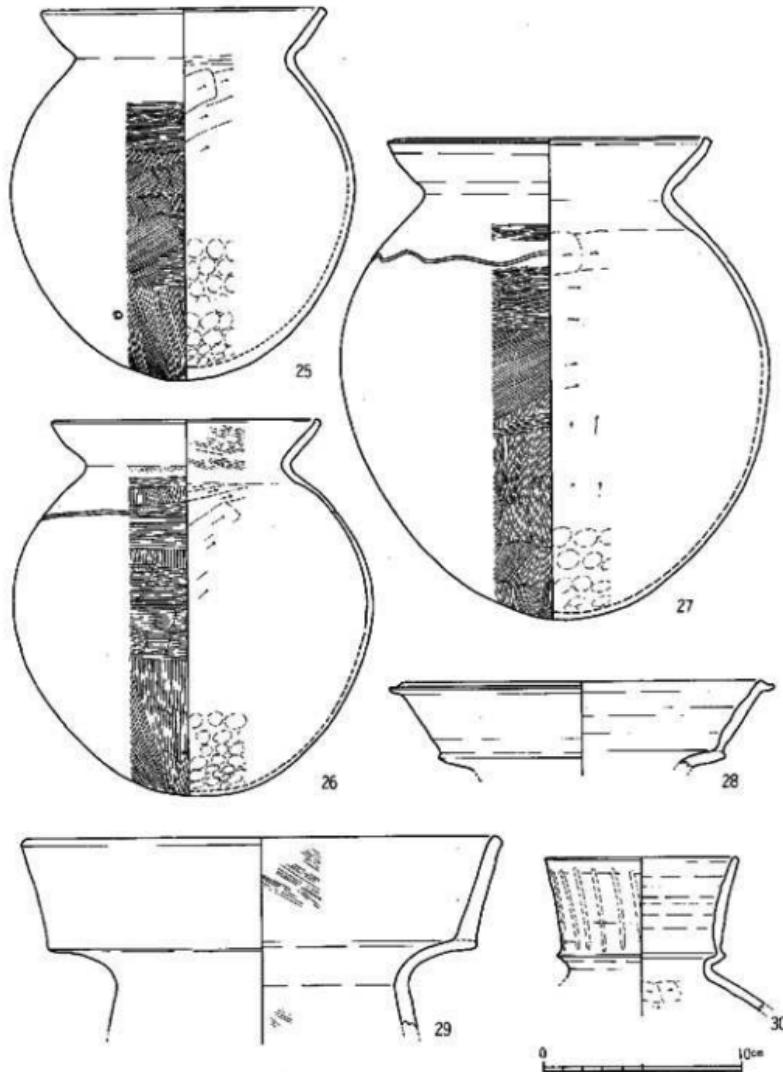


Fig. 102 945号遺構出土遺物実測図 4 (1/3)

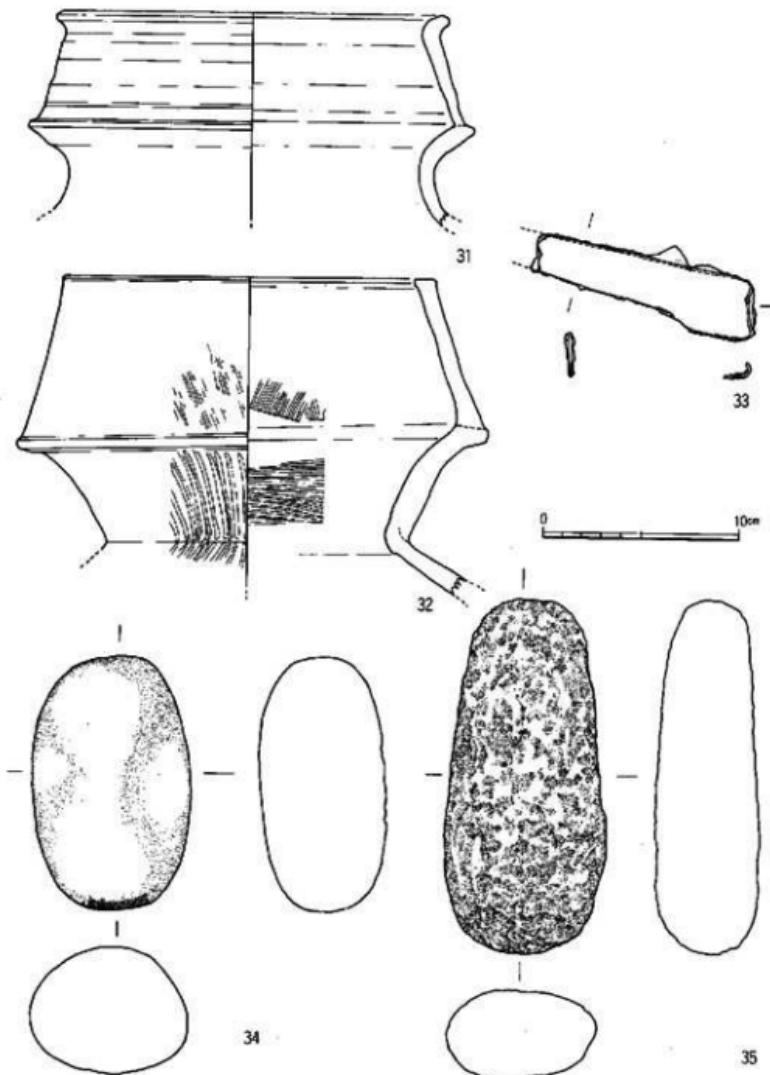


Fig. 103 945号遺構出土遺物実測図 5 (1/3)

987号遺構

第4面F・G-24・25区より検出した竪穴住居址である。南東辺は調査区外へである。ほぼ完全に検出した北西辺、比較的残りの良い北東辺から、4.8m×3.5m以上の方形もしくは長方形を呈すると推定される。検出面からの深さは42cm～55cmをかる。

床面から6基の柱穴を検出したが、主柱穴と思われる柱穴は1基のみで、おそらく2本主柱穴になると考えられる。

住居址西隅で、壁面に接して、砂岩製の砥石が出土した。長さ、50.5cm、最大幅19.5cmをかる大形の砥石で、石の全周が砥石面として使用されているが、びっしりと鉄錆が付着していた。屋内の片隅に据え置かれ、鐵鎌などの鐵器を研いでいたものか。ただし、鉄錆がどういう状況で砥石に付着したものかは、確認できない。

出土遺物は、土師器のみである。破片ばかりで、量も少なかったため、実測したのは、3点にすぎない。1は高杯である。内面は横ナデの上にヘラ磨き、口縁部は横



Fig. 104 987号遺構砥石出土状況（南東より）



Fig. 105 987号遺構（南より）

ナデ、外面は密にヘラ磨きを施す。2は壹の口縁部である。外面は縦位の刷毛目調整を消して、横ナデ調整する。内面は右下りの横刷毛、頸部のくびれ付近は横刷毛調整を行なった後、横ナデ調整する。3は、布留式系の甕である。頸部のくびれ部の下から口縁部までを横ナデ調整、体部内面は横位の削りを行なう。体部外面は、ややあれているが、縦位の刷毛目調整がみとめられる。

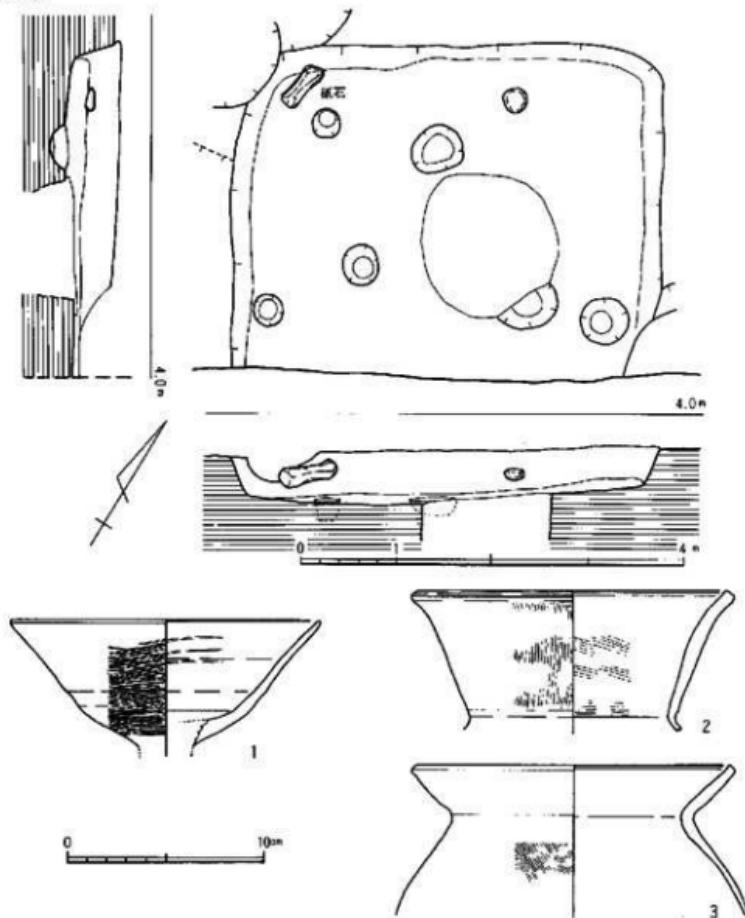


Fig. 108 987号遺構実測図 (1/60)、出土遺物実測図 (1/3)

988号遺構

第4面D-25・26区、E-24-26区より検出した竪穴住居址である。住居址のほぼ中央を東西に、第3面の758号遺構（溝）に切られている。また、南隅は、前述した987号遺構に切られている。

第3面758号遺構に切られている為に、明確に確認していないが、南北に分断された遺存部分からみて、南東壁と南西壁に沿って、屋内高床部（ベッド）が付設されている。

現状から推定して、 $4.5 \times 3.9 \sim 4.2\text{m}$ の方形を呈するものと考えられる。屋内高床部は、南東壁からは幅1.1m、南西壁からは幅0.9mをはかる。検出面からの深さは、屋内高床部で18cm、床面までは40~50cmをはかる。

床面上では、柱穴は検出されておらず、主柱穴の配置は不明である。

なお、北隅近くの北西壁沿いで、焼砂がみとめられた。火熱によって赤変したもので、火を焚いた痕跡と考えられる。

出土遺物は、土師器・須恵器である。小破片が多く、量的には少ないので、図化した資料は、図示した2点の土師器のみである。1は、塊である。内面は密に横ヘラ磨きする。外面は、口縁部は横ナデ調整、体部は密にヘラ磨きする。体部外面のヘラ磨きは、口縁部の横ナデを切っており、横ナデ後になされたことを示している。2は、複合口縁の甕の口縁部片である。内外面とも、横ナデ調整する。

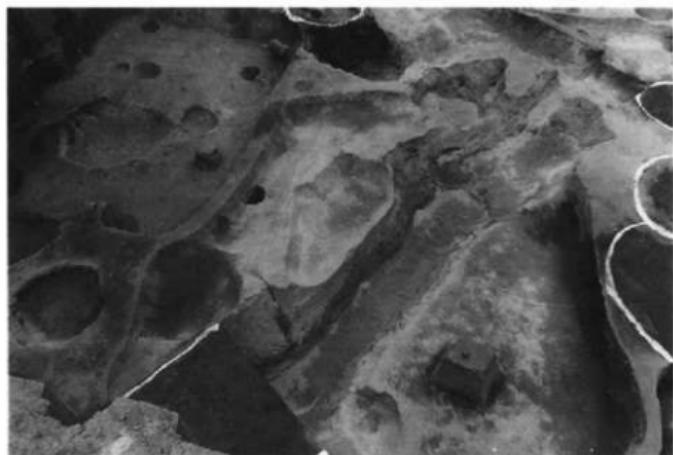


Fig. 107 988号遺構（東より）

この他に、須恵器の小片が出上しているが、切り合ひ関係からみて、混入遺物であろう。

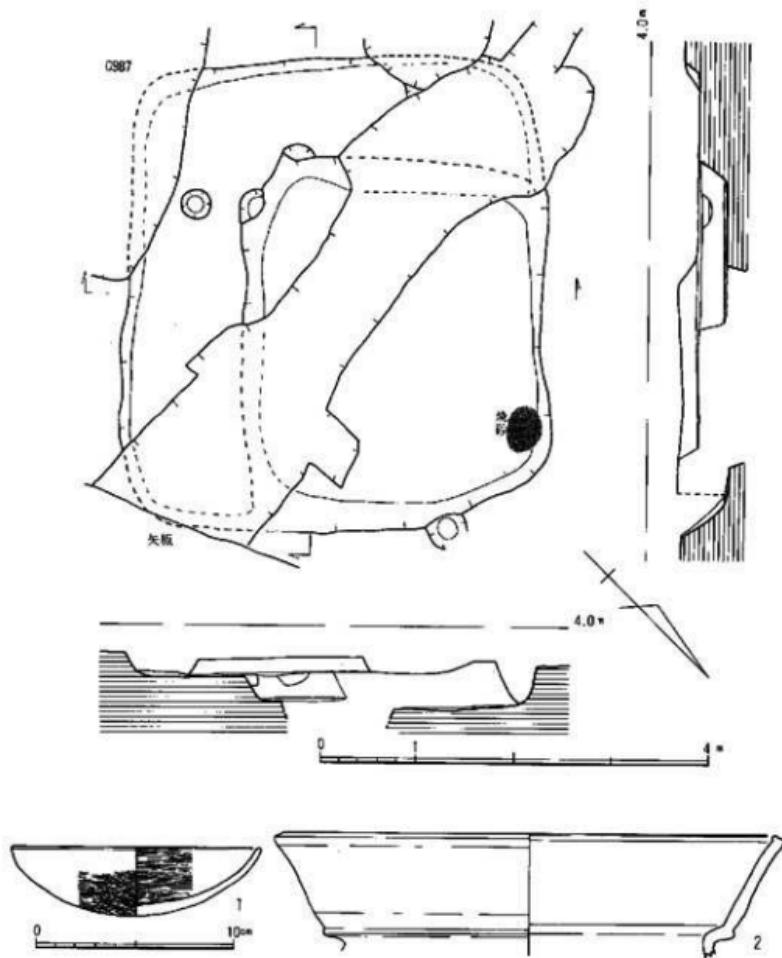


Fig. 108 988号遺構実測図 (1/60)、出土遺物実測図 (1/3)

988号遺構

第4面B-25・26区、C-24-26区より検出した竪穴住居址である。北側を調査区境界の矢板および中世の土壙に切られ、失っている。また、南辺は、中世の土壙および、988号遺構に切られ、部分的に検出できたのみである。東辺は、南から北に、幅を減じている。これについては、調査区東辺の矢板打ち込みによる攪乱の影響が考えられ、若干疑問が残る。部分的ながら壁が追えて全体が推定できる南辺と、比較的延長が良く残っている西辺からみると、4.7m×3.6m以上の長方形もしくは正方形(台形?)のプランが推定できる。検出面からの深さは約60cmをはかる。

住居址床面からは、6基の柱穴、小土壙を検出しているが、主柱穴と思われる遺構は、確認してはいない。

出土遺物は、土師器・須恵器・似非須恵土師器などが出土している。

1・2は、土師器である。1は壺である。内面は、やや難な横位のヘラ磨き、外面は多方向からの密なヘラ磨きを施す。なお、外底部は(体部の約2分の1から下方)は、手持ちヘラ削りを行なって整形した上にヘラ磨きを行なっている。胎土は、微砂を含むが良好で、明茶色を呈する。2は、脚付小形丸底壺である。脚部は欠損している。外面は、口縁部から頸部のくびれ部分にかけては縱位の刷毛目、体部下半は手持ちヘラ削りをした後に、横位のヘラ磨きを密に施す。内面は、口縁部では横位の刷毛目調整の後、横ナデを行ない、刷毛目はナデ消される。頸部の屈曲部付近には、横刷毛目が消されずに残っている。体部の内面は、多方向から磨き、平滑に仕上げている。胎土は、比較的良好で、赤茶色を呈する。3・4は、須恵器の壺蓋である。頂部は、回転ヘラ削り、体部は横ナデする。内面は、頂部ではナデ調整、体部では横ナデ調整をする。なお、4の外面には、布痕と考えられる纖維痕跡が、ベッタリとついている。粘土が乾いていない段階で、器壁にへばりついていたものと思われ、この部分では調整痕跡は明確ではない。5は、似非須恵土師器であろうか。外面には纏織文のつくタタキ痕、内面には格子目状の沈線がつくタタキ痕がみられ、内面の上半では、タタキ痕の上に刷毛目調整がなされている。土師質の焼成で、褐色を呈する。6・7は、似非須恵土師器である。内外面とも横ナデ調整される。土師質で、濃褐色を呈する。8は、滑石製の紡錘車である。蛇紋岩である。989号遺構床面から検出した、1006号遺構より出土している。

989号遺構は、988号遺構に切られている。また、遺構壇土上からも、多数の遺構が掘り込まれていた。これらの点からみて、3~7の遺物は、上位の遺構からの混入物と考えられる。

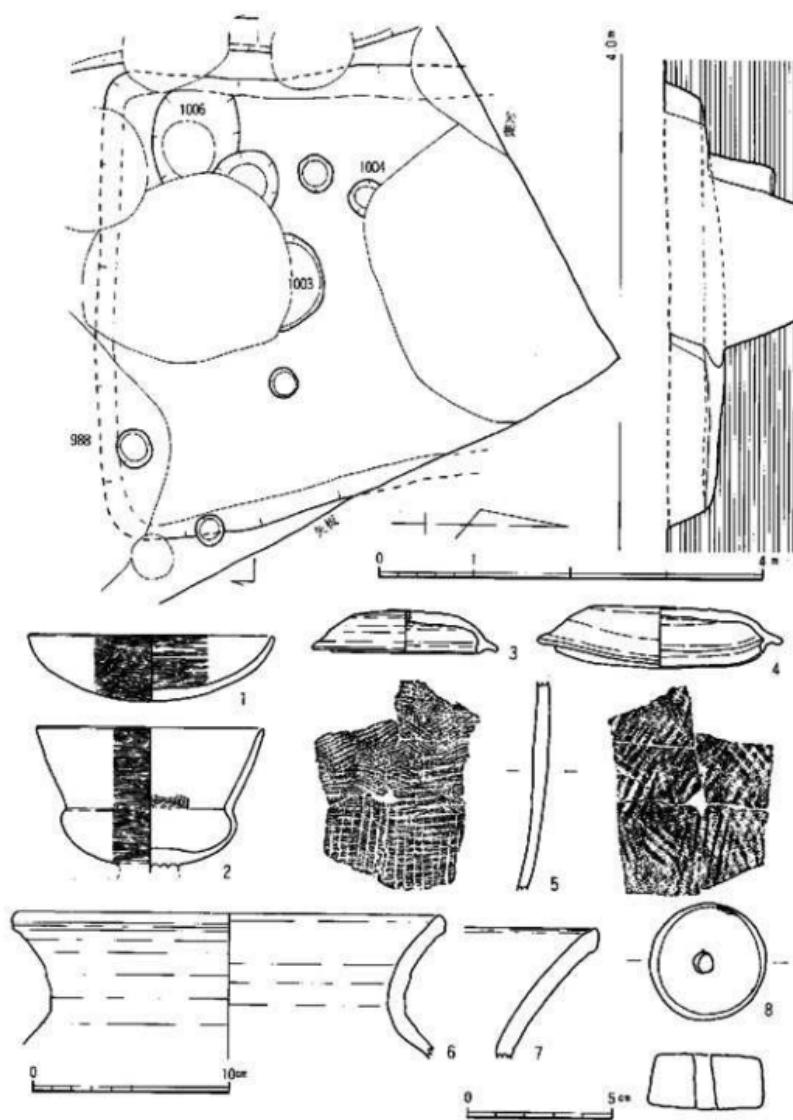


Fig. 109 989号遺構実測図 (1/60)、出土遺物実測図 (1/3)

1015号遺構

第4面B・C-21・22区より検出した竪穴住居址である。北側は、調査区外に出る。西辺は、1036号遺構(井戸・12世紀)に切られている。西接する945号遺構との切り合い関係は、間に1036号遺構をはさんでいるため、明らかではないが、現存する部分から見る限りでは、直接の切り合い関係はないと思われる。住居址中央は、934号遺構(溝、9世紀初?)によって縦貫されている。一辺がほぼ完存していた南辺と、比較的の遺存状況の良好な東辺から推定して、2.8m×2.8m以上の方形もしくは長方形プランをとると考えられる。検出面からの深さは、10~15cmである。

出土遺物は、土師器が少量出土したにとどまる。床面上から完形品の塊が1点、上向きに出土しており、図化できたのは、この1点のみであった。Fig.110に示したのが、それである。比較的良好な胎土で、橙茶色を呈している。外面は、上半では横ヘラ磨き、下半は上半のヘラ磨きにかぶさって、分割ヘラ磨きが施される。内面は、ややすきまをあけたヘラ磨きを、中央部からラセン状に施している。

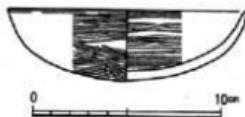


Fig. 110 1015号遺構遺物実測図 (1/3)

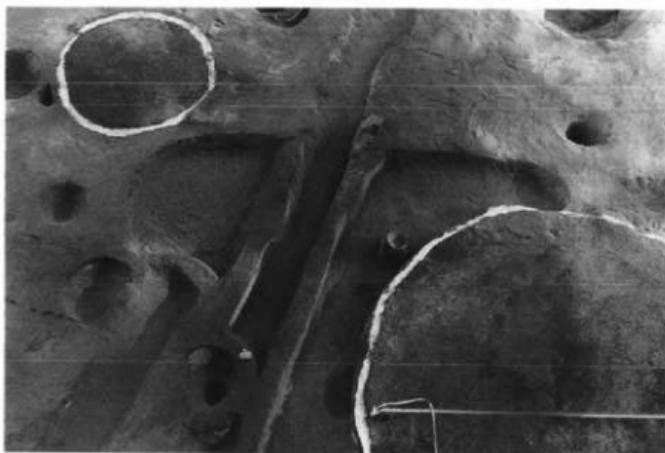


Fig. 111 1015号遺構 (北より)

7. その他の遺物

前節までは、主要な遺構ごとに出土遺物について触れてきた。しかし、時間的制約、紙数上の制約等で、記述できなかった遺物は、多量に残されている。そこで、ここでは、それらの中から重要なものの、特殊なものを紹介することとする。

弥生時代・古墳時代の遺物

1・2は、甕棺片である。1は、弥生時代中期初頭の金海式甕棺の口縁の破片である。口縁端部には、刻み目が並ぶ。2は、弥生時代中期の甕棺の胴部片である。突帯が2条めぐる。本来は、月が塗られていたもので、所々に丹が残っている。

3～8は、古式古墳器である。3は、口縁部下端に粘土を貼り付け、二重口縁につくる。口縁帯には、円形の粘土を貼り付け、さらに竹管で刺突する。胎土は、小砂粒を含むが、粗い感じはない。明るい淡褐色を呈す。焼成は、軟質である。4は、二重口縁の下端内側に粘土を貼り付け、肥厚させる。茶褐色を呈する。焼成は良好。5は、鼓形器台の小片である。6は、庄内式土器の甕である。口縁部内面は右下りの刷毛目、体部内面は右上りの削りで、頸部の内面には鋸く稜がつく。体部外面は、やや右下りの平行タタキの上に、あらい刷毛目を施す。7・8は、東海系S字状口縁付甕である。小さく折り返した口縁部には、押し引き状の刺突が並ぶ。8について、体部の調整をみると、頸部から肩方向へ向って、櫛引き文をつける。肩部には、やはり櫛状の工具を横に引いて、平行沈線を刻み、その上に縦に櫛引き文を施す。体部中位は、右下りの斜め方向の刷毛目調整を行なう。体部内面には、特に調整痕は認められず平滑だが、ナデ調整であろう。

9は、似非須恵土師器であろうか。焼成は土師質であるが、良好で、硬質である。器台形土器と思われるが、器形の全体は復原できない。外面は平行タタキで、タタキは下端部の突帯上にまで及んでいる。その後、タガ状に横ナデを施し、部分的にタタキ痕をナデ消している。内面は、タタキ痕をナデ消す。さらに、1.3～2.7cm程の間隔をあけて、幅5～7mmの、縦方向のナデを暗文状に施す。

10は、碧玉製管玉未製品であろう。長さ3.45cm、最大幅1.43cmをはかる。11は、石包丁である。安山岩質凝灰岩製。使用痕は認められないが、研磨は全面になされており、一応製品として整形の終ったものと考えられる。

本調査区では、上記の他、弥生時代終末期の土器片も少なからず出土している。ただし、これら弥生時代の遺物に関わる遺構は、全く検出されていない。既往の調査結果からみて、本調査地点の東方に弥生時代の集落・墓地があったと予想される。

古代・中世の遺物

12は、土師器の目で、いわゆる「へそ皿」である。肌色のきめ細かい胎土で、焼成も良好である。底部中央を外方から押し出す。体部下半から外底部には、掌紋が残る。器内は、薄い。口縁には煤が付着しており、灯明皿として用いられていたことを示す。

13は、反軸陶器の塊である。細い三角形の高台を貼りつける。外底部の切り離し痕は、横ナデによって、ナデ消されている。14は、縦軸陶器の塊である。高台端部を欠く。疊付から高台

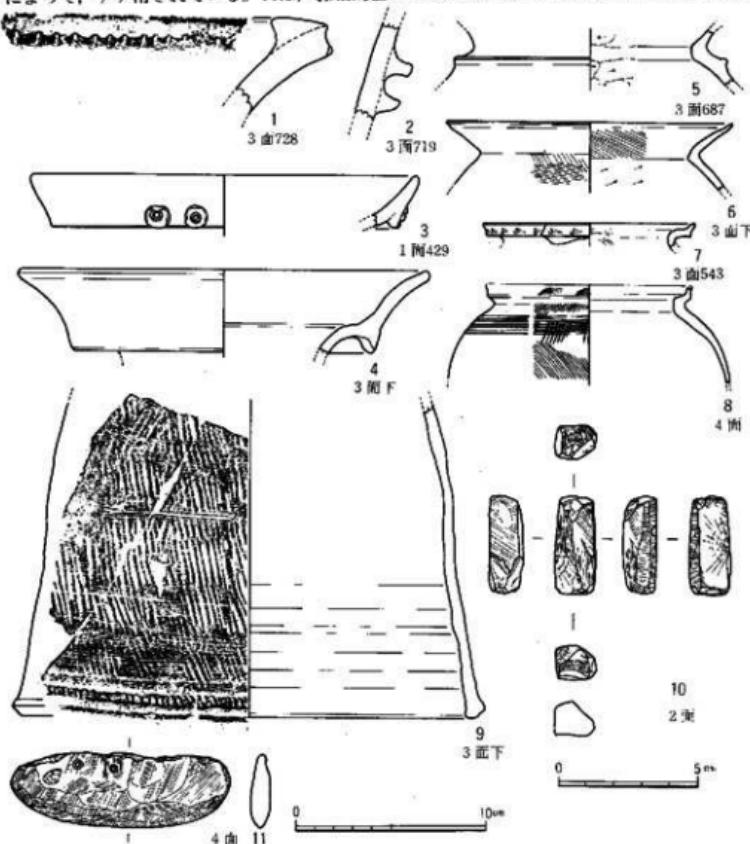


Fig. 111 その他の遺物実測図 (1/3-10…1/2)

内側は露胎となる。釉は、濃緑色で、磨りむらがみられる。胎土は、灰茶色で精良、焼成は土師質だが、硬く焼きあがっている。

15は、黒色土器の皿である。低平な高台がつく。内外面とも密にヘラ磨きされている。16～18は、内黒土器である。19は、片口の鉢である。内面は、密にヘラ磨きする。外面は、横ナデする。17・18は、塊である。17の内面は、密にヘラ磨き、外面は横ナデする。外底は、ヘラ切りする。

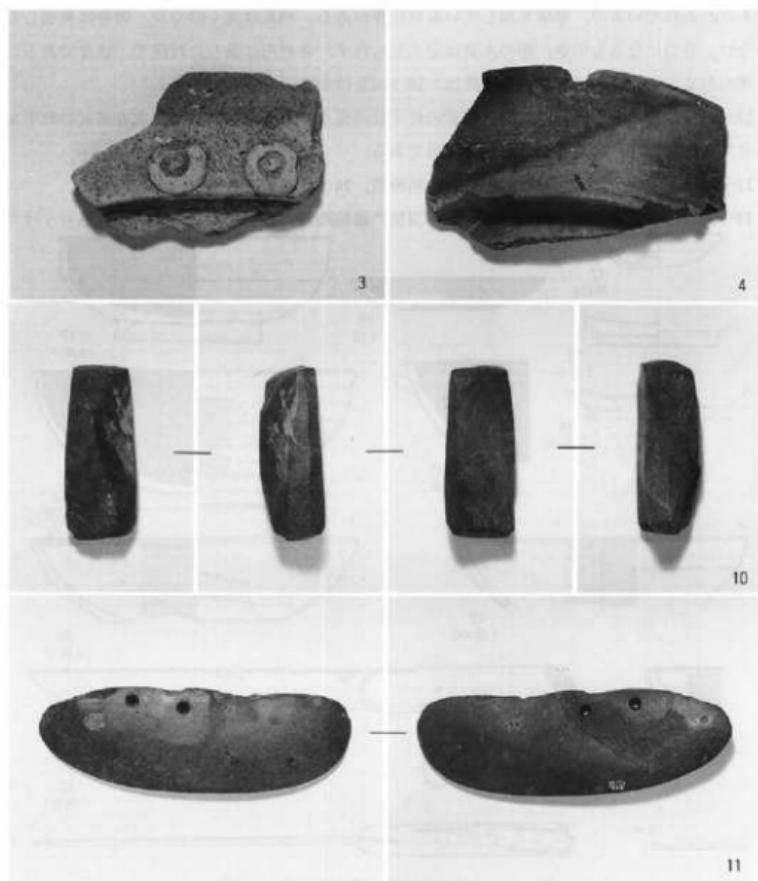


Fig. 112 その他の出土遺物1

18の内面は、体部上位で横ヘラ磨き、下位で分割ヘラ磨き、内底部には不定方向のヘラ磨きを密に施す。体部外面は、高台際まで横ヘラ磨きする。底部は、ヘラ切りである。

9~21は、楠葉型瓦器碗である。18・21は内外面とも密にヘラ磨き、20の外面は粗らにヘラ磨きを行なうにとどまる。

22は、鉄製の短刀である。柄尻を欠くのみで、遺存状況は良好である。柄表面は、砂の付着があり、あれているが、黒漆を施している可能性がある。柄元は丸くつくり、鍔等は装着していない。呑口になるものか。鞘の木質は全く見られず、井戸内に落ちた段階で、抜身であったと思われる。切先から区までの刃部長は、18.9cmをはかる。

23~26は、瓦である。23は、鴻臚館式の軒平瓦の瓦当である。24・25は、北方系瓦の軒平瓦瓦当である。26は、北方系瓦の軒丸瓦瓦当である。

27・28は、石鏡である。27は、小豆色の粘板岩、28は滑石製である。

29~35は、輸入陶磁器である。29は、中国製の縁輪陶器の香炉である。釉は、火熱をうけて

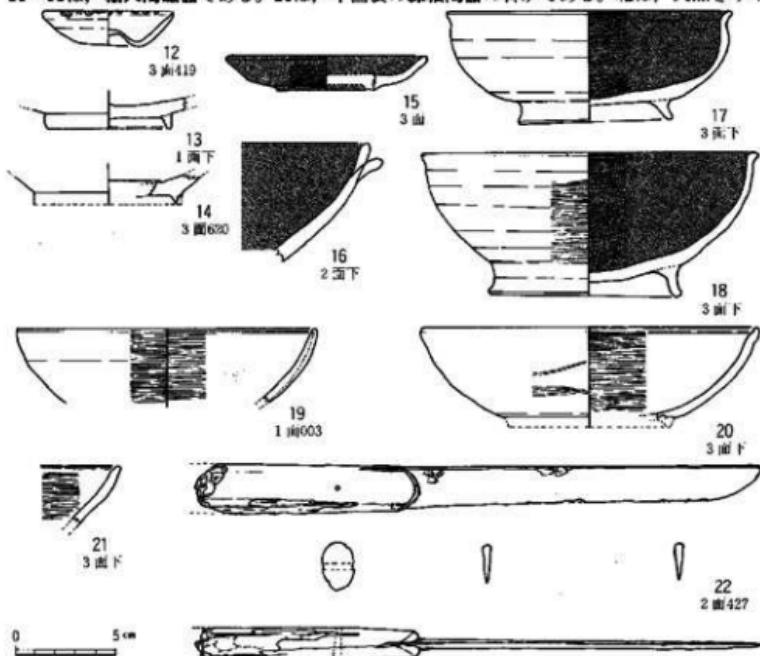


Fig. 113 その他の出土遺物実測図 2 (1/3)

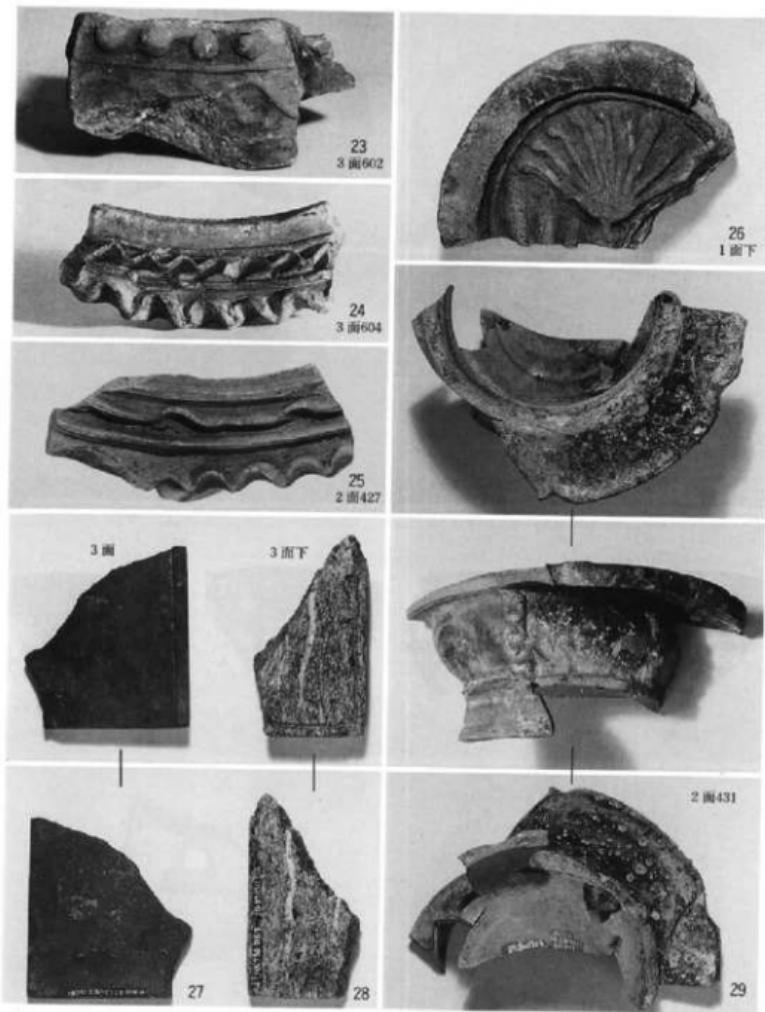


Fig. 114 その他の出土遺物 2

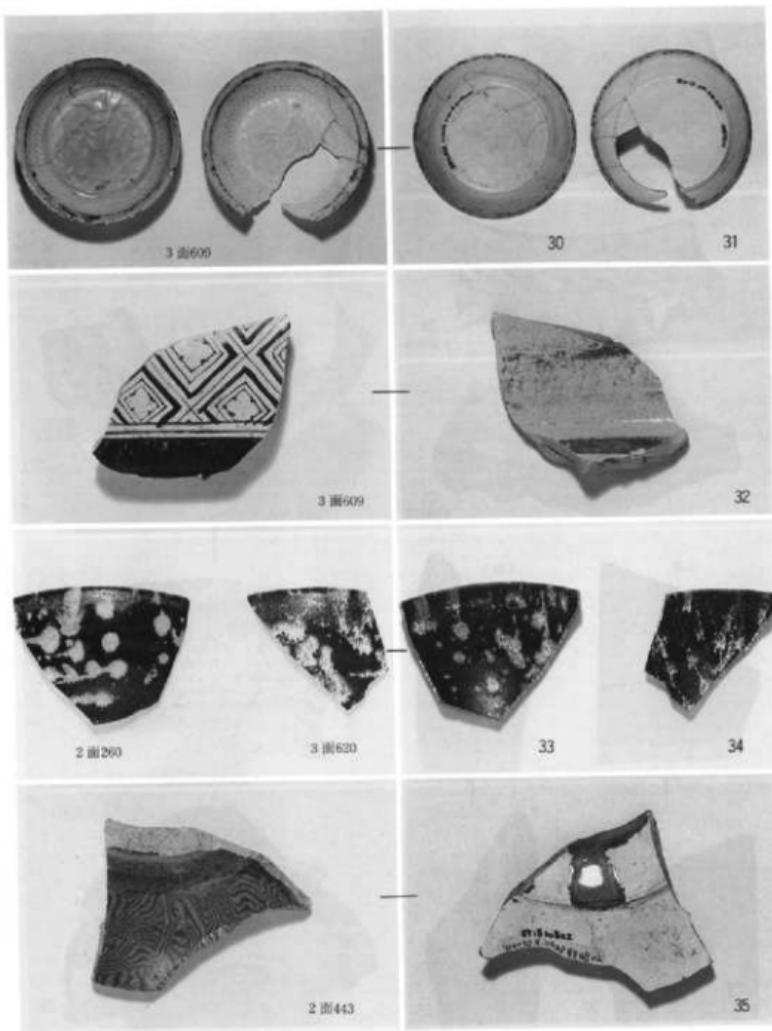


Fig. 115 その他の出土遺物 3

発泡してあれています。30・31は、青白磁の皿である。内面に印花文を施す。口縁は口ハゲとし、口縁部には油煙が付着する。32は、白釉鉄輪の陶枕である。33・34は、天目茶碗片である。吉州窯系か。35は、絞胎の壺片である。淡黄色の釉をかける。内面は白化粧する。

墨書

第50次調査で出土した墨書資料は、すべて中世の遺物であった。Fig.116~118に、写真を示す。内訳は、1・7・8（白磁碗）・9（陶器皿）・11（白磁碗）・17（白磁皿）・18（白磁碗）…花押、2（白磁碗）…「六」、3（白磁碗）…「朱八」、4（白磁碗）…「□元カ」、5（青磁碗）…「一」、6・15（白磁碗）…「徳綱」、10（白磁碗）…「孫綱」、12（白磁碗）…「二□」、13（白磁碗）…「夏カ」、14（白磁碗）…「廿」、16（白磁碗）…「郷大」、19（土師器環）…習字、20（白磁小碗）…「周綱」、21・22（白磁皿）…「七号」である。この他、「□綱」、「十」、「林」、「林+花押」、「全カ」、「□□川」などが出土している。

点数としては、花押が最も多い。また、博多遺跡群出土資料に比較的一般的にみられる「僧器」、「僧器□十内」などの墨書が、一点も出されていない点が注目される。僧云々という墨書が、その文字通り、寺院内で使われたものとすれば、第50次調査地点周辺には、寺院は建てられていなかったとも考えられよう。

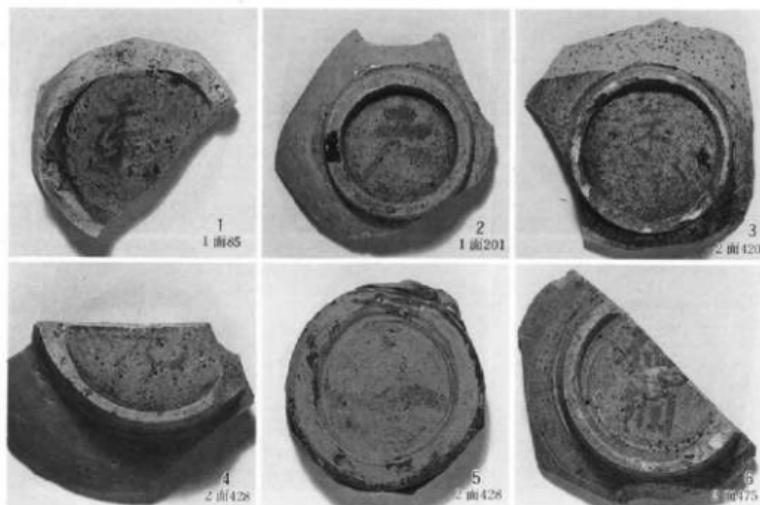


Fig. 116 墨書 1

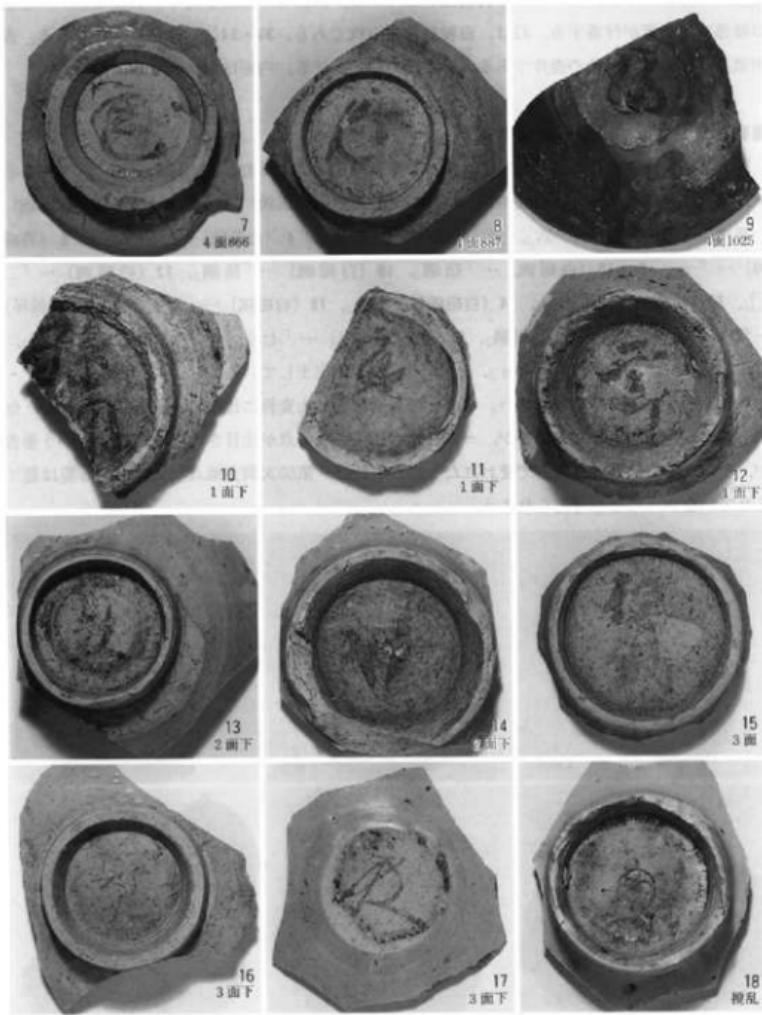


Fig. 117 墨书 2

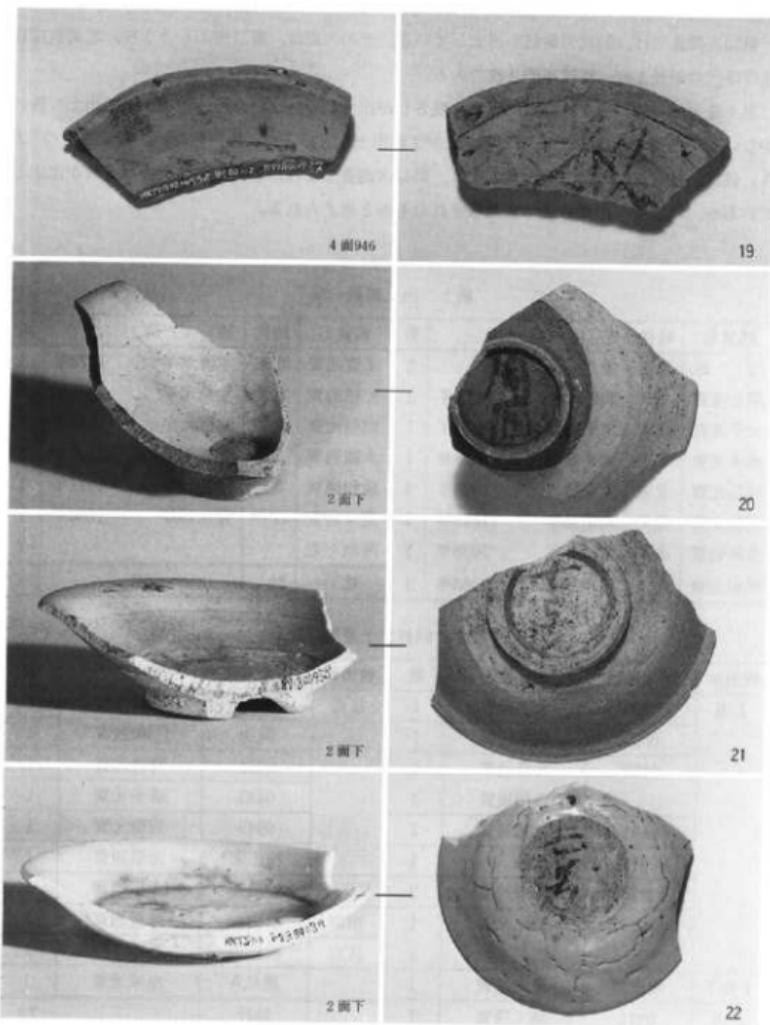


Fig. 118 墨書 3

銅錢

第50次調査では、23枚の銅錢が出土している。その内訳は、唐以前のもの3枚、北宋銭17枚、江戸時代の銅錢1枚、解説不能2枚である。

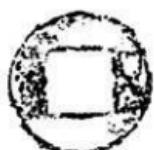
出土量としては、少ない部類に属し、銭さしが出土していない点や、遺構からの出土枚数の少ない点が指摘できる。また、「五銖」銭が2枚出土している点に注目したい。博多出土の「五銖」銭は、築港線関係第3次調査で1枚、第42次調査で2枚、本調査で2枚の計5枚が出土しているが、いずれも中世以後にもたらされたものと考えられる。

表1 出土銅錢一覧

錢貨名	時代	初 銘	数	錢貨名	時代	初 銘	数
五銖	後漢	後漢	2	元豐通寶	北宋	元豐元年	1078年
開元通寶	唐	武德4年	621年	1	元祐通寶	北宋	元祐元年
太平通寶	北宋	太平興國元年	976年	1	紹聖元寶	北宋	紹聖元年
咸平元寶	北宋	咸平元年	998年	1	大觀通寶	北宋	大觀元年
祥符元寶	北宋	大中祥符元年	1008年	1	政和通寶	北宋	政和元年
天聖元寶	北宋	元祐元年	1023年	1	寛永通寶	江戸	寛永13年
皇宋通寶	北宋	寶元2年	1038年	2	解説不能		
熙寧元寶	北宋	熙寧元年	1068年	1	總	計	23

表2 銅錢出土遺構一覧

検出面	出土遺構	錢貨名	数	検出面	出土遺構	錢貨名	数
I面	0026	太平通寶	1	II面	0420	大觀通寶	1
	0098	熙寧元寶	1		0428	政和通寶	1
	0156	元豐通寶	1		0438	祥符元寶	1
		政和通寶	1		0483	咸平元寶	1
	0191	元祐通寶	1		0945	天聖元寶	1
	0216	五銖	1		検出面	元豐通寶	1
	近世墓地	元豐通寶	2		II面下	大觀通寶	1
	検出面	紹聖元寶	1		III面	元豐通寶	1
I面下	検出面	解説不能	1		IV面	五銖	1
		皇宋通寶	1		擾乱A	皇宋通寶	1
II面	0321	開元通寶	1	総計			23
	0365	寛永通寶	1				



五 銖
第1面216



五 銖
第4面



開元通寶
第2面321



太平通寶
第1面026



咸平元
第2面483



祥符元寶
第2面438



天聖元寶
第2面945埋土



皇宋通寶
第1面下



元豐通寶
第2面



元豐通寶
第3面



元豐通寶
近世墓地



元祐通寶
第1面191



紹聖元寶
第1面



大觀通寶
第2面420



政和通寶
第1面156



政和通寶
第2面428

Fig. 119 銅錢拓本 (1/1)

第三章 まとめ

博多遺跡群第50次調査の概要について、主要な遺構を中心に述べてきた。報告書の末尾にあたって、調査成果をまとめるとともに、若干の点について、私見を付け加えたい。

調査成果の総括

1. 本調査では、4世紀から13世紀におよぶ遺構を調査した。
2. 古墳時代の遺構には、4世紀のものと6世紀のものとの2時期があり、竪穴住居跡・土壙などが検出されている。
3. 古代の遺構としては、奈良時代の井戸と平安時代前期の溝などが検出されている。
4. 平安時代前期の遺構から平安時代末の遺構までの間には、風成砂が厚く堆積しており、遺構が全く営まれなかつた時期がある。
5. 中世の遺構としては、土壙・柱穴・井戸・溝などがある。
6. 本調査区の西半部は、近世には、寺院の墓域にはいっていた。墓は、すべて改葬されていて、その際に掘削された墓壙掘り方から多量の近世・近代の遺物が出土した。

古墳時代の遺構・遺物について

古墳時代の遺構には、4世紀前半を中心とするものと、6世紀代に属するものとがある。4世紀前半の遺構としては、871号遺構・880号遺構・892号遺構・945号遺構・987号遺構・1015号遺構（以上、本文中に記述）、812号遺構・813号遺構・820号遺構・821号遺構・823号遺構・986号遺構・1014号遺構などがあげられる。このほかにも、古式土器器片を出土する遺構が多いので、さらに遺構密度は濃いものと考えられる。これらの間にも、厳密に言えば先後関係はあるものと思われるが、それを示すには、いたっていない。ただ、892号遺構の埋土上部出土の土器片と、945号遺構の埋土出土の土器片とで接合できた物が数点あり、両者が埋まっていく過程で並存していた可能性はある。

945号遺構は、その埋土の下層に、大量の土器が廃棄されていた竪穴住居跡である。Fig. 99-103についてこれを述べると、1～5・9・10・13～15・17～19・21～27・29・31・32・34・35が一括廃棄中の遺物であり、他は、一括廃棄も含めて、埋土中から出土したものである。在地系の土器（鉢5・15、壺16・18、甕17・19・20など）、畿内系の土器（鉢1～4、小形丸底甕10～12、甕13・14、甕21～27など）、山陰系の土器（脚付甕6・7、器台8、甕30、甕28・29・31・32など）がみられ、その構成は多様である。なお、固化していない土器を含めて、布留式系の甕が圧倒的に多い。ただし、この中には、器壁がやや厚めのものが含まれており、それら

については、在地産のものである可能性が強い。また、本文中でも触れたが、Fig.100-18の壺の内側には、べったりと赤色顔料が付着していた。さらに、Fig.103-34は、石杵で、一端には赤色顔料が染みこんでいる。35は、顔料こそ見られなかったが、形態から見れば、同様の可能性はある。赤色顔料の生成と貯蔵に関する遺物であるといえよう（これについては、P.107-108に分析の報告をいただいている）。これらの遺物から、一括廃棄の時期は、4世紀半ばに下限を持つと思われる。

6世紀代の遺構としては、905号遺構、906号遺構（以上、本文中に記述）、891号遺構、1021号遺構などを調査している。

652号遺構出土土師器について

本調査では、古代末から中世初めにかかる土器溜状の廃棄土壙が、数基検出された。これらからは、多量の土師器が出土している。とりわけ、652号遺構出土の土師器においては、その様相は多様であり、本文中では、十分に触れることができなかつた。そこで、ここであらためて触れ、整理を試みたい。

652号遺構出土の土師器は、大まかに言えば、底部の切り離し技法が、ヘラ切りから糸切りに転換する段階の土器である。法量的には、大法量をとる壺と小法量の皿とが認められる。以下では、皿・壺ごとにヘラ切り底と糸切り底にわけて、調整技法を主として細分する。なお、以下の記述では、土器の内底部に施されたナデ調整を内ナデ、外底部についた板目圧痕を板目痕、回転ナデ調整後に半乾きの状態で、内面の体部と底部との屈曲部に行われた横方向のナデ調整を静止ナデ、と略す。また、法量は、Fig. 46-47に図示したものの他、3分の1以上の破片から計測したものである。

皿

ヘラ切り

- A 内ナデ、板目痕、静止ナデを行う。Fig.56-8・18・26・34・36・47・49・56・59・61・68～76,
口径8.8～10.0（平均）9.41 器高1.2～1.7（平均）1.35 個体数 20
- B 内ナデ、板目痕を行う。胎土・形態から細分が可能である。
1. 胎土・形態ともAと共通する。Fig.56-41・44～46・50～52・57・58・60・64～68,
口径8.4～10.0（平均）9.4 器高1.05～1.55（平均）1.29 個体数 50
 2. 形態はAと類似。胎土は微砂質で肌理が粗い。淡灰褐色を呈する。Fig.56-5・7・
13・37, 口径8.8～9.3（平均）8.9 器高1.3～1.7（平均）1.51 個体数 5
 3. 体部は中位に屈曲を持つ。胎土は微砂質で肌理が粗い。Fig.56-25・43・67,
口径9.1～9.7（平均）9.3 器高1.2～1.8（平均）1.44 個体数 5

4. 丸底気味を呈する。胎土は微砂質で肌理が粗い。Fig.56-16・29,
口径8.2~9.2 (平均) 8.8 器高1.15~1.7 (平均) 1.46 個体数 5
5. 器高が低く、浅い。体部は、外反して小さく立ち上がる。薄手。焼成は良好。Fig.56-
4・19~24・32・38・40・42・54・62,
口径8.4~10.0 (平均) 9.16 器高0.75~1.3 (平均) 1.06 個体数 47
6. 底径は小さく、器高は高い。体部は中位に屈曲を持ち、丸味を持つ。Fig.56-30
口径9.2 器高1.65 個体数 1

糸切り

C 内ナデ、板目痕を行う。胎上、形態から細分が可能である。

1. 体部中位に綾い屈曲を持つ。茶褐色。Fig.56-14・55,
口径9.0~9.8 (平均) 9.3 器高1.1~1.5 (平均) 1.3 個体数 8
2. 器高が低く、浅い皿形を呈する。胎土は微砂質で肌理が粗い。淡褐色。Fig.56-10,
口径8.3~9.0 (平均) 8.5 器高1.0~1.15 (平均) 1.08 個体数 5
3. 器高が低く、浅い皿形を呈する。体部下半を回転ヘラ削りする。Fig.56-11・53,
口径9.1, 9.5 器高1.0, 0.9 個体数 2

D 内ナデ、板目痕、静止ナデを行う。形態から 2 タイプに別れる。

1. 丸味を持つ体部が、大きく開きつつ立ち上がる。Fig.56-33,
口径9.3 器高1.25 個体数 1
2. 器高が低く、浅い皿形を呈する。体部は中位に屈曲を持つ。Fig.56-2,
口径8.4 器高1.0 個体数 1

E 静止ナデを行う。胎土はやや肌理が粗い。Fig.56-9・12・15・27・28・31・35・38・63,
口径9.0~9.6 (平均) 9.1 器高0.95~1.6 (平均) 1.39 個体数 9

F 内ナデ、板目痕、静止ナデなどはまったく行わない。Fig.56-1・3・11・48,
口径8.3~9.4 (平均) 8.78 器高1.2~1.4 (平均) 1.33 個体数 4

坏

ヘラ切り

- A 内面にコテをあてて、平滑に仕上げる。体部は下方に押し出し、丸底を作る。Fig.57-
73・74・77・78, 口径15.2~15.7 (平均) 15.5 器高2.55~3.4 (平均) 3.01 個体数 4
- B 内面にコテをあてて、平滑に仕上げる。体部は押し出さず、平底となる。Fig.57-79,
口径16.2 器高3.0 個体数 1
- C 内ナデ、板目痕を持つ。平底またはやや垂れ気味の平底を作る。Fig.57-71・72・75・78,
口径14.6~15.8 (平均) 15.2 器高3.0~3.2 (平均) 3.13 個体数 4

糸切りするものはない。

以上の諸要素を、個体数の多い皿について整理すると、胎土・色調では、やや砂粒を含み褐色を呈するものと、全体的に砂質で肌理が粗いもの、砂質で肌理が粗く淡灰色を呈するものがある。量的には、前者が圧倒的に多く、ヘラ切りでも糸切りでも土体となる。胎土の違いは、生産地の違いに基づくものである。現段階では生産地を特定するにはいたらないが、前者の胎土を持つものは、博多遺跡群では、その後も主流を占めるものであり、博多遺跡群における需要の大部分を担っていたとともに、内ナデ・静止ナデ・底部切り離し技法の違いなどが、同一生産地内における、生産単位程度の違いに基づくものであることを示している。さらに、これらの細かい技法上の相違は、法量の違いとも結び付いており、生産品に対する規制の緩さを物語るものと考えられる。この前後の段階を見ると、技法上の多様性はみられず、形態的にも2~3タイプの並行に限られるようである。したがって、652件遺構における多様な土器の様相は、糸切り技法の導入期における技法上の混乱を示すものと言えるのではないだろうか。

近世・近代の貯金箱について

第1面において除去した近世以後の墓壙から、その改葬時に擾乱された様々な遺物に混じって、土師質土器の貯金箱が出た。紀年銘を持つもので、その後の形態的な変化が終えるので、紹介しておく。Fig.120-2は、体部の周囲に墨書きがなされている。壺形の土器で、上面は平らに施ぎ、その中央にヘラで、一直線にスリットを入れる。底部は平らで、中央は削られ、中身を取り出したものと思われる。墨書きは、正面に「人福帳」とあり、これが貯金箱であることが知られる。紀年は、「嘉永2年」(1849年)である。本調査では、さらに3点の貯金箱が出土している。Fig.120-6は、博多遺跡群第39次調査で出土した貯金箱である。擾乱部分からの出土で、年代を特定できないが、擾乱そのものは、第2次大戦後のものと見られるので、この土器も昭和前半におくことができよう。やはり、壺形土器であるが、薄手・小振りで、頭部と底部が締まり、肩部上位で肩がつく。肩部には、3ヶ所に穿孔がある。底部には、回転糸切り痕が残る。Fig.120-3~5は、肩の張りは小さく、底径は大きい。底部には、糸切り痕は、見られない。肩部の穿孔は、2ヶ所である。これらの点から、2と6との間に位置付けることができよう。

Fig.120-1に示したものは、土師質土器で、蓋である。身の形は不明だが、おそらくは壺形で、墨書きの跡がりから推定すると、かなり深いものであろう。墨書きは、全面になされている。紀年は、「安政6年」(1859年)である。

最後に、第50次調査で出土した遺物のほとんどは未だ実測されておらず、写真・実測図等の記録類も十分に紹介できなかったことをお断りしておく。



Fig. 120 近世以降の遺物

博多遺跡群50次調査の赤色顔料について

福岡市埋蔵文化財センター 本田 光子

945号遺構出土の片口付き壺形土器 (Fig.100-18) 及び石杵 (Fig.103-34) に付着している赤色顔料について、その種類と状態を明らかにするために顕微鏡観察とX線分析を行った。試料の形状、残存量、状態から土器については蛍光X線分析、X線回析の測定を、石杵についてはX線マイクロ分析 (EPMA)、微小部X線回折 (MDG) を行った。

試料

No.1 (片口付き壺形土器) 上器内面に薄く残っているのだが、赤色顔料粒子が単に付着しているというのではなく、何等かの方法で磨かれたよう見える。X線分析には土器破片をそのまま測定した。検鏡用には針先に着く程度を採取し、プレパラートを作成した。

No.2 (石杵) 棒状石杵の磨部に極めて僅かの赤色顔料が残っている。実体顕微鏡下20倍で石材凹部に残っている赤色顔料を針により採取した。これを5mm角の両面テープに付けてEPMA、MDGの測定試料とした。また、検鏡用にはプレパラートを作成した。

顕微鏡観察

光学顕微鏡により反射光・透過光40~400倍で検鏡した。

蛍光X線分析

赤色顔料の主成分元素の検出を目的として次の条件で測定を行った。測定は宮内庁正倉院事務所成瀬正和氏による。装置：理学電機工業製蛍光X線装置、X線管球：クロム対陰極、分光結晶：フッ化リチウム、検出器：シンチレーションカウンター、印加電圧-印加電流：35KV-15mA、走査速度：208°/分、時定数：0.5秒

X線回析

赤色の由来となる鉱物成分の検出を目的として次の条件で測定を行った。測定は宮内庁正倉院事務所成瀬正和氏による。装置：理学電機製文化財測定用X線回析装置、X線管球：クロム対陰極、フィルター：バナジウム、検出器：シンチレーションカウンター、印加電圧-電流：25KV-10mA、発散スリット：0.34°、受光スリット：0.34°、照射野制限マスク（通路幅）：4mm、走査速度：204°/分、時定数：2秒

X線マイクロ分析

赤色顔料の化学組成を定性分析するため、次の条件で測定を行った。測定は東京芸術大学保存科学研究所宮田順一氏による。装置：日本電子社製JXA-50A、加速電圧：15KV、吸収電流値 10^{-8} A、分光結晶：フッ化リチウム、ベンタ・エリスリトール、酸性フタル酸水素ルビジウム、ステアリン酸鉛。

微小部X線回析

赤色の由来となる鉱物成分の検出を目的として次の条件で測定を行った。装置：理学電機㈱製ロータフレックスRAD- γ C+PSPC/MDG, 管電圧：50KV, 管電流：190mA

結果

No 1 検鏡により赤色顔料としては朱粒子のみを認めた。蛍光X線分析では赤色の由来となる主成分元素として水銀、鉄が検出された。両者の相対強度比は、水銀が鉄に比べて大であった。この他、マンガン、ストロンチウム、ルビシウムなどの元素が検出されたが、それらはみな主として胎土部分に由来するものと考えられる。但し鉄は胎土部分にも必ず含まれ、顔料の採取を行わない今回の分析では赤色顔料由来のものとの区別は困難である。X線回析では赤色の由来となる主成分鉱物として赤色硫化水銀が同定された。この他、石英、長石などが確認されたが、それは主として胎土部分に由来するものと考えられる。

No 2 検鏡により赤色顔料としては朱粒子のみを認めた。EPMAでは赤色の由来となる主成分元素として水銀、硫黄が検出された。MDGでは赤色の由来となる主成分鉱物として赤色硫化水銀が同定された。

考察

以上の結果から、片口付き壺形土器、石杵に付着している赤色顔料は朱（硫化水銀HgS）であることがわかった。古代の赤色顔料には朱とベンガラがある。ベンガラを磨った石器は定形ではないが、朱については弥生時代後期から古墳時代前期に限って定形の石杵がある。⁶本例もこの石杵（棒状石杵c類）であり、片口のある土器と共に伴している事実が何より興味深い。両者には同じように朱が付いている。これらが直接組み合わされたとは考え難いが、これらを用いての所作は想定できるかもしれない。何にしても古代中国では「仙薬」であった朱が、日本の古墳時代前期にどのように扱われていたかを、具体的に考えるための重要な共伴資料であることは間違いない。類例の出土に期待すると共に、今までに出上した赤色顔料付着土器あるいは石杵についても細かい観察と分析が望まれる。^{**}

測定をお受け下さいました成瀬正和、宮内順一氏に感謝致します。

* 本田光子(1990)「石杵考」『古代』90

** 今回は10ミクロン前後の朱粒子が十数個で同定できたわけで、肉眼で確認できないものでも充分に分析できる。これは宮田氏の労に依るところが大きい。

福岡市

博多21

福岡市埋蔵文化財報告書第249集

1991年3月15日発行

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 博巧印刷株式会社

福岡市南区那の川1丁目9の4